

今帰仁村の遺跡

分布調査報告書

1984年 3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村の遺跡

分布調査報告書

は じ め に

今帰仁村には、先史時代からグスク時代及び近世にかけての遺跡が数多く所在することが今回の調査で明らかになりました。

これらの遺跡は、その時期それぞれの時代に生きた人々の文化や生活跡の時代考証になる貴重なものであります。

これまでに、多和田真淳氏や外の皆さんによって調査がなされ、その概要が村史に報告されています。今回の調査で新しい遺跡や貝塚、遺物散布地が多く確認されました。これまで以上の保護対策と諸関係機関との調整が必要かと存じます。

本村も例外ではなく、諸公共事業や開発事業がなされ、いくつかの貝塚や遺跡が消滅したり、破壊しかけている現状があります。いま以上に、その保護及び活用の周知が必要になります。

本報告書が、埋蔵文化財の保存思想の普及と理解を深める資料になればと存じます。

また、学校教材、社会教育の場で利用できれば幸であります。

最後に、本事業に御協力をいただいた、文化庁、県並びに調査員そして、調査に協力くださった関係各位に厚くお礼を申し上げます。

今帰仁村教育委員会

教育長 大城 勝三

例 言

1. 本報告書は、今帰仁村教育委員会が国補助80%、県補助10%、村負担10%で、昭和56年度から58年度に実施した遺跡分布調査の報告書である。

2. 調査は昭和56年5月1日から昭和59年3月19日まで実施した。

調査責任者 今帰仁村教育委員会

教育長 大城 勝三

調査指導助言 沖縄県教育庁文化課

専門員 上原 静

調査担当 今帰仁村教育委員会

社会教育課 松田 朝雄

臨時職員 仲村渠 智

3. 本報告書に記載した埋蔵文化財包蔵地は44ヶ所である。これは昭和59年3月現在のものである。今後の調査や発見によって増加することが考えられる。

4. 本報告書で使用している25,000分の1の地形図は、建設省国土地理院の承認を得て複製したものである。

5. 2,500分の1の地形、地籍併合図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の5,000分の1の国土基本図を使用して調整したものである。

目 次

I. 調査の概要	1
II. 今帰仁村の概要	2
III. 今帰仁村内の遺跡一覧表	5
IV. 村内遺跡編年略図	6
V. 今帰仁村内の遺跡概要	7
VI. 遺跡分布図	82

I 調査の概要

本村においては、特に海洋博時に大型公共工事や大規模な分譲宅地造成工事等により、貴重な遺跡や貝塚が壊滅されたりしている。

また、前後として海岸線近くの砂丘地や畑地内からの採砂事業等により消滅を受けている。最近では、これまでに大型の機械力の導入が困難であった地域や荒蕪地などが簡単に開発可能になったところから、到るところで開墾や農地化が促進され、周知の遺跡などでは機械力の深耕により埋蔵遺物が表面に散乱するという結果を招いている。

今後においても、大小の地域開発や諸公共工事の計画、実施が増加するものと予想される。そこで、開発事前に調査を行ない関連する諸開発関係機関との保護調整が図られるべきである。将来もずっと増加するであろう諸開発事業で、開発か保存かといった構図ではなく、開発する側も事前にその遺跡の所在が確認できれば破壊なしの対処策が立案され得ることです。

そこで、今回の遺跡分布調査は村内にあるそれぞれの遺跡の時期、位置、範囲の確認を把握し「周知の遺跡」としての認識化を促し、その保存の重要性和活用面を大事にしていく目的で実施した。調査は表面調査が主である。調査後は、各遺跡の所在地や立地、時期、表採遺物などの分布範囲を記録用紙に記した。

この間の調査で44ヶ所の遺跡の所在が確認されている。今後、これらの埋蔵文化財の保護が特に配慮される。また、それらの活用を通して文化財愛護の醸成とその効果を期待したい。

II 今帰仁村の概要

今帰仁村は、沖縄本島北部の本部半島北東部北緯26°38'、東経127°58'に位置し古宇利島及び佐我屋島（無人）の2つの離島から成り立っている。村の中央部南に乙羽山（標高289m）が最高を計り、東西に丘陵となって延びている。

乙羽山から北側にかけて緩やかな傾斜地が拡がり、中央部付近で凹地を形成し北側にかけて段丘状の地形を示している。乙羽山を中心として国頭マージ層があり、それ以外のところは全んど島尻マージ層の土壌である。また、古宇利島は低平な平坦地の地形で、海岸線から島の中央部にかけては海岸段丘状を示し、傾斜をもちながら平地になる島である。島の中央付近は二畳紀の与那嶺層が一部で、外は島尻マージ層で被われる。島の周囲は珊瑚礁が発達し、特に東側運天付近から西側今泊付近にかけてのラグーンの発達は素晴らしく、その内側は貝や魚が取れる好漁場となる。

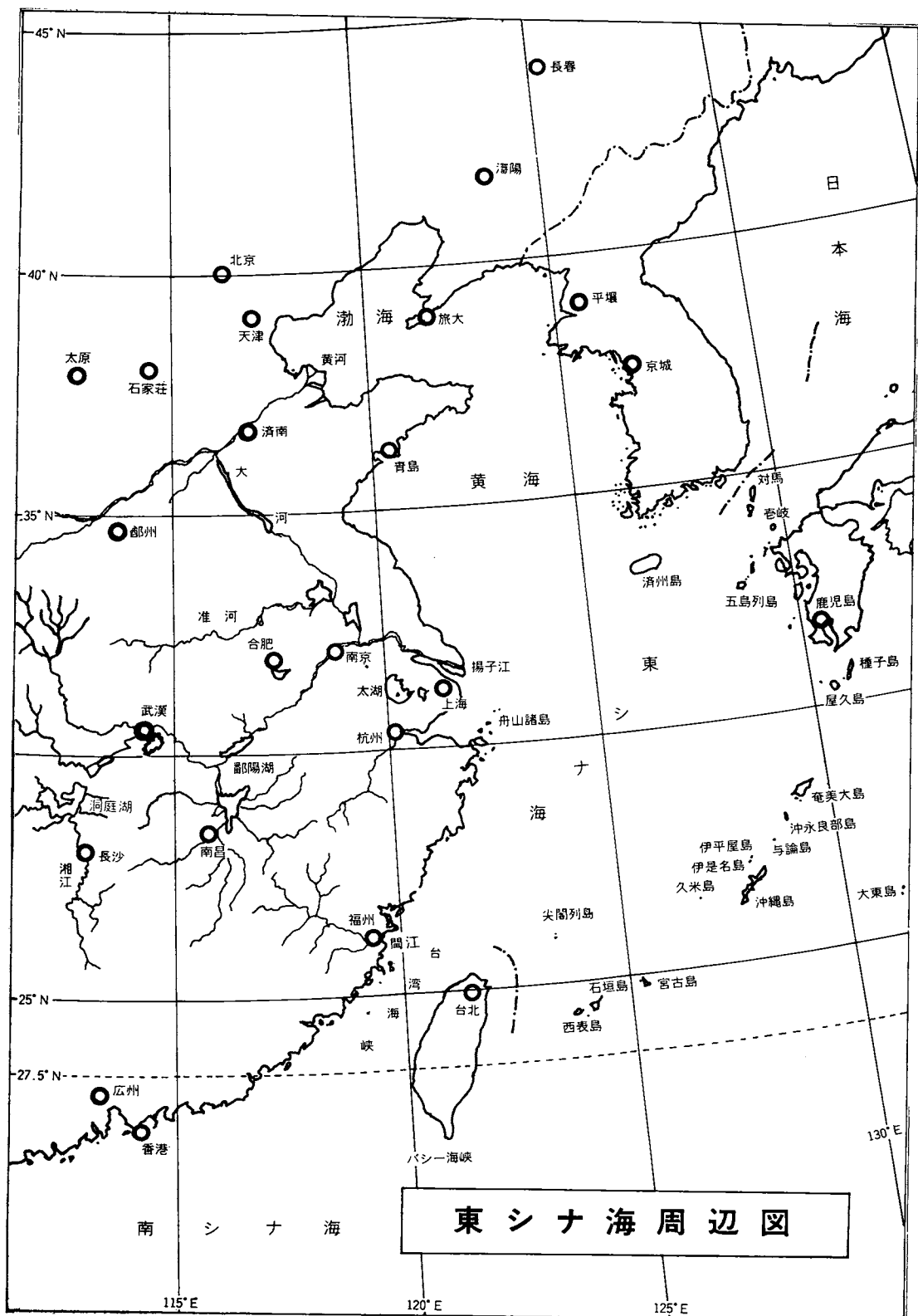
村の総面積は39.37km²で、'84年2月現在の総人口は9,700人余で、そのうち古宇利島は400人余である。古宇利島の面積は3.0km²で周囲は7.88km²である。島の最高標高は107.4mである。港湾は古宇利港と運天港で、運天港は重要港湾になっている。また、指定漁港として古宇利漁港と運天漁港がある。

古宇利島への交通は、定期船が運天港～古宇利港間を1日5回往復している。航距離は2.3kmで片道10分の時間である。

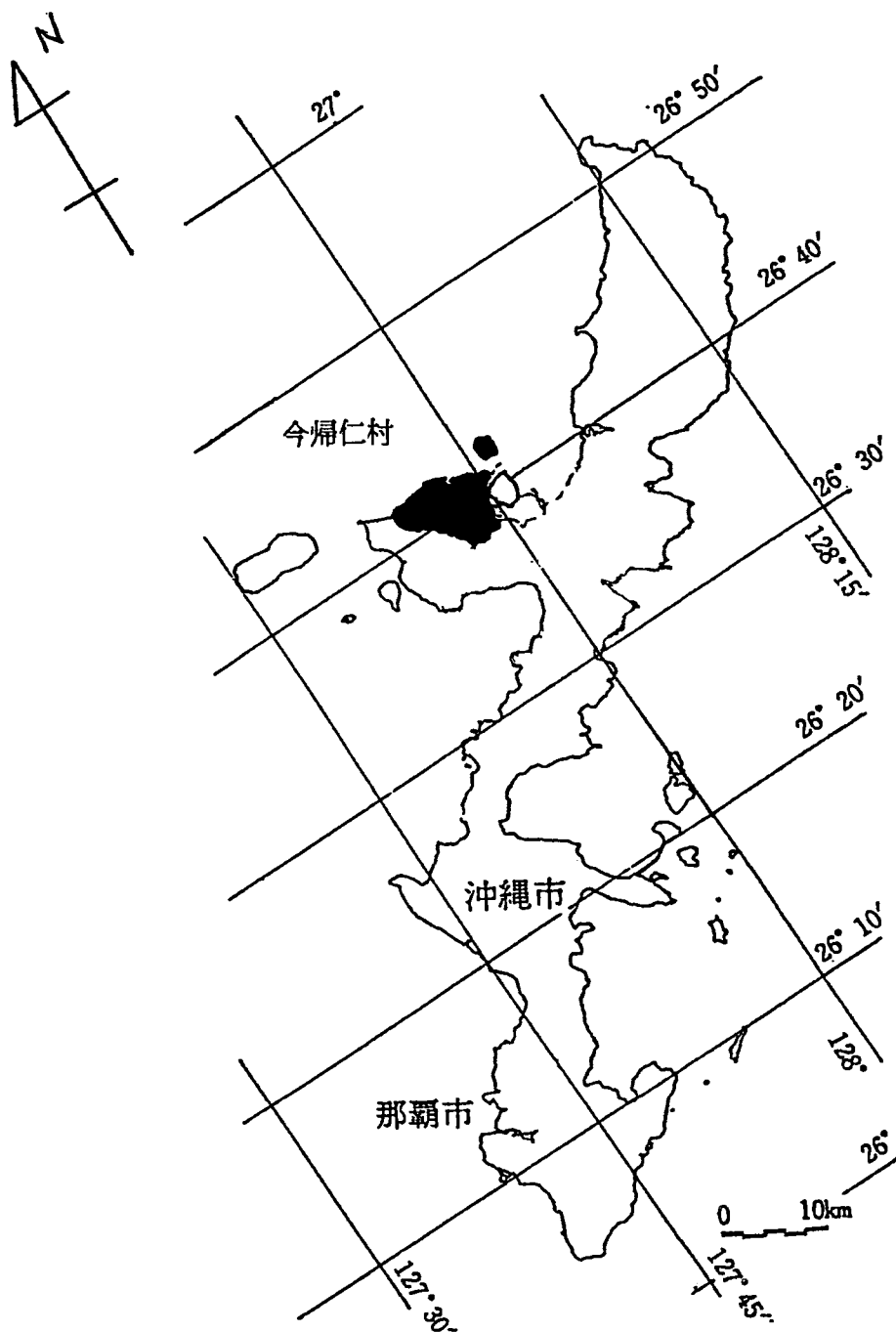
村の産業構造は第1次産業が45.4%、第2次産業が17.7%、第3次産業が36.9%となり農業経済を主体とする産業構造である。作物類は、さとうきび、パインアップル、たばこ、すいか、花卉などで、他に畜産や漁業が行なわれる。

村の先史時代については、これまでにあまり明らかではなかったが、近年になって諸発掘調査がなされ、その概要が明らかになりつつある。

これまでに実施された調査としては、渡喜仁浜原貝塚（1977年）、西長浜原遺跡（1978年）、'80年から調査がすすめられている今帰仁城跡、'82年に実施された古宇利原A遺跡などがある。それらの調査より、沖縄貝塚時代の前期末～中期、後期、グスク時代にかけてのことがそれぞれ解明されつつある。



今帰仁村の位置



III 今帰仁村内の遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	所 在 地
1	古宇利原 A 遺跡	(字) 古 宇 利
2	古宇利原 B 遺跡	古 宇 利
3	中原遺跡	古 宇 利
4	古宇利グスク	古 宇 利
5	古宇利原 C 遺跡	古 宇 利
6	運天貝塚	運 天
7	アガリクンジャー貝塚	運 天
8	シガイバンタ貝塚	運 天
9	松堂原貝塚	運 天
10	ウパカ遺跡	運 天
11	阿那川原遺跡	上 運 天
12	ウンスマヌウガンジュ (拝所)	上 運 天
13	親川原遺跡	上 運 天
14	運天港土器出土地	上 運 天
15	メヌバマヌウガンジュ遺物散布地 (拝所)	上 運 天
16	浜原貝塚	渡 喜 仁
17	長根原遺跡	仲 宗 根
18	白浜貝塚	仲 宗 根
19	シチャガブ遺跡	湧 川
20	兼久原遺跡	湧 川
21	アタガー遺物散布地	湧 川
22	シイナグスク	湧 川
23	ウチグスク	玉 城
24	ウンジョウヘイ遺跡	謝 名
25	謝名遺跡	謝 名
26	小浜原遺跡	越 地
27	越地貝塚	越 地
28	ウンビナビスクガマ遺跡	平 敷
29	平敷ウガン (拝所)	平 敷
30	イチグスク墓遺物散布地	平 敷
31	港原第 1 遺跡	崎 山
32	港原第 2 遺跡	崎 山
33	港原第 3 遺跡	崎 山
34	仲尾次貝塚	仲 尾 次
35	東長浜原遺跡	与 那 嶺
36	西長浜原遺跡	与 那 嶺
37	仏ン当遺跡	与 那 嶺
38	崎原遺跡	与 今 泊
39	兼次古島遺跡	兼 次 志
40	諸志御嶽	諸 志
41	ハナグスク	仲 尾 次
42	アカン墓遺物散布地	今 泊
43	今帰仁城跡	今 泊
44	ミームングスク	今 泊

IV 村内の遺跡編年略図

遺跡名	時代	沖縄貝塚時代			グスク時代	歴史時代
		前期	中期	後期		
古宇利原A遺跡		_____				_____
古宇利原B遺跡		_____				
中宇利原遺跡		_____				
古宇利原C遺跡					_____	
運天貝塚		_____			_____?	
アガリクンジャー貝塚				_____		
シガイバンタ貝塚				_____		
松堂原貝塚				_____		
ウパカ遺跡					_____	
阿那川原遺跡						_____
ウンスマヌウガンジュ(拝所)					_____	
親川原遺跡					_____	
運天港土器出土地		_____				
メーヌバマヌウガンジュ(拝所)					_____	
遺物散布地(貝塚)			_____			
長根原遺跡			_____			
白浜貝塚				_____		
シチャガブ遺跡		_____				
兼久原遺跡		_____?				_____
シイナグスク					_____	
ウチグスク					_____	
ウンジョウヘイ遺跡			_____		_____	
謝名遺跡					_____	
小浜原遺跡			_____			
越地貝塚				_____		
ウンビナビスクガマ遺跡		_____				
平敷ウガン(拝所)					_____	
イチグスク墓遺物散布地				_____		
港原第1遺跡				_____		
港原第2遺跡				_____		
港原第3遺跡				_____		
仲尾次貝塚				_____		
東長浜原遺跡			_____			
西長浜原遺跡			_____			
仏ン当遺跡		_____				
崎原遺跡					_____	
兼次古島遺跡				_____		
諸志御嶽					_____	
アカン墓遺物散布地					_____?	
今帰仁城跡					_____	
ミームングスク					_____	

V．今帰仁村内の遺跡概要



古宇利原 A 遺跡近景（北側より）

1 古宇利原 A 遺跡

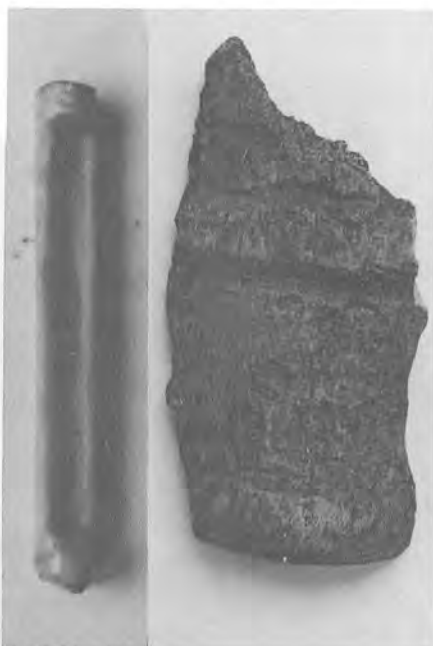
古宇利島の南側、古宇利港より約30mほどのぼった標高約7mの海岸段丘上に形成されている。

遺跡はこれまでに道路の拡幅工事、港湾建設工事、公民館建設工事などによりかなり破壊されている。

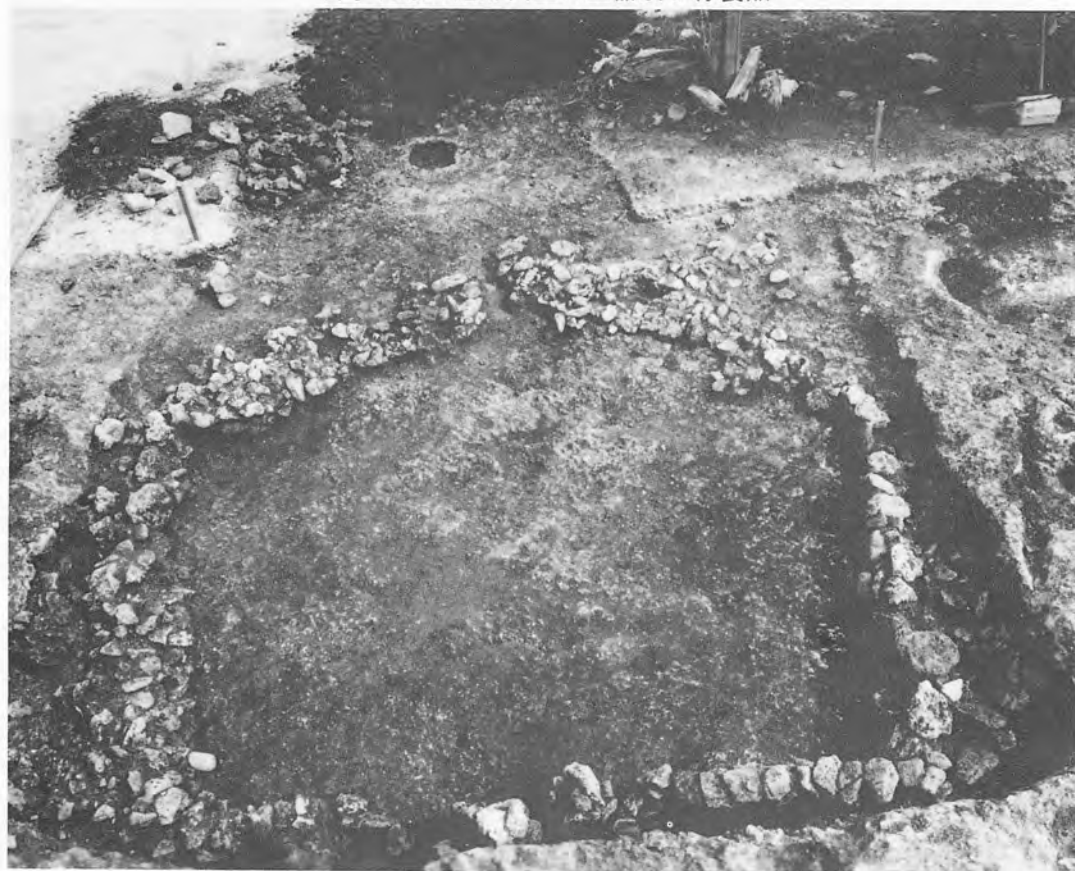
したがって、本調査時には公民館の中庭などではすでに遺物包含層の露頭が確認される状況にあった。

本遺跡はこれまでに何回かの表面調査がなされているが、離島振興事業の一環としての「農村環境改善センター」の建設工事が計画化されたことにより、村教育委員会が昭和57年度に遺跡の範囲確認調査を実施している。遺跡は沖縄貝塚時代の中期に属するものと考えられていたが、調査により前期、中期の遺物や環状集石遺構が一基、そして、近世の石積み留井戸、岩盤をくり抜いた柱穴遺構などが検出され、貝塚時代前期～中期と近世代の複合遺跡であることが確認されている。

また、遺跡の範囲は北側の宅地及び南側の道路下にも延びることが確認されている。



古宇利原 A 遺跡出土の土器及び骨製品



同遺跡の環状集石遺構



古宇利原 B 遺跡近景（南東側より）

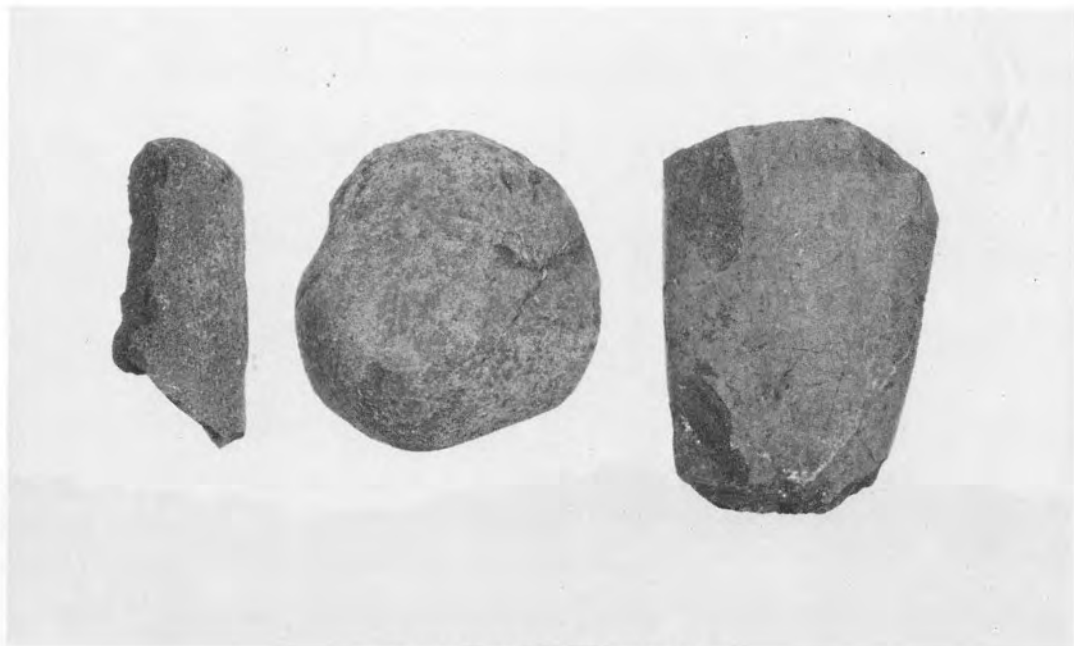
2 古宇利原 B 遺跡

古宇利原 A 遺跡より東側へ約400mほど行った集落のはずれ近くにあつて、標高約20mの海岸段丘上に形成された中期の遺跡である。

南側には砂浜が拡がり、北側にかけては緩やかな傾斜地となっている。

遺跡は墓を造るために一部破壊を受けているが、全体的に保存状況は良好である。現在、畑地となつていて、遺物は畑地及び墓地近くから得られた。

遺物は中期系の土器、石斧、磨石、貝殻類などが表面採取された。



古宇利原 B 遺跡表採の石器



同遺跡表採の土器



中原遺跡遠景（北側より）

3 中 原 遺 跡

古宇利小中学校より、北側へ約30m程のぼった標高約85mの平坦地に形成された中期の遺跡で、現在、畑地及び荒地となっている。

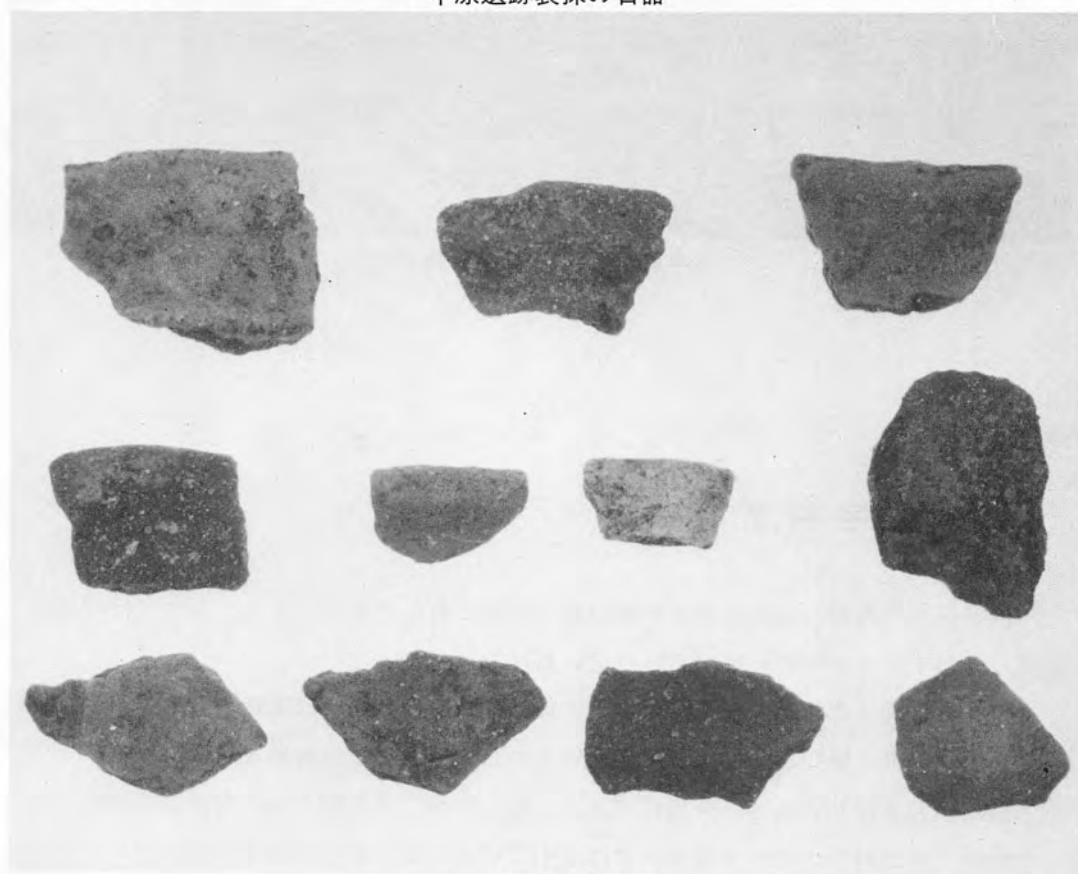
遺物は畑地内より多く採取されるが畑の畦道断面や周りの雑木林内からも土器の小破片が表採される。

これまでも表面調査がなされている周知の遺跡で、当時の採集遺物は古宇利小中学校で大事に保管され、小中学生の教材に利用されている。

今回の調査では、中期系の土器、石斧、石器片、貝殻類などが採取された。



中原遺跡表採の石器



同遺跡表採の土器



古宇利グスク近景（東側より）

4 古宇利グスク

古宇利島の西側、標高約30mの海岸線の崖縁にあるグスクである。かつては崖端に沿ってわずかばかりの石垣があったといわれる。

現在、付近は農耕地となり厚い客土で被われ、遺物の採取は困難である。

雑木林の中に雑な石畳様の石が岩と岩との間に積まれるが判然としない。

島に伝わる話として「今帰仁グスクと競いあうごとく築き始めたが、今帰仁グスクが早く築かれたので古宇利グスクは途中で中止した。」という伝承が残っている。



古宇利原C遺跡近景（北側より）

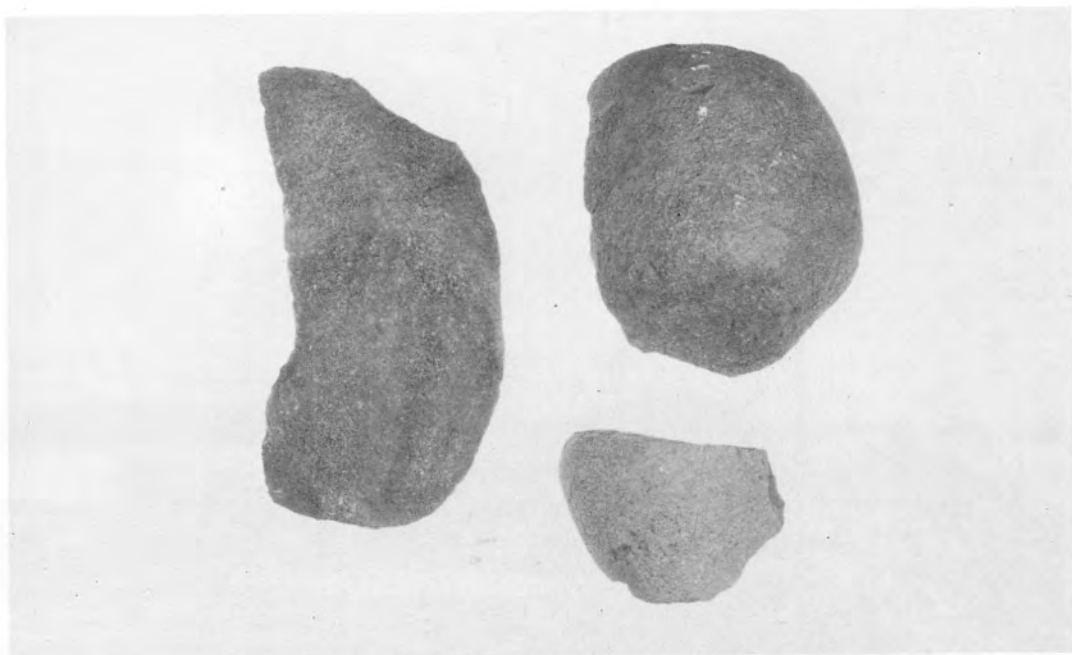
5 古宇利原C遺跡

遺跡は、古宇利原A遺跡の北西方約50m、標高約25mの石炭岩台地上に立地するもので、古宇利原A遺跡の一部まで及び一部重複したかたちをとっている。現在、遺跡の中心部は宅地及び拝所となっている。

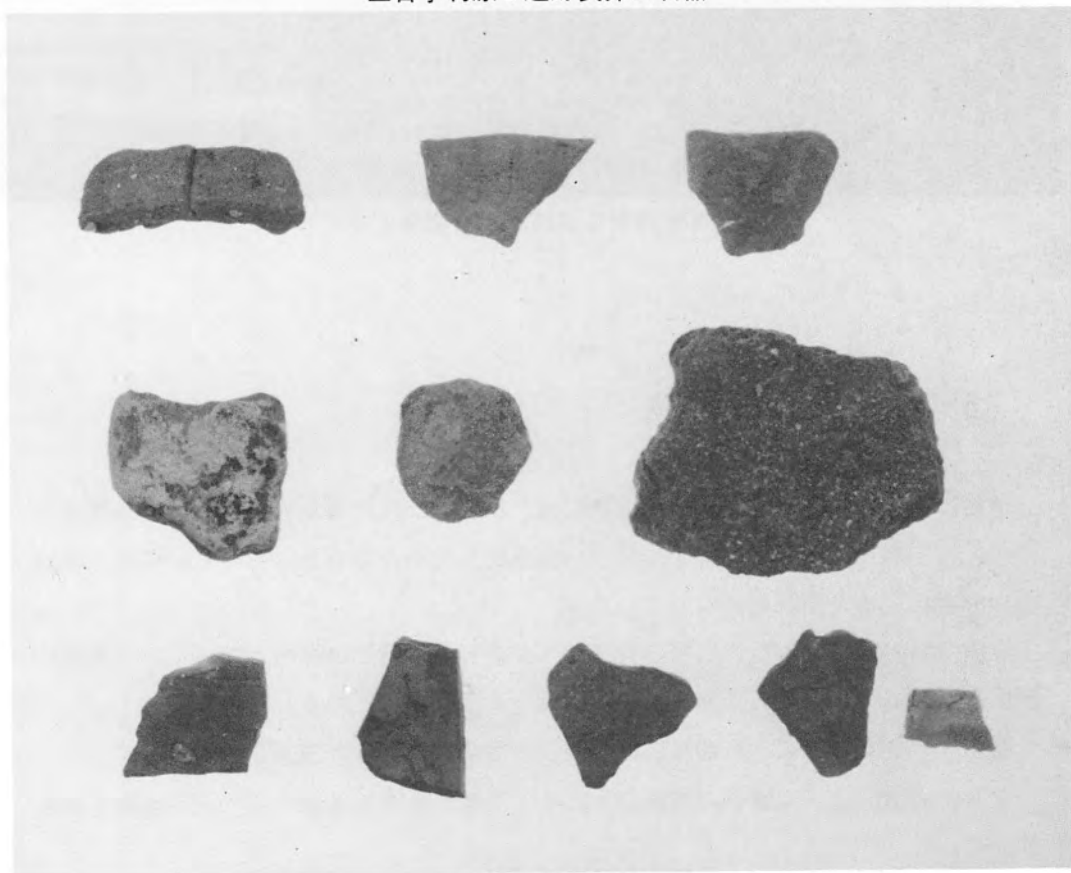
北側は島の祭事を行なう広場と神アサギがあって、遺物は拝所となっている岩山の斜面及び周辺の畑、そして南側の海岸線近くまで散布している。

遺物はグスク系土器、石器片、青磁器、近世陶器片などが表面採取される。

なお、同遺跡は『沖縄県の遺跡分布』——沖縄県教育委員会——で大泊遺跡と紹介されている。



▲古宇利原C遺跡表採の石器



同遺跡表採の土器



▲運天貝塚遠景（西南側より）

6 運 天 貝 塚

本貝塚は1967年頃～69年頃にかけて、新田重清氏や多和田真淳氏によって試掘調査が行なわれているもので、その概要が『今帰仁村史』に報告されている。

貝塚は字運天のクンジャー部落の東側、標高約5mのところに形成されている。遺跡の北側は古宇利島を望み、海浜が大きく広がっているところである。後背地の南側は標高約20m程の崖状台地が拡がり当遺跡地を半円状に取り巻いている。

貝塚近くに自然湧泉があり、一年を通じて流れている。20年前までは水田耕作がなされている。

現在は農耕地となり、大型機械等による耕耘により遺物が地表面に散乱している。遺物は、排水溝や畑の土手、崖の途中のテラス状台地や崖上の台地からも得られるが特に畑地内から採集される遺物の量が多い。

遺物は前期～後期の土器、そして青磁器や須恵器などがみられ、特に磨石、叩石、石斧などの石器類が多く採取された。他に貝殻類、獣骨なども得られている。



▲運天貝塚表採の石器



▲同貝塚表採の土器



▲同貝塚表採の遺物



▲アガリクンジャー貝塚近景（南西側より）

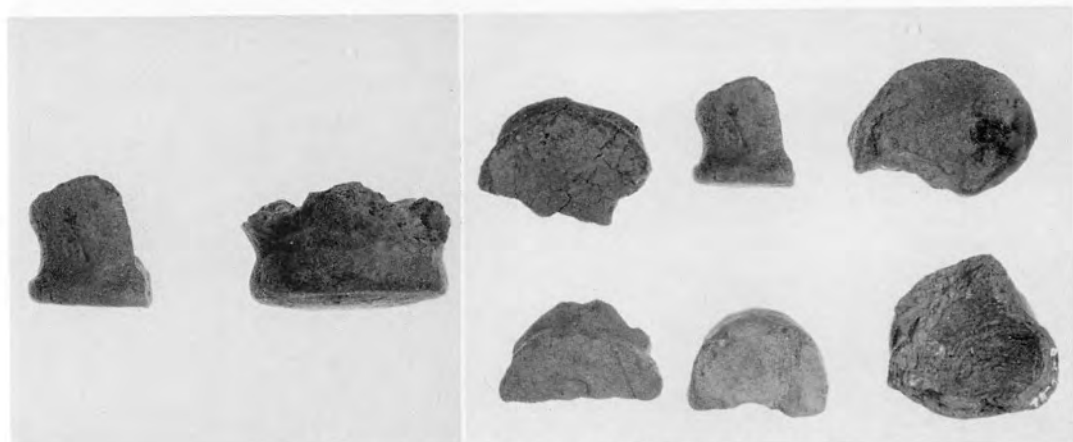
7 アガリクンジャー貝塚

貝塚は字運天クンジャー集落のはずれ東側に形成されている。当貝塚の東側約 150m 隣りに運天貝塚がある。

貝塚は標高約 5 m 程の砂丘地に立地し、海岸線近くから後背の崖下裾部まで広がる後期の貝塚である。付近は畑地及び宅地となっていて、畑地表面にはおびただしい貝殻が散乱している。また、一部は採砂により破壊を受けている。

採砂跡地の畑地断面には黒褐色の混貝砂層が観察され、層中に土器などを確認することができる。

遺物は後期系の土器、磨石、海獣骨、貝殻類などがあり、その分布は特に畑地内から崖下にかけて散在する。



▲アガリクンジャー貝塚表採の土器



▲同貝塚表採の遺物

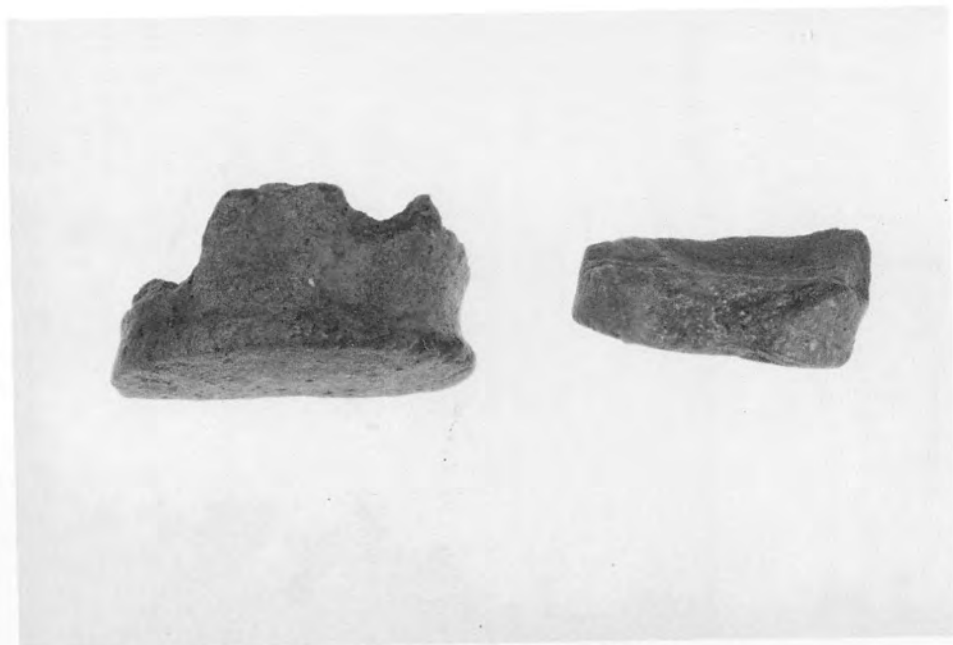


▲シガイバンタ貝塚（北西側より）

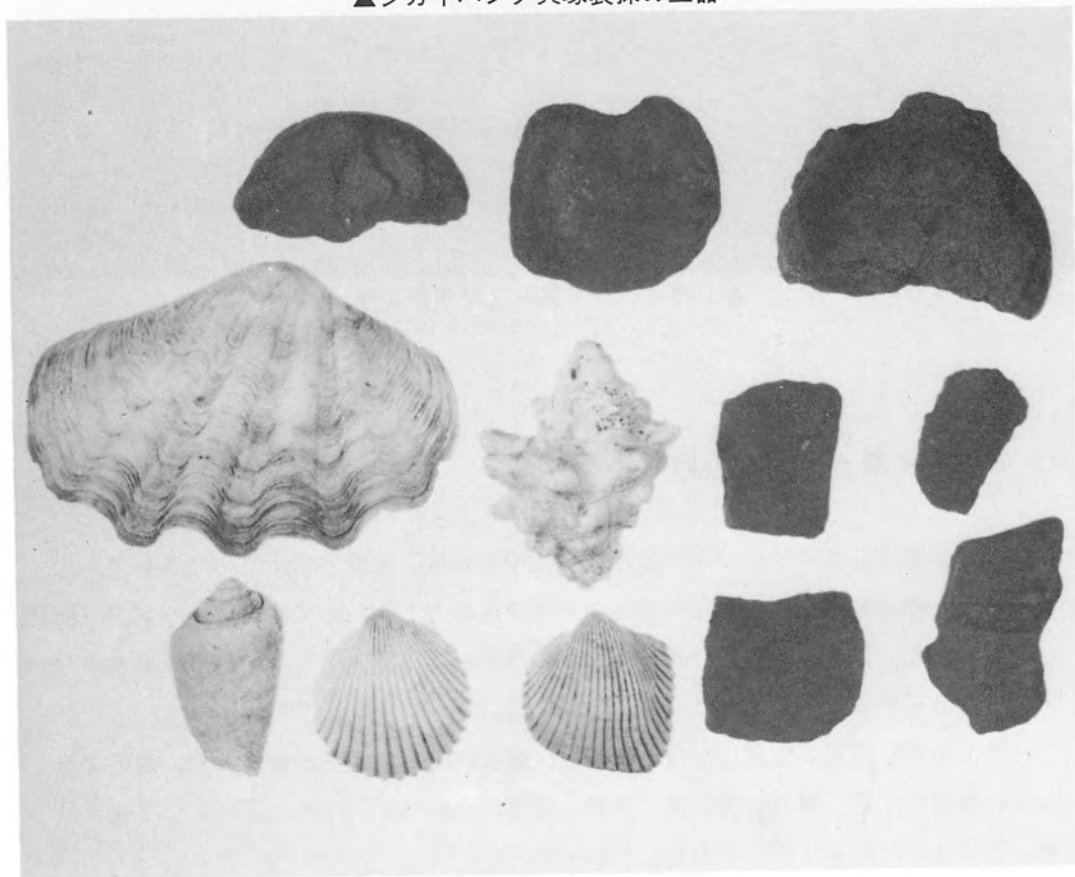
8 シガイバンタ貝塚

貝塚は字運天部落のクンジャー集落のほぼ中央付近、南側の崖下に形成されている。集落から標高約25mの台地上へ登るジグザグ道のことを地元ではシガイバンタ（崖）と称している。貝塚は道の付け根あたりから西側にかけて、そして崖の裾状部のテラス状になっているところにかけて拡がっている。

台地上からも微量の土器片が得られるが、遺物の多くは崖下からである。表面採取により後期の土器、磨石、海獣骨、漁骨、貝類が得られる。付近の遺跡として運天貝塚、アガリクンジャー貝塚がある。



▲シガイバンタ貝塚表採の土器



▲同貝塚表採の遺物



▲松堂原貝塚遠景（西南側より）

9 松堂原貝塚

当貝塚は字運天部落のクンジャー集落西側より渡喜仁部落に通ずる道路側の海岸近くにあった後期の貝塚である。現在では採砂により完全に破壊されていて、遺物の表面採取はできなかった。

1977年発刊の『沖縄県の遺跡分布』——沖縄県教育委員会——の中で「松堂原貝塚」と報告されているもので、その調査時点ですでに採砂により大部分が破壊されていることが記されている。

現状では採砂後の埋め土と周辺の畑地の客土化等により、貝塚の範囲は不明である。



▲ウパカ遺跡遠景（南西側より）



▲同遺跡（北東側より）

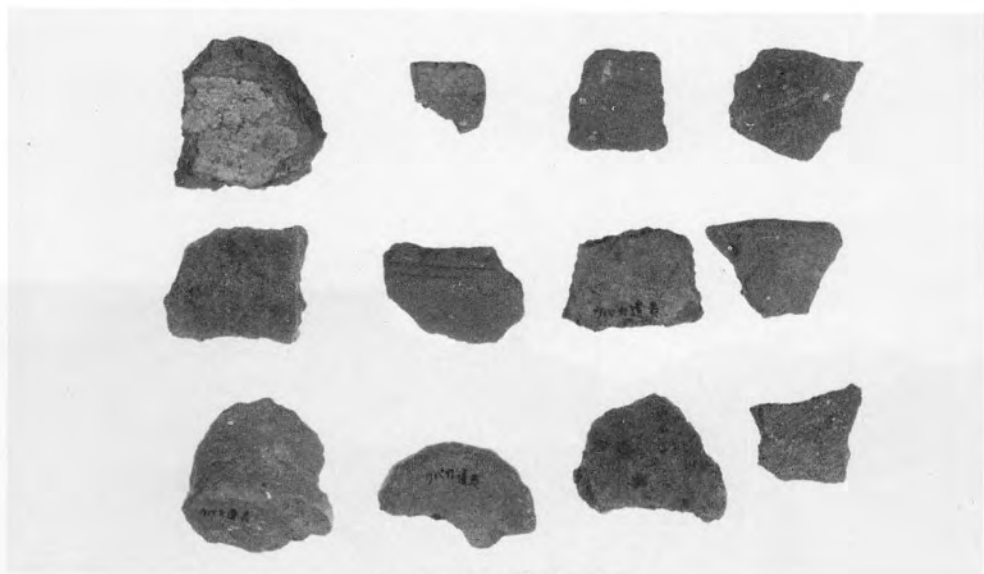
10 ウパカ遺跡

字運天部落（旧運天港）の東側に形成されているもので、部落の南側は運天港に接し、周りは約40m程の崖で半円状に取り囲まれ、北風を防いでいる。

後背の崖中腹には16世紀～18世紀頃と思われる岩陰墓などが点在している。

遺跡は部落の約半分にまたがる広い範囲に及び標高約3mの砂地の上に形成されている。現在、宅地や畑地となっている。遺物は屋敷内や道路上、畑地内から表面採取される。

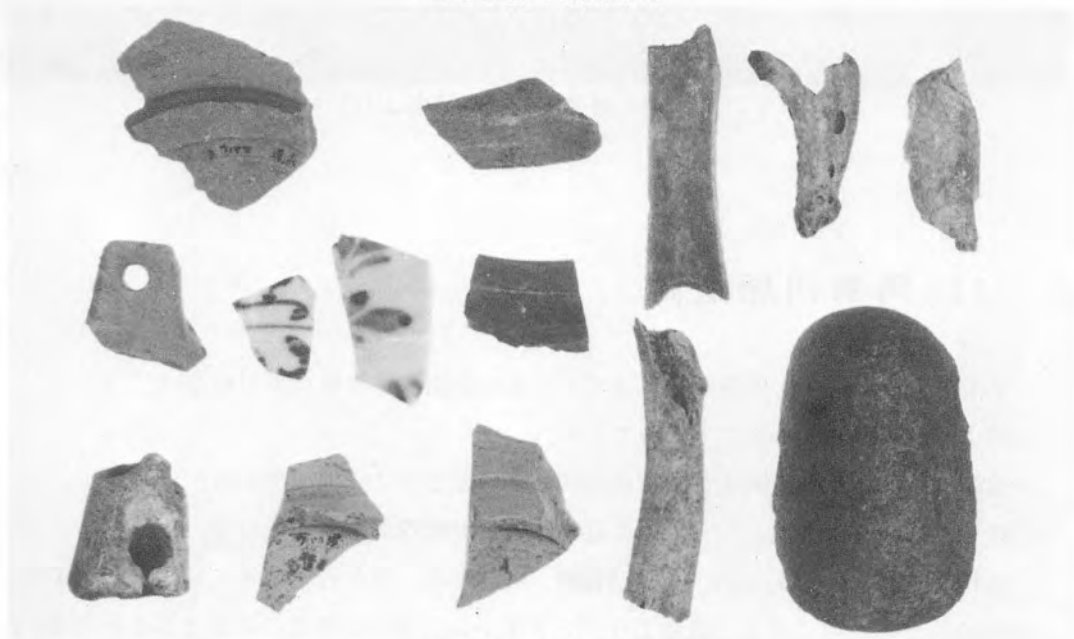
後期の土器、貝類、獣骨、石器片が多くみられ、青磁器や近世陶磁器、キセルの雁首などが採取される。後期と近世に営まれた遺跡とおもわれる。



▲ウパカ遺跡表採の土器



▲同土器の拡大写真



▲同遺跡表採の遺物



▲阿那川原遺跡近景（西側より）

11 阿那川原遺跡

字上運天公民館から旧運天港へ通ずる村道の間、豊年祭行事を行なう「ウヘー」広場より南側へ約50m程のところである。

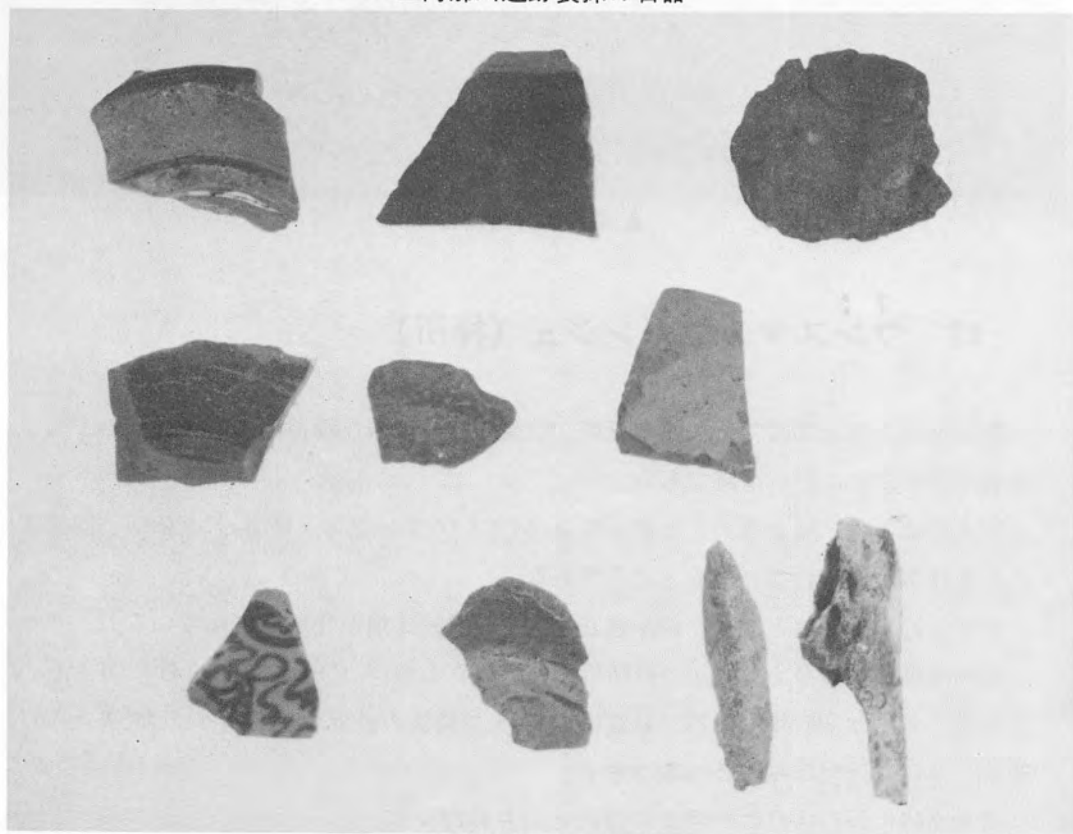
遺跡は小高い丘陵に囲まれる標高約15m程のところに立地している。

現在、畑地及び宅地となっていて遺物は主に畑地内より採取される。

遺物はグスク系土器、陶質土器、青磁器、褐釉陶器、叩き石、獣骨、貝類、そして近世陶磁器などがみられる。遺物よりグスク末から近世にかけての遺跡とおもわれる。



▲阿那川遺跡表採の石器



▲同遺跡表採の遺物



▲ウンスマヌウガンジュ遠景（北側より）



▲同近景（西側より）

12 ウンスマヌウガンジュ（拝所）

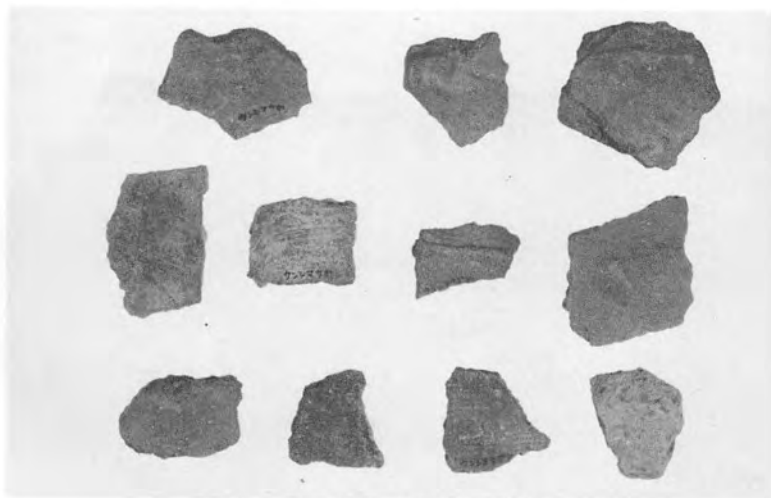
遺跡は字上運天部落の公民館南東側、標高約35m程の丘陵頂部に形成されたグスク時代～近世にまたがる遺跡である。

地元ではこの丘陵全体のことを「ウンスマヌウガンジュ（拝所）」と称し、同部落の年中行事が行われるところである。

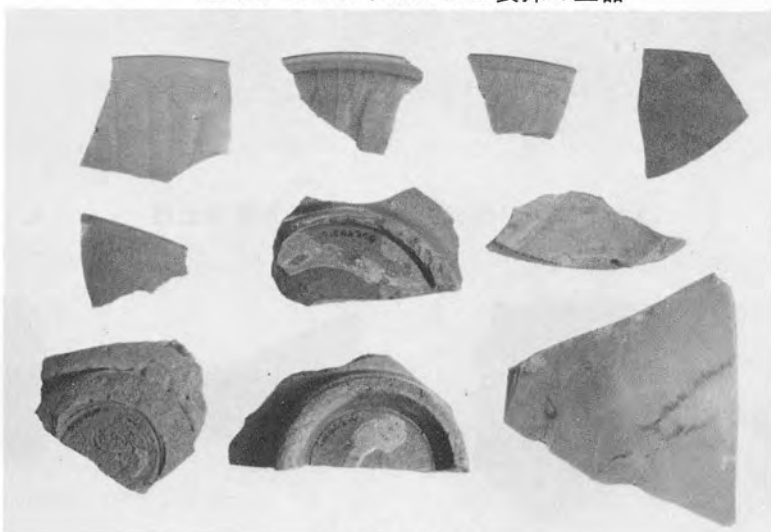
頂部付近は平坦地となり、祠が建立されその周囲は畑地化がすすんでいる。

遺物は畑地内に多く、周辺の拝所近くにも散在しグスク系土器、磨石、叩き石、須恵器、青磁盤、碗、褐釉陶器、瓦質系土器、大型動物の長管骨や白歯、貝殻類、キセルの雁首、それに近世陶磁器が採取される。

グスク時代から古島にかけての遺跡とおもわれる。



▲ウンスマヌウガンジュ表採の土器



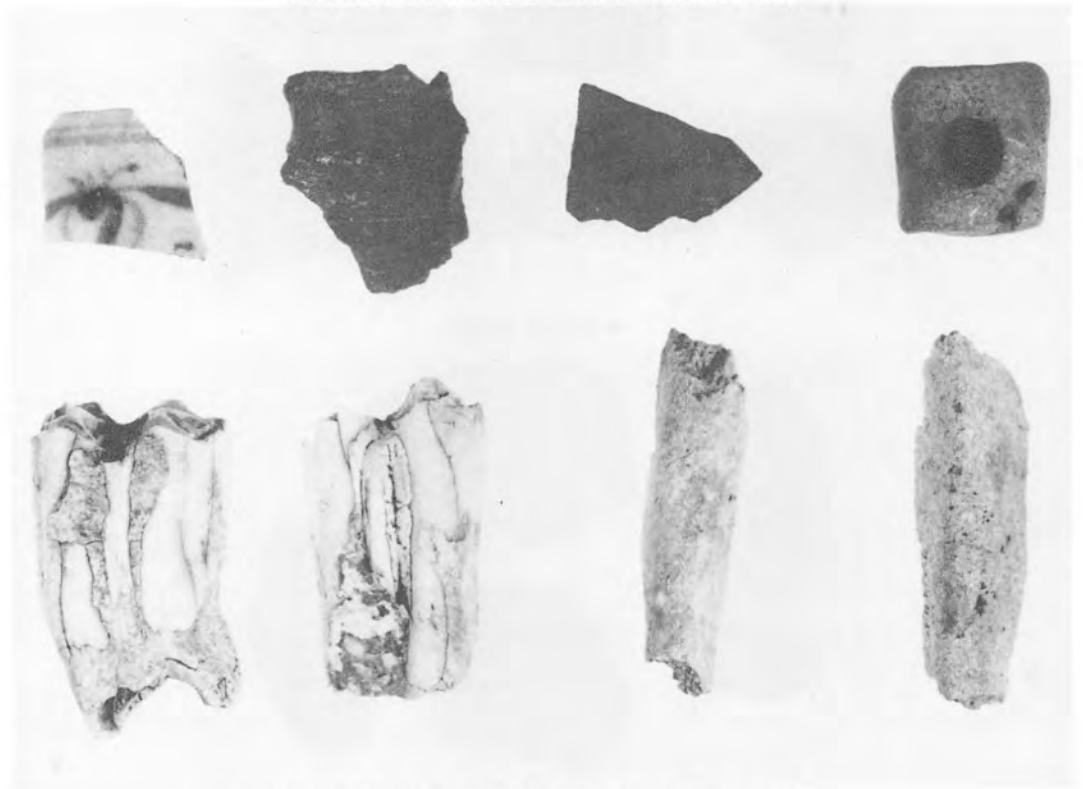
▲同表採の青磁



▲同表採の石器



▲ウンスマヌウガンジュ表採の瓦質系土器



▲同表採の染付、須恵器、キセルの雁首、獣骨



▲親川原遺跡遠景（南側より）

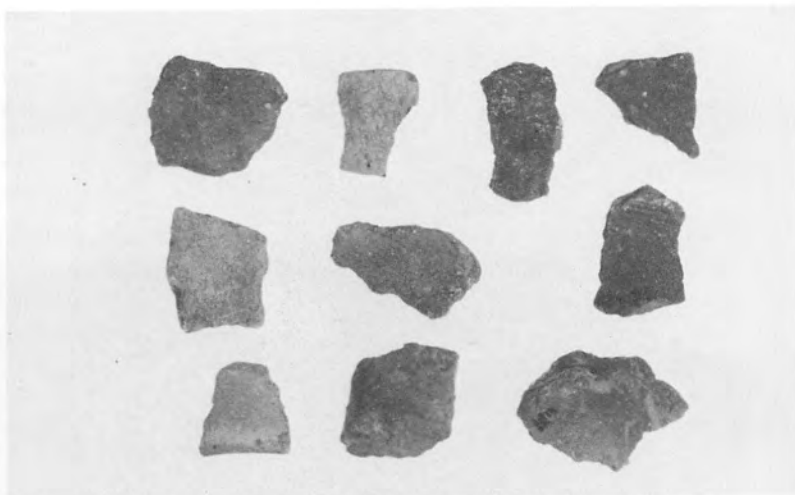
13 親川原遺跡

字上運天部落の標高約35mのウンスマヌウガンジュ（拝所）丘陵南西側に立地する後期～グスク時代の遺跡である。

遺跡は県道名護運天港線と臨海道路が合流する交差付近から丘陵中腹部にかけて形成されている。丘陵裾部の宅地周辺から斜面にかけ、そして丘陵中腹の畑地平坦部にかけて遺物が散布している。

宅地造成により一部破壊を受け、その土手の断面に土器や貝がみられる。また、中腹の畑地内でも遺物が散布している。

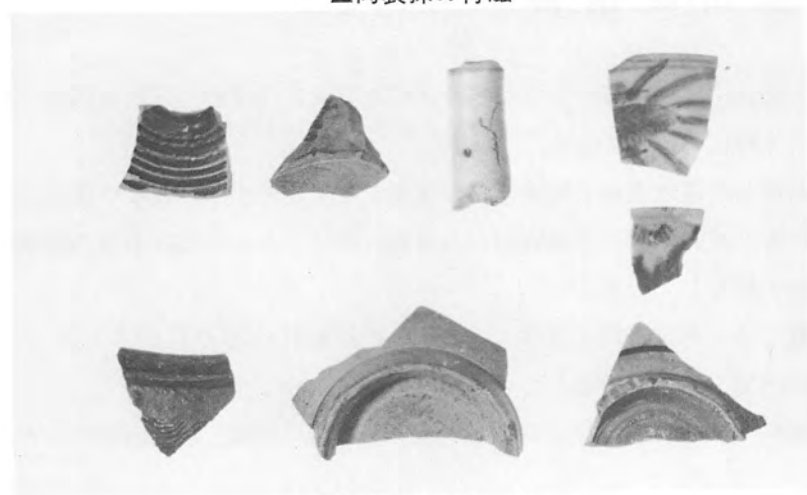
遺物は後期の土器、石器片、青磁盤、碗、須恵器、貝類、近世陶磁器などが表面採取される。



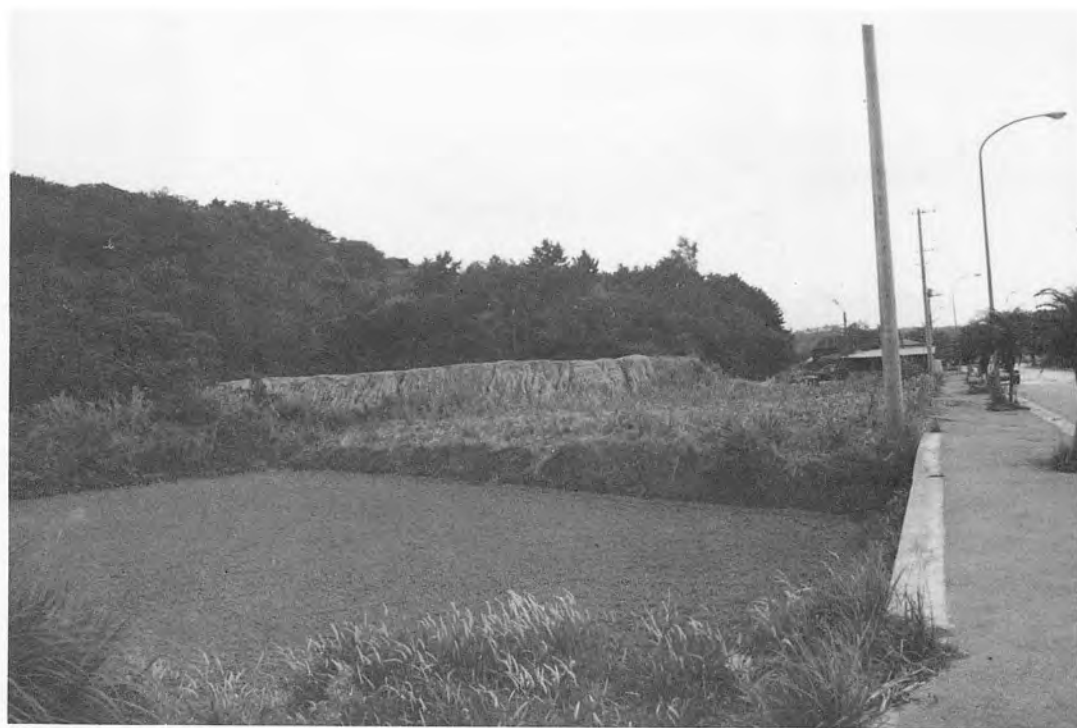
▲親川原遺跡表採の土器



▲同表採の青磁



▲同表採の陶器、染付



▲運天港土器出土地遠景（西側より）

14 運天港土器出土地

運天港港務所北側約80m程、標高約10mの小高い畑地から前期の荻堂式土器の口縁部が1点表採された。

大型機械による耕転後に発見されたもので、畑地内のところどころに黒色を帯びたところがあるがその他の遺物の採集には到らなかった。周辺の状況から推して遺跡の本体が近辺にあるものと思われる。

▼同表採の土器





▲メヌパマヌウガンジュ全景（北側より）

15 メヌパマヌウガンジュ遺物散布地（拝所）

字上運天部落にあるウガンジュ（拝所）になっている所で運天港港内にある。これまでの港湾建設工事から保護されているもので、所有は字上運天部落のものである。

遺物は標高約15m程の丘陵斜面東側よりグスク系土器が僅かに表採される。遺跡の主要な部分は1960年頃の港湾拡張工事等により大部分が破壊されたものとおもわれる。



▲浜原貝塚遠景（北西側より）

16 浜 原 貝 塚

1976年に京都大学の学生により発見された貝塚で、地すべりが激しく自然崩壊が進んでいるため記録保存を目的とする緊急発掘調査が、村教育委員会により実施されている。

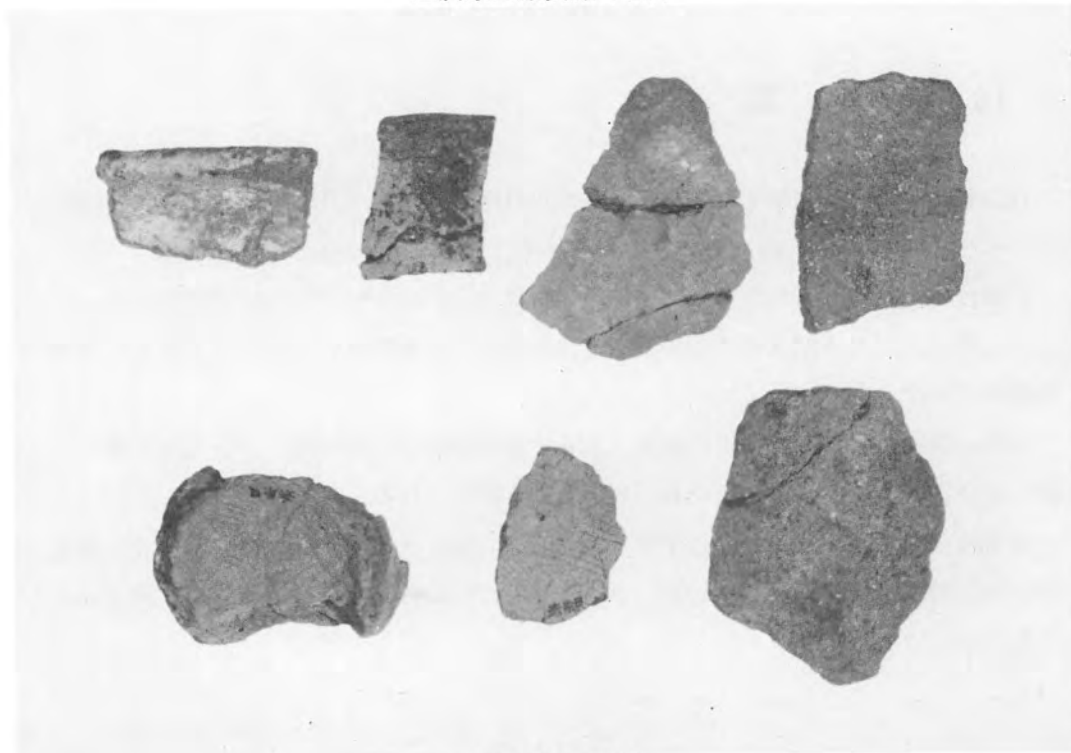
貝塚は字渡喜仁部落の北方、海岸に面した標高約25mの石灰岩台地の崖斜面フィッシャーに形成された後期主体のものである。未調査の貝塚部分については土留めによる保護措置が構じられている。

なお、遺物包含層は台地上の畑地、あるいは台地崖より崩れ落ちた巨大な岩塊との間、及び保護措置がなされている巨岩頂部にも確認される。

遺物は前期～後期にまたがる土器や石斧等の石器、大型獣の骨製品、貝製品、獣漁骨、貝殻類などが多量に出土している。詳しくは『渡喜仁浜原貝塚』調査報告書がある。



▲浜原貝塚表採の石斧



▲同表採の土器



▲長根原遺跡遠景（南側より）



▲同近景（北東側より）

17 長根原遺跡

旧「沖縄リゾートステーション」の展望台の付け根付近及びその石灰岩台地縁辺部にかけて形成されている。

標高約25m程の展望台の南側土手、そして排水溝にかけて土器や石器片が散らばっている。展望台の南西側土手面は、これまでに雨水のたびに崩壊しているため村教育委員会は、応急措置として土留めの保護対策を構っている。

遺物は中期系の土器、磨石片が表面採取されている。なお、同遺跡から浜原貝塚にかけての台地上及び崖斜面に土器片が散在し、台地上全体が遺跡の様相を呈していることが確認されている。



▲長根原遺跡表採の土器



▲白浜貝塚遠景（西側より）

18 白 浜 貝 塚

白浜貝塚は、長根原遺跡の西南方、大井川下流の低い河岸段丘上に所在していた後期に属する貝塚で、大がかりな「養鰻場」建設工事と採砂により完全に壊滅している。表面調査による遺物の採取は不可能な状況にある。



▲シチャガブ遺跡遠景（北西側より）



▲同近景（南側より）

19 シチャガブ遺跡

遺跡は字湧川部落と名護市屋我地島に挟まれる羽地内海に面したところで、湧川部落のシチャガブ集落地に立地している。かつては、この沿岸域で塩田が拡がり製塩が盛んに行なわれていた。

遺跡は前面を羽地内海に接し、後背地は小高い丘陵地で囲まれる。遺物は標高約 2 m 程の畑地及び排水溝の側壁面より表採される。その種は前期系土器、貝殻等である。



▲シチャガブ遺跡表採の土器



▲兼久原遺跡全景（北側より）

20 兼久原遺跡

字湧川部落の兼久集落地の海岸近くの標高約 2 m の畑地に形成された遺跡である。前面は海に接し、周りの後背地丘陵の裾部より自然の湧水が流れる。

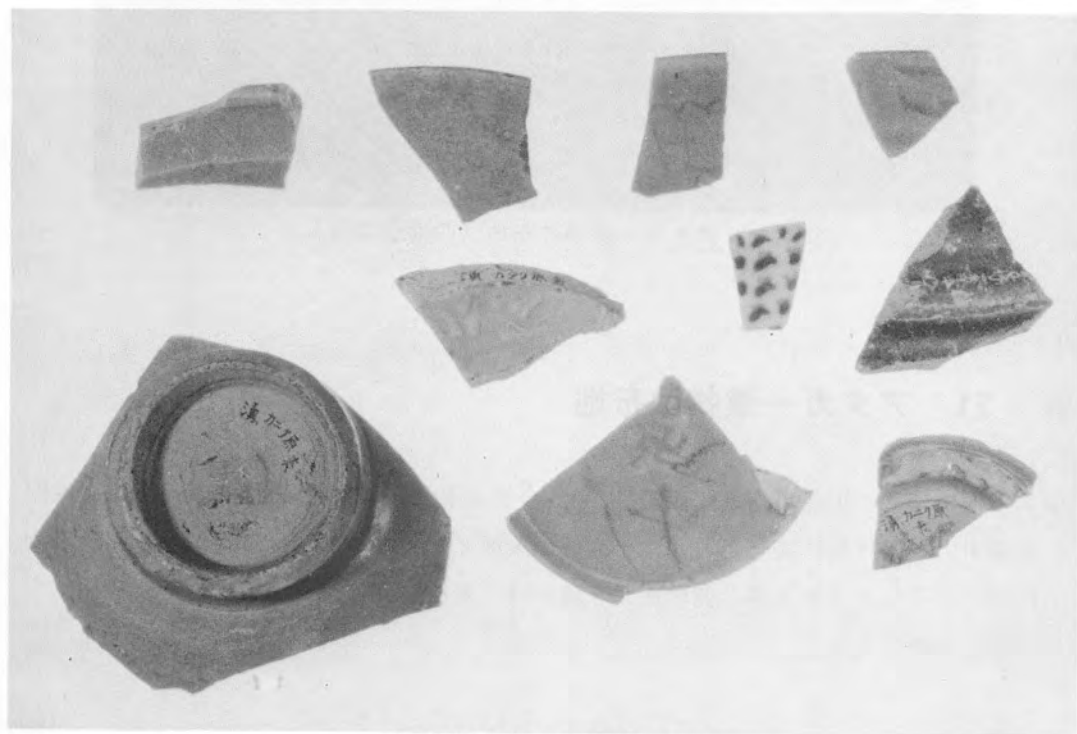
遺物は畑地内及び宅地周辺から表採される。表採遺物は、前期～中期系の土器 1 片、青磁器、染付、褐釉陶器、石製品(硯?)貝殻類、近世陶磁器などが表面採取される。



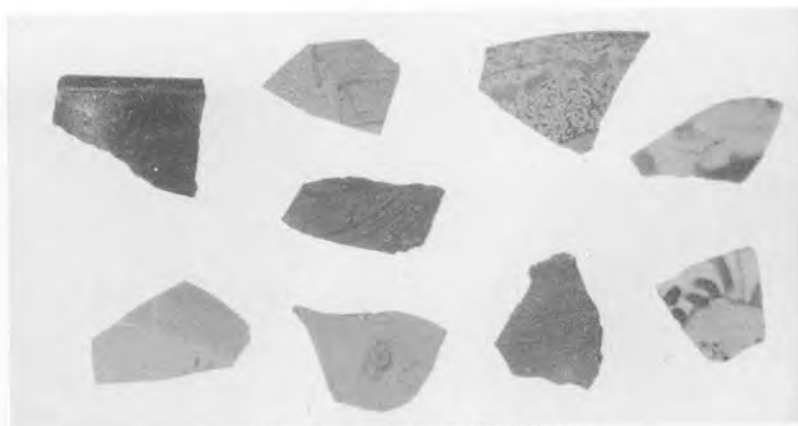
▲兼久原遺跡表採の土器



▲同石製品



▲同表採の青磁、染付、陶器



▲兼久原遺跡表採の近世陶磁



▲アタガー遺物散布地（西南側より）

21 アタガー遺物散布地

字湧川部落の沢峠集落地の西側約200mの標高約2mの微高地である。南は羽地内海湧川の船揚げ場に接し、北側は小高い丘陵地となっている。一帯は畑となり、遺物は畑の中を流れる排水溝の側壁面より僅かほど表採されるが、小破片のため時期については不明である。



▲シイナグスク遠景（南西側より）

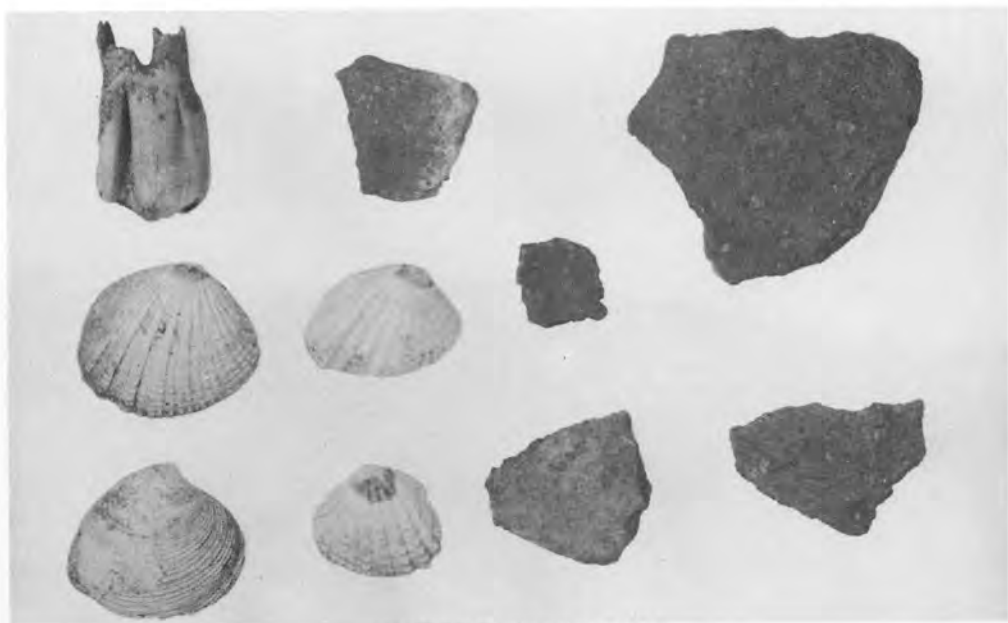
22 シイナグスク

シイナグスクは、字湧川部落から字呉我山部落へ通ずる県道123号線途中のガジマンドォーと呼ばれる集落の北側約350mのところに立地している。

標高約90m程の高地に築かれたグスクで、遺構として石垣が残っている。石垣は、全長約150m余あり、石垣の最も高いところで約1.5m、最大幅は4.3mを計る。

雑木に被われ、全体的な縄張りを確認するに到っていない。

伝えられるところによれば、同所は「北山城（今帰仁城跡）の築かれる前に城を築いて住んでいた按司がいた」あるいは、「北山城の出城ではなかったか」などのことが村史に記されている。遺物はグスク系土器、大型動物の臼歯、貝殻がわずかに表面採取される。



▲シイナグスク表採の遺物



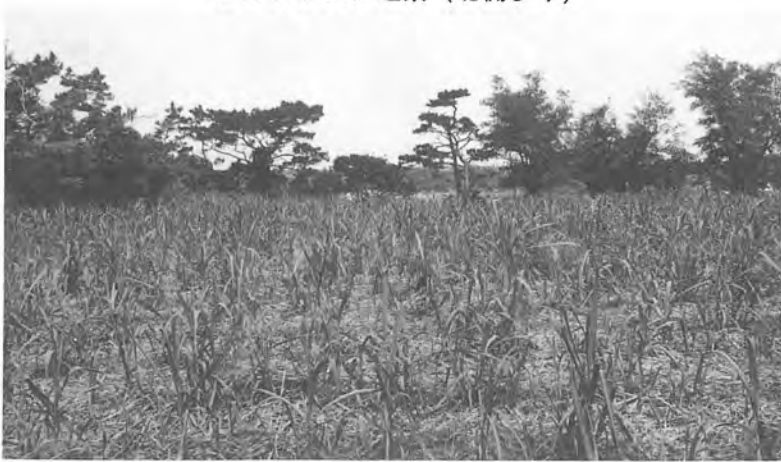
▲同グスクの石垣



▲同石垣



▲ウチグスク遠景（北側より）



▲同近景（南側より）

23 ウチグスク

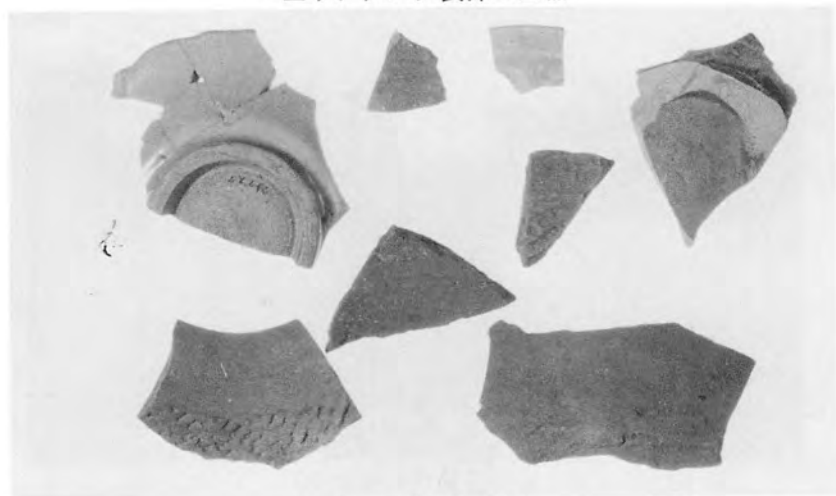
グスクは字玉城公民館から東南方向へ約500m程、標高約40mの石灰岩丘陵上に形成されている。特に石積みなどの遺構は確認できない。一帯は古島と呼ばれ、玉城部落の発祥と関連するものと思われる。

敗戦前までは、この地から石材が切り出されたことにより、丘陵東端部から西端部にかけて破壊されている。

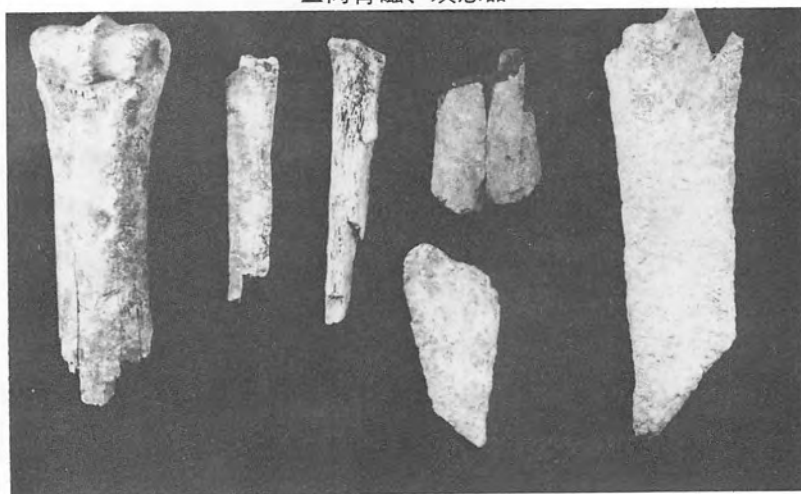
遺物は丘陵斜面から台地上西部にかけて多く、グスク系土器、青磁、須恵器、獣骨、貝殻類、そして近世陶磁器が表面採取される。



▲ウチグスク表採の土器



▲同青磁、須恵器



▲同獣骨



▲ウンジョウヘイ遺跡全景（北西側より）

24 ウンジョウヘイ遺跡

字謝名部落の公民館南側に立地する遺跡である。拝所となっていて、部落行事が行なわれるところである。

遺跡は標高約50mの石灰岩丘陵に立地している。丘陵頂部南側にはいくつかのフラット面が確認できる。

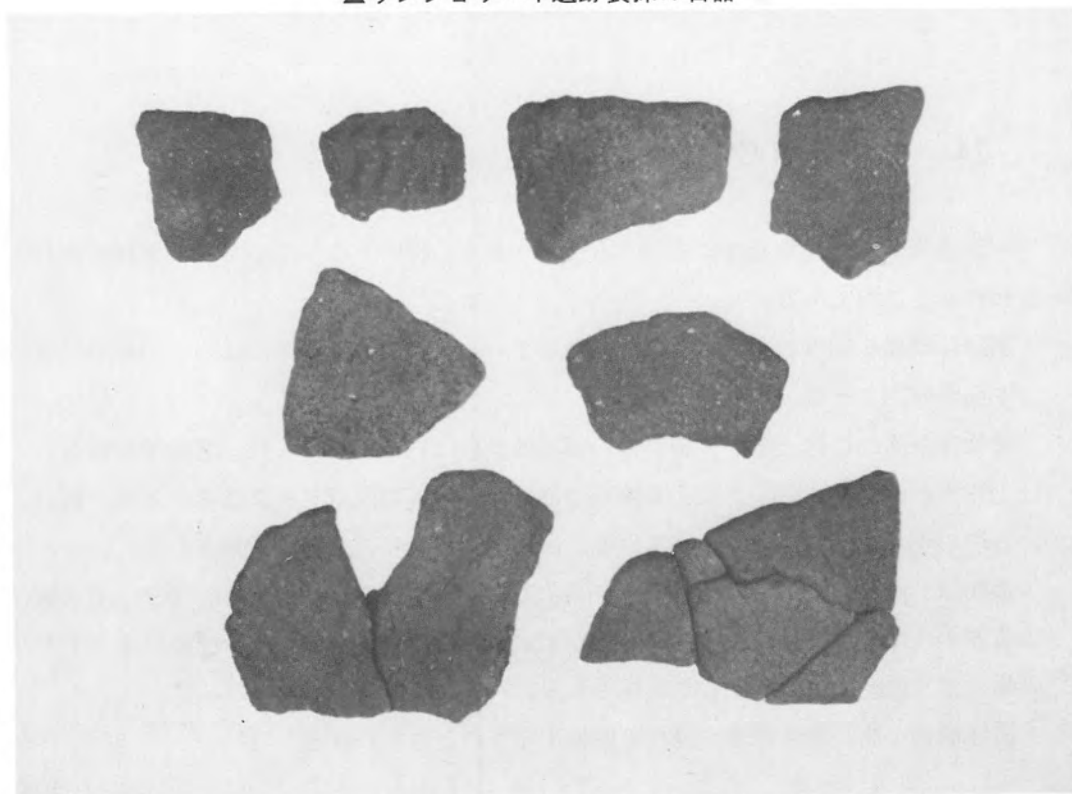
遺物は全面的に拾えるが、特に南の傾斜地からは青磁片が得られ、北側傾斜面からは土器片が表採される。また、丘陵東端部には南向きの円型状石罫遺構があり、南側に石段の小さい階段が設けられている。同周辺より石斧、磨石が採集された。

遺物は、南斜面の畑地内よりグスク系土器、青磁器、褐釉陶器、鉄滓、獣骨、貝殻類、須恵器それに近世の染付、摺鉢、赤絵などが得られる。また、北側斜面及びその下方の畑地より前期～中期の土器が表採される。

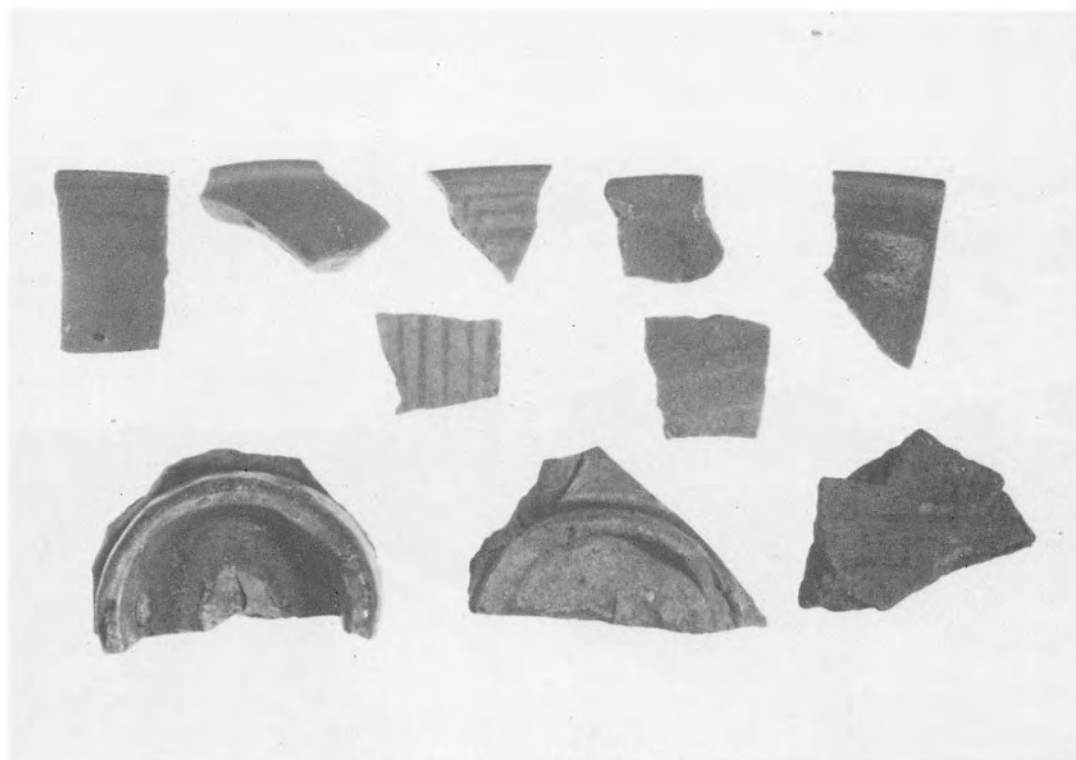
表採遺物より、謝名部落の発祥と関係するものとおもわれる。



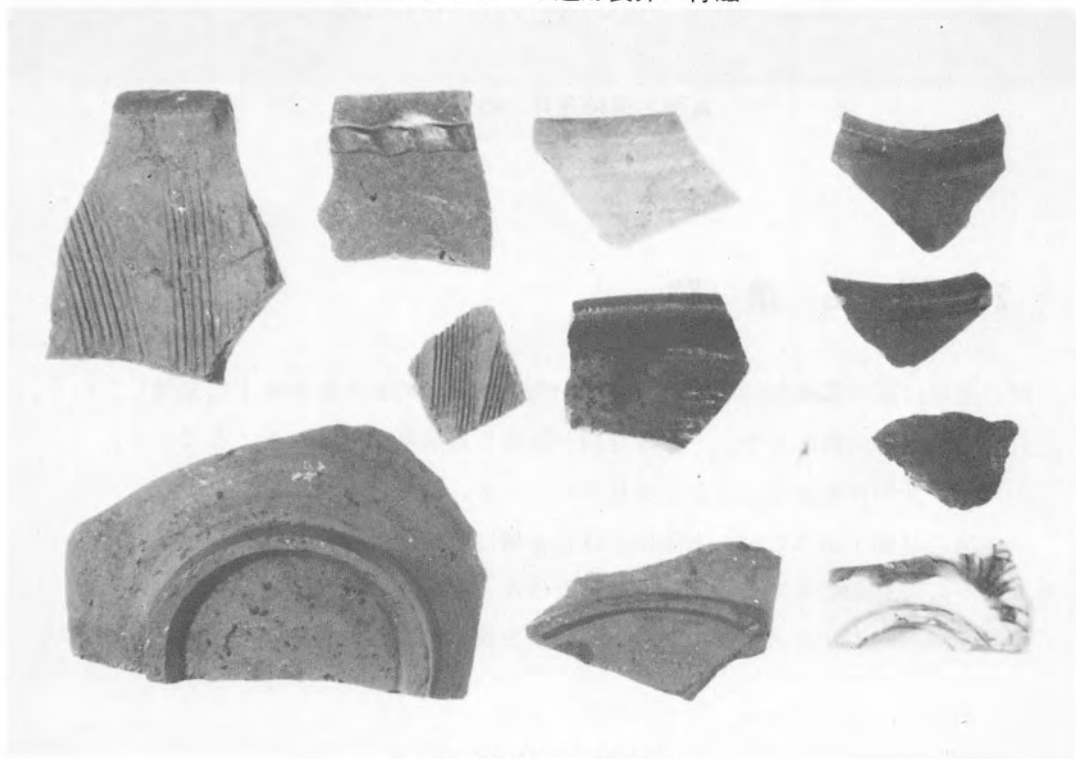
▲ウンジョウヘイ遺跡表採の石器



▲同表採の土器



▲ウンジョウヘイ遺跡表採の青磁



▲同表採の近世陶磁器



▲謝名遺跡遠景（南側より）

25 謝 名 遺 跡

謝名遺跡は謝名部落売店の西南約100m、標高約30mの石灰岩台地上に立地している。

村立の診療所南側にあり、一帯は巨岩が散在し岩陰墓があったところである。

1973年に多和田真淳氏によって発見されている。

一地域で試掘を試みたが、当該地では包含層は明確ではなく、得られた遺物は全て地表面からのものであり、いずれも微細な破片となっている。

南側の畑地内よりグスク系土器、青磁器、須恵器、鉄滓、近世陶磁器が表面採取される。



▲謝名遺跡表採の土器、須恵器、鉄滓



▲同近世陶器（外面）



▲同（内面）



▲小浜原遺跡遠景（北東側）より

26 小 浜 原 遺 跡

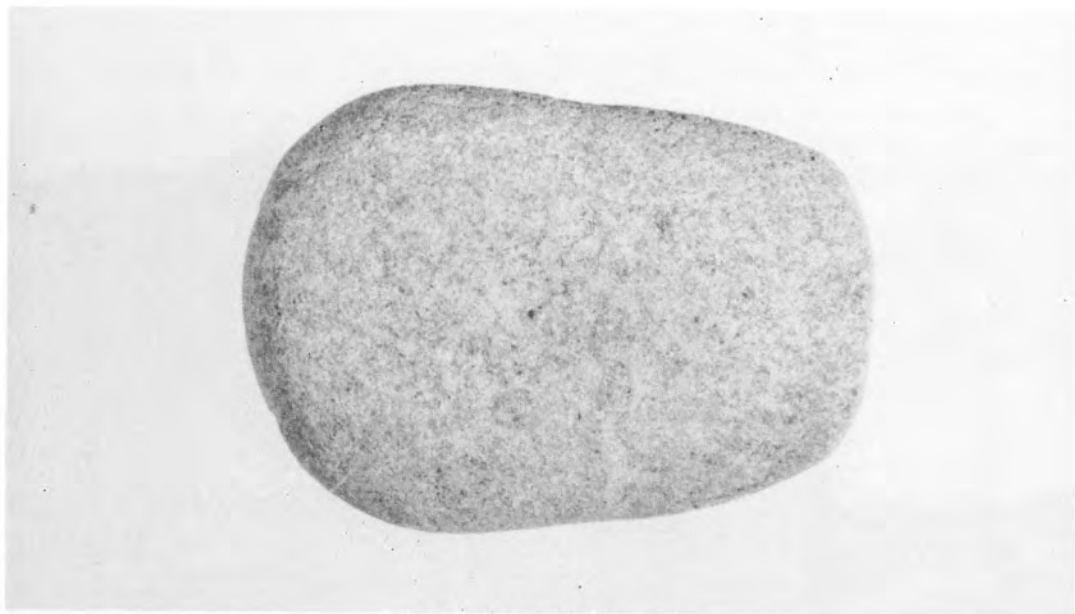
字越地沿いの大井川下流の標高約15mの河岸段丘上に立地する中期の遺跡である。

遺跡は畑地の大がかりな整地作業と掘削によりかなりの破壊を受けている。

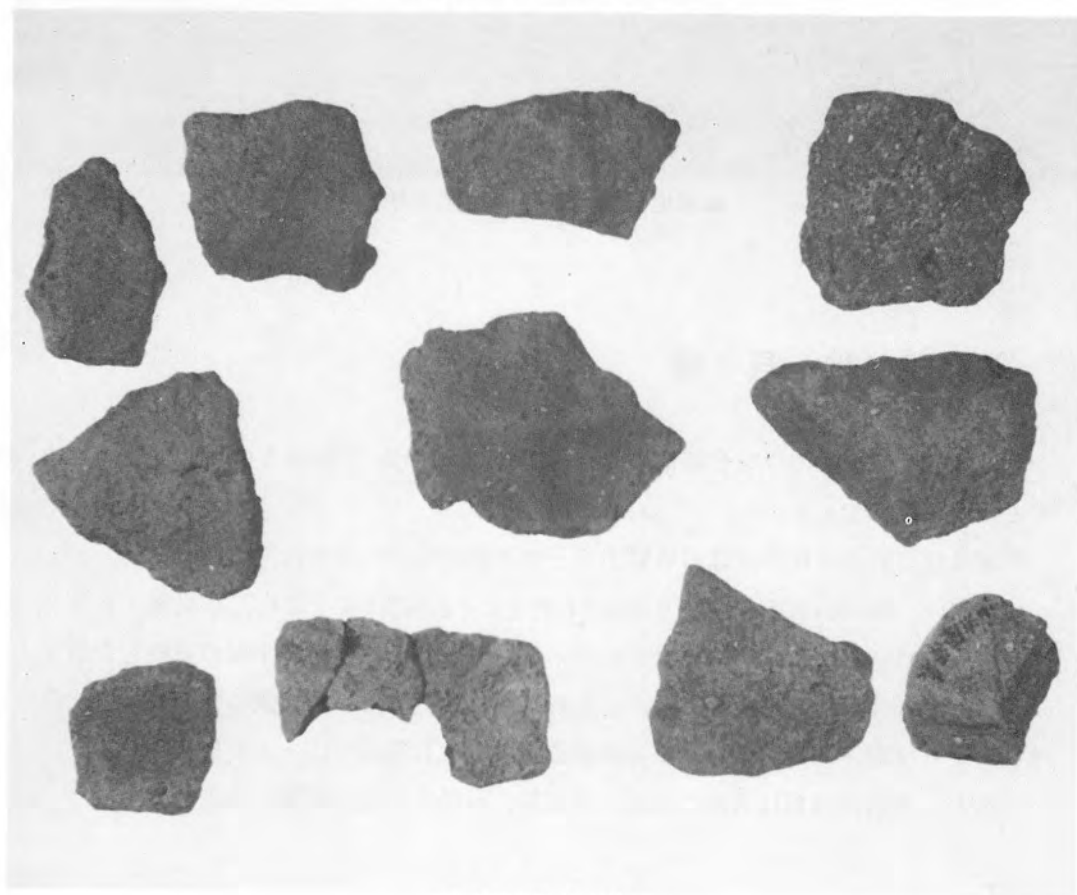
遺物は整地作業により取り残された岸边沿の岩石の上やその周辺に僅か残る状況である。また、北側方向の畑と畑との間に、掘削による約2m程の段差が設けられ、その掘削面には遺物包含層が観察される。

層は黒褐色を帯び、礫混じりである。厚さは約40cmで幅は約5mほど残っている。

遺物は中期の土器、凹石などの石器、貝殻類が得られる。



▲小浜原遺跡表採の石器



▲同表採の土器



▲越地貝塚近景（南東側より）

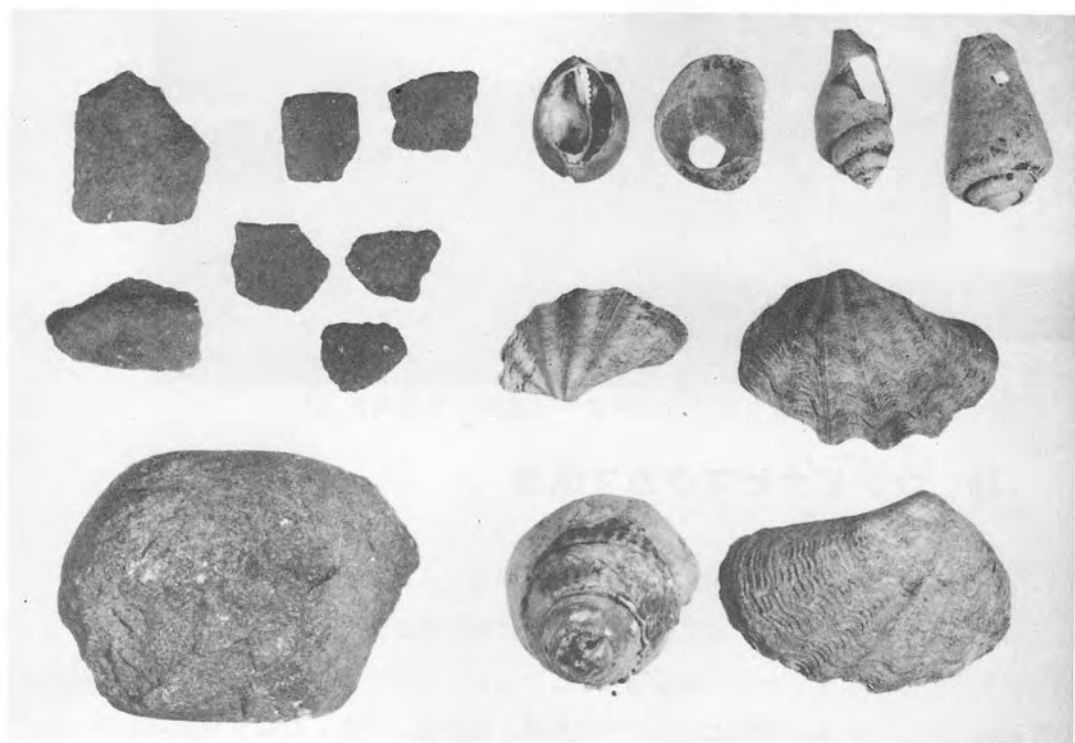
27 越 地 貝 塚

越地貝塚は字平敷のウンビ部落の北方約250mの海岸線、字越地との境界付近に立地する後期の貝塚である。

貝塚は標高約15m程の琉球石灰岩小丘上の頂部付近に形成されている。

1972年に、多和田真淳氏により発見され村史にその概要が紹介され、小貝塚であることが記されている。頂部の岩と岩とのフィッシャー面に厚さ約20cm程の遺物包含層が確認でき、土器や貝殻が詰まっているのが観察される。遺物は小丘陵の斜面及び下の墓地周辺より採取される。また、墓の前庭部側溝からも僅かではあるが散見される。

得られた遺物の種類は後期の土器、貝製品、石器片、貝殻類等がある。



越地貝塚表採の遺物



▲同土器



▲同有孔貝製品



▲ウンビナビスクガマ遺跡全景（西側より）

28 ウンビナビスクガマ遺跡

字平敷共同売店の北東約500m、標高約16mのところに立地している。遺跡はウンビ部落に通ずる道路端右側の洞穴遺跡で、洞穴は南に開口し、入口は狭い。

洞穴内には小広場があり、最も高いところで約3m程ある。洞内南側に香炉が設置され拝所化している。拝所とするために奥深く掘り起こされ、かなり破壊されている。香炉横の壺の中には掘り出されたとおもわれる人骨が納められている。

なお、洞内東側奥は約2m程掘削されているが遺物包含層の確認はできない。

遺物は、前期土器、石器片、獣骨などが洞穴の入口周辺で表採される。



▲同遺跡表採の土器、石器、獣骨



▲平敷ウガン遠景（南側より）

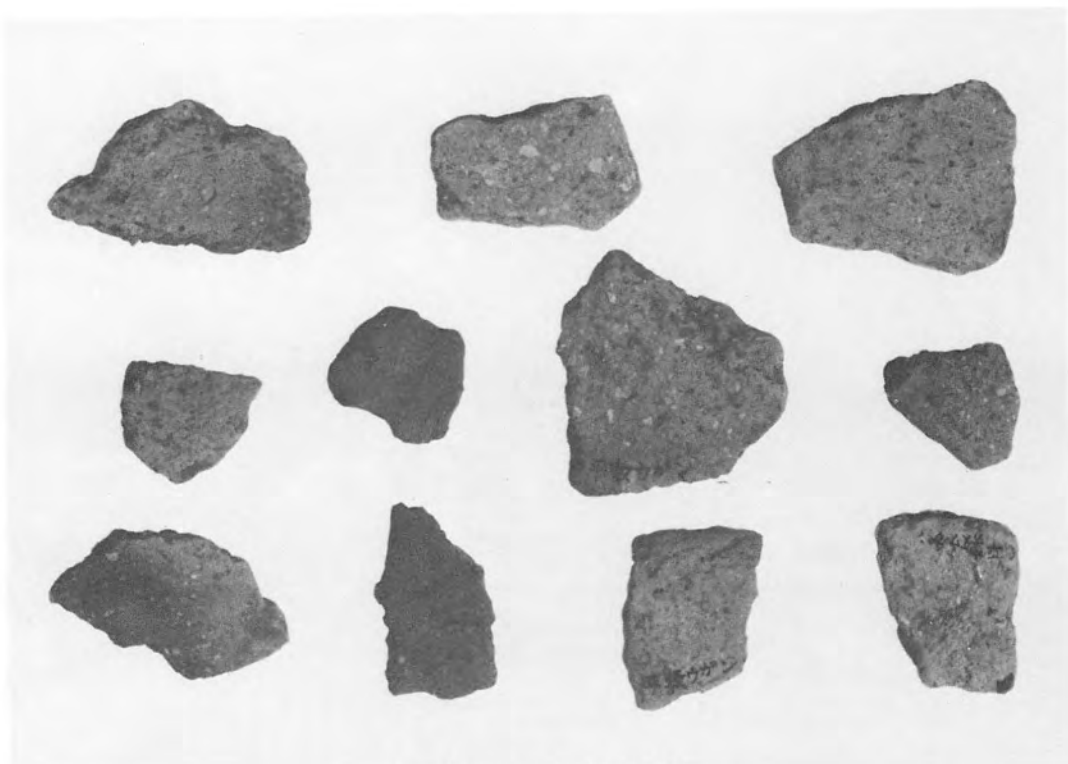
29 平 敷 ウ ガ ン（拝所）

平敷ウガンは、県道124号線沿いの字平敷共同売店横を北へ約150mのところにある。

遺跡は標高約15mの低丘陵上の平坦地に形成されている。現在、平敷部落の拝所となっていて、部落行事が行なわれるところである。

遺物は拝所内では少なく、その周辺の畑地内から多く拾える。特に西側斜面及びその下方の畑地から多く得られる。

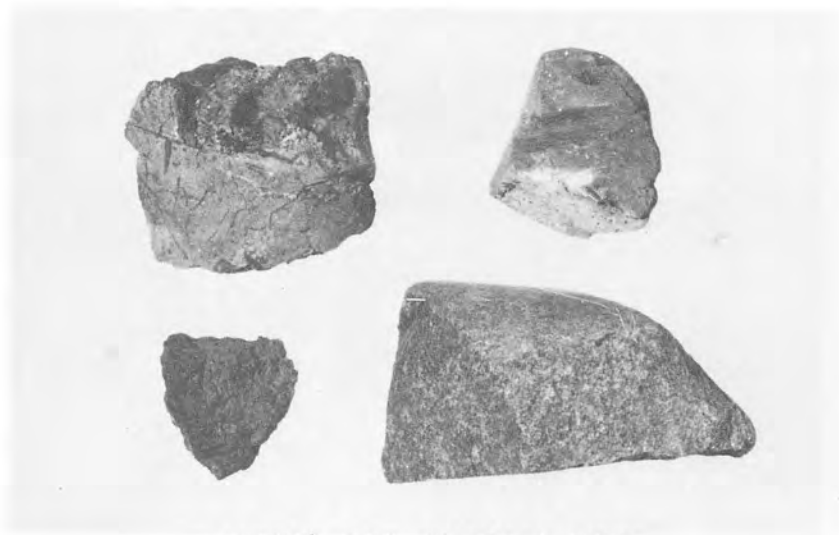
表採遺物は、グスク系土器、青磁、染付、須恵器、砥石、スラッグ、近世陶磁器などである。



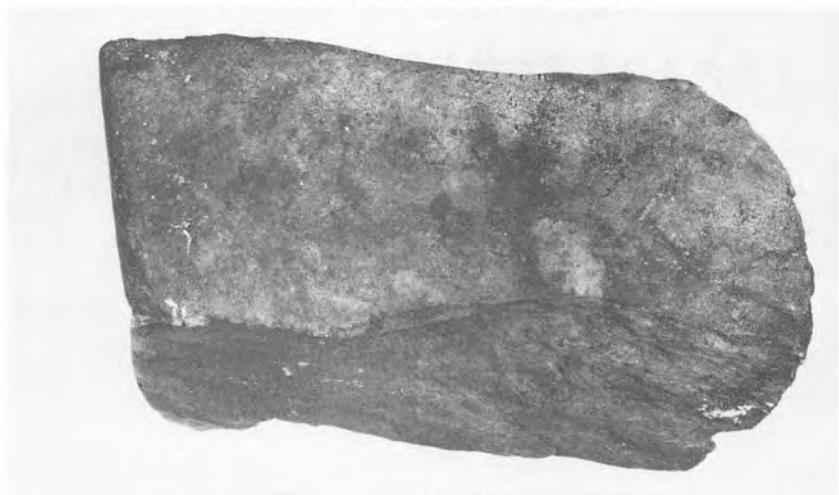
▲平敷ウガン表採の土器



▲同青磁碗



▲同鉄滓、石器、使用痕のある軽石



▲同砥石



▲同近世陶磁器

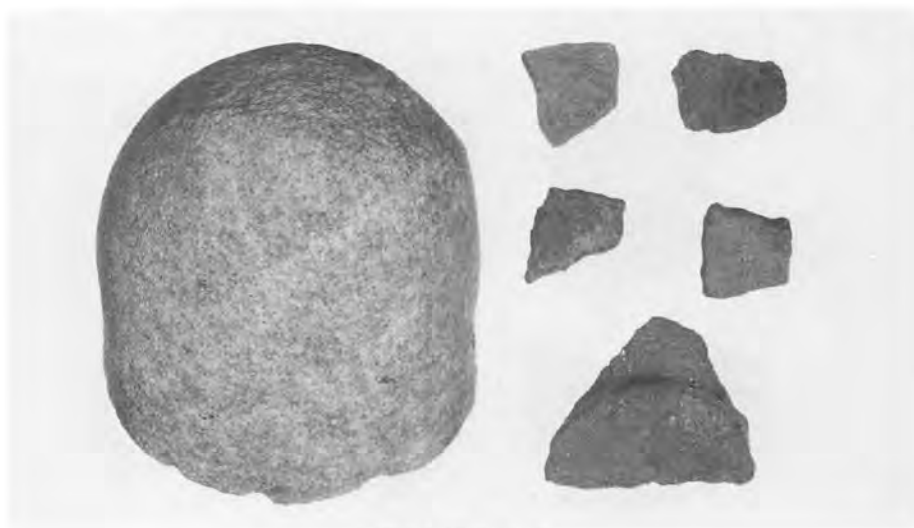


▲イチグスク墓

30 イチグスク墓遺物散布地

イチグスク墓は、港原遺跡群の東側を流れる平敷川に架橋されたところに所在している。墓は標高約20mの丘陵下部にある17世紀の石造りのものである。墓は西側に向き、その前庭左側に「大清康熙九年(1670年)銘の碑」が建立される。

遺物は、この墓所より南へ約20mの傾斜地で表採される。なお、丘陵頂上部付近での遺物採集はできなかった。遺物の種類は後期の土器、石器片などがある。



▲同表採の遺物



▲港原第1遺跡近景（南側より）

31 港原第1遺跡

字平敷と字崎山の境界を流れるジニンサ川の下流に架かる港川橋の西側に立地している。遺跡は標高約25m程の小丘陵の裾部分に形成されている。畑地を流れる小川の排水溝工事により分断されている。

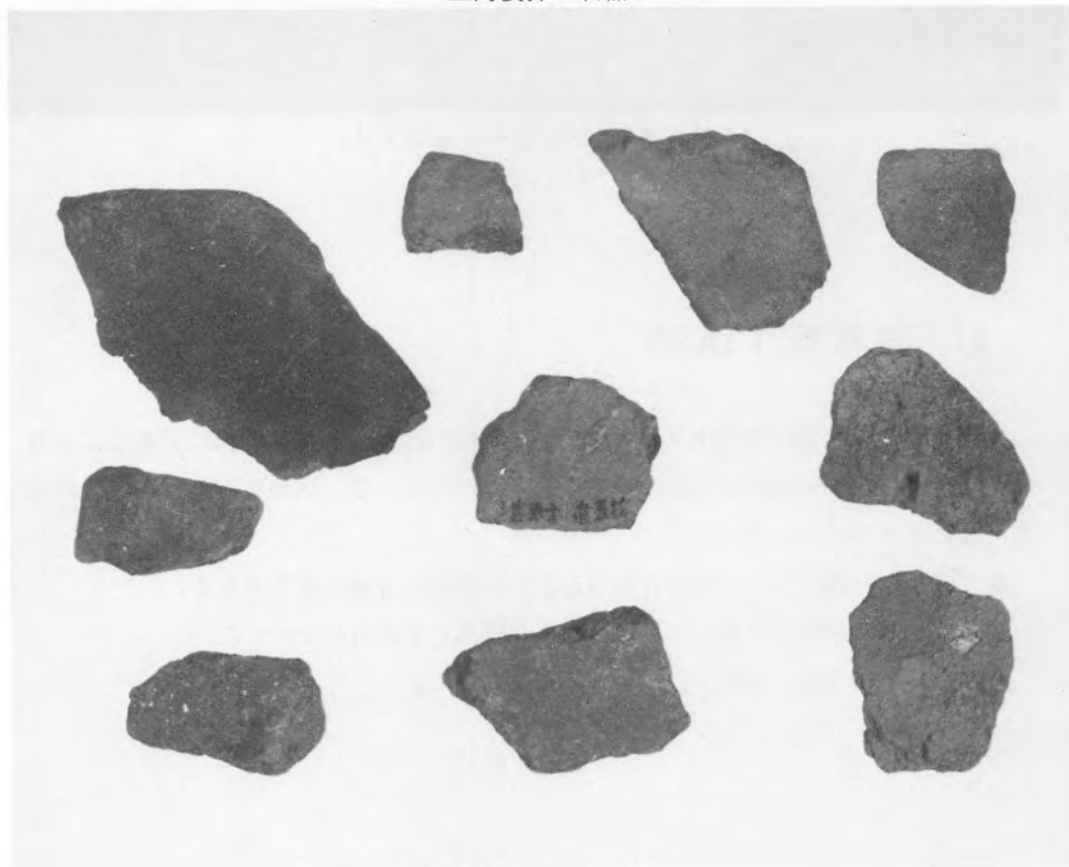
排水溝の側壁面より、土器や貝殻などを含む遺物包含層が観察される。

遺跡の範囲は厚い客土層により表面からは確認するに到らなかった。

遺物は後期の土器、石器片、貝殻類が表採される。



▲同表採の石器



▲同表採の土器



▲港原第2遺跡遠景（北東側より）

32 港原第2遺跡

港原第1遺跡の北側約150m程、標高約5mの砂丘地に形成されている。遺跡の南側と西側は小丘陵となり、東側に展けている。丘陵周囲は古い墓が多くある。

現在、遺跡一帯は観葉植物や造園木が植栽され保存状況は良好とはいえない。遺物は後期の土器、青磁、染付、褐袖陶器、貝類などが表面採取される。



▲同表採の遺物



▲港原第3遺跡遠景（西南側より）

33 港原第3遺跡

遺跡は、平敷川の下流域港原第2遺跡の北側、標高約3mの砂丘地に形成されている。

遺跡は北東側に展き周囲は小丘陵に取り囲まれる格好で、わりと広い範囲に及んでいる。

現在、畑地となっているが部分的に客土がなされている。当地は、かつて黒糖や諸物質の積み出し場所であったといわれている。

遺物は表採により後期の土器、石器片が得られる。



▲同表採の遺物)

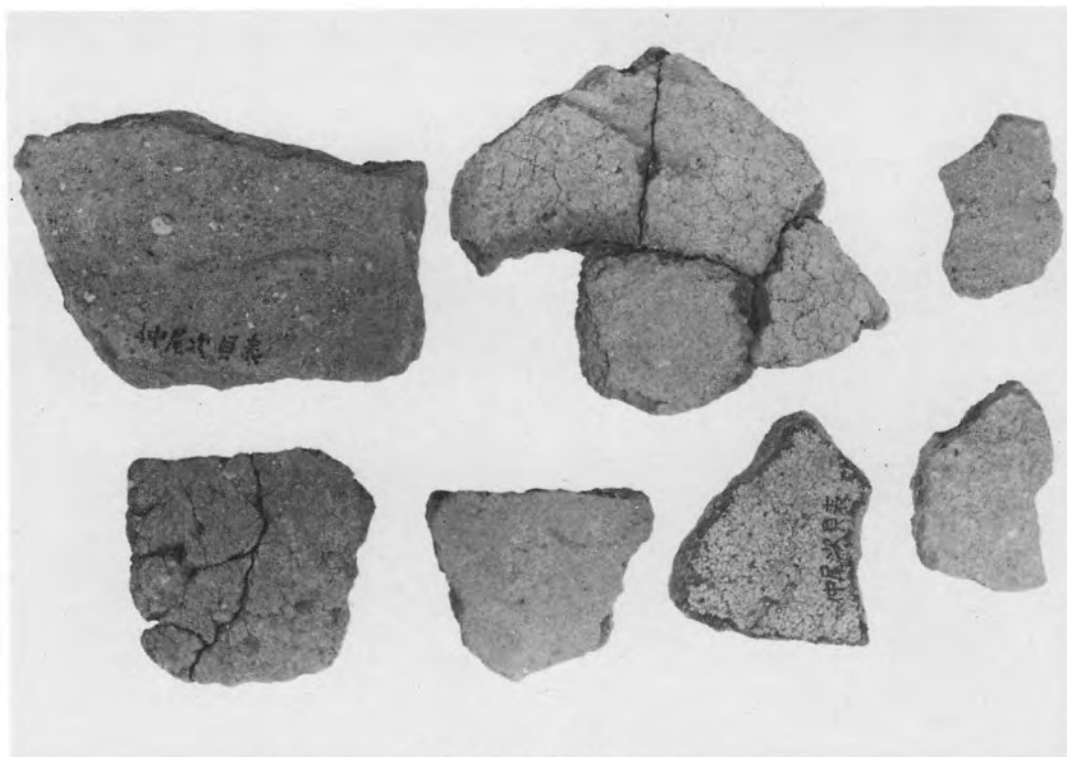


▲仲尾次貝塚近景（西側より）

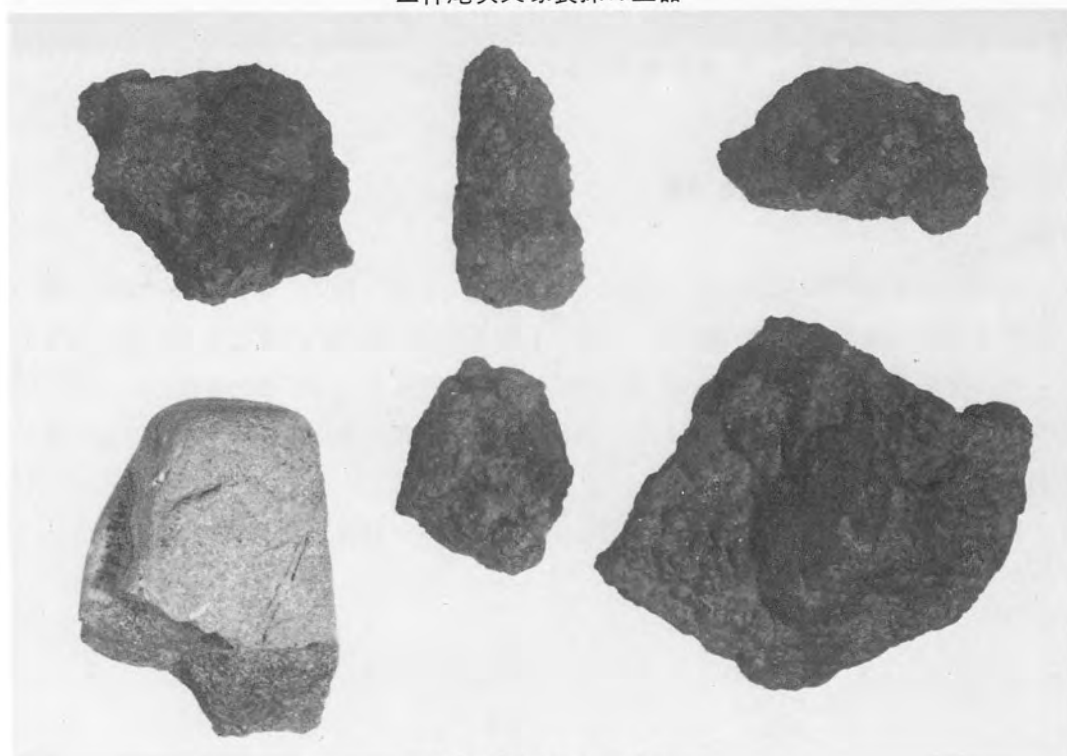
34 仲尾次貝塚

1973年に多和田真淳氏によって発見された貝塚である。村史に「字仲尾次部落と字与那嶺部落の境界に接する砂丘地に形成された貝塚で、多くの鉄滓と軽石状物質が得られ、珊瑚礁屑などを敷き詰めた楕円形の火の跡が残っている」と記されるが、同貝塚は隣接する東長浜原遺跡と同様に、海洋博時の大規模宅地造成工事や採砂により壊滅している。

遺物の表採は困難で、わずかに後期の土器、石器片、鉄滓を得るに至った。



▲仲尾次貝塚表採の土器



▲同表採の鉄滓、石器



▲東長浜原遺跡（北側より）

35 東長浜原遺跡

字与那嶺部落の北側、公立学校共済「梯梧荘」の隣り、標高約5mの地に立地する遺跡である。遺跡は海洋博時の大規模な分譲宅地造成工事や集団墓地等の建設により大部分が破壊されている。

墓地や雑木等に被われ範囲の確認は難しいところである。

遺物は墓地と宅地造成面との傾斜面や南側に残る低丘陵地の前面近くで僅かに表面採取される。



▲同表採の土器、石器



▲西長浜原遺跡遠景（南側より）

36 西長浜原遺跡

遺跡は字与那嶺部落の北側約1 kmの標高約7 mの地に形成されているもので、1977年に公立学校共済組合沖縄支部の保養所「梯梧荘」建設のため、記録保存を目的とした緊急調査が「西長浜原遺跡調査会」で実施されている。調査結果から、20数基の竪穴住居址や貯蔵穴などが検出されている。

中期の土器や石斧、有孔石製品、骨製品など、炭化したシイの実や貝殻、獣魚骨などが出土している。

遺跡は「梯梧荘」の建物外にも拡がることが確認されている。拡がりとしては、北側海岸線の防災林内と東側の道路を隔てた畑地内にも及ぶことが確められ、南側と西側には範囲が延びないことが明らかになっている。

なお、北側に設けられたプール下の遺構は保存措置が構じられている。



▲仏ン当遺跡近景（西南側より）

37 仏ン当遺跡

公立共済保養所「梯梧荘」の南西約350m、標高約7mの洞穴内岩陰から前庭部に形成されている。洞内の東側は岩陰墓に使用された形跡があり、小石が詰められている。

現在、雑木とゴミに被われつつあり明確な範囲を確認するには致らなかった。

遺物は岩陰より前期の土器、石器片、貝殻類、獣骨などが採取された。

なお、当遺跡は『今帰仁村史』に「仏ン当貝塚」と報告されているが調査により、貝塚の確認はできなかったことから「仏ン当遺跡」とした。



▲仏ン当遺跡表採の土器



▲同土器（拡大写真）



▲同表採遺物



▲ 崎原遺跡近景（南西側より）

38 崎 原 遺 跡

崎原遺跡は兼次ハウス団地北側300mの海岸砂丘地、標高約5mのところに形成されている。現在、農耕地となっていて、遺物は畑地内及び防災林からも表採される。防災林と畑地との段差面には遺物が観察される。

遺物は畑地内より多く、後期系の土器、貝殻が表面採取される。



▲ 同表採の土器



▲兼次古島遺跡遠景（北東側より）



▲同近景（南東側より）

39 兼次古島遺跡

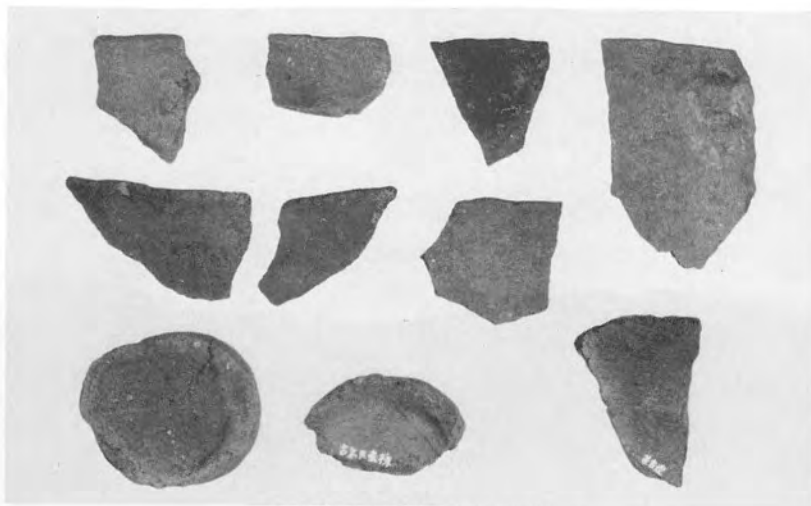
兼次中学校の南東側約600mの標高約50m程の石灰岩台地上に立地する中期～グスク時代にかけての遺跡である。

遺跡は兼次部落より台地へ登る道路を造る時点で、すでに破壊を受けている。

遺跡周辺は畑地となっていて、遺物は台地の縁近くから畑地内及び畑側の盛土状斜面から多く表採される。また、崖斜面から崖下の畑地にかけても散布している。

遺跡の東端部台地は農地拡大と大型機械による掘削などで、大きな岩塊が崖斜面下にかけている。また、一部の畑地には客土がなされている。

なお、遺物は中期～後期の土器、石斧、叩き石類、青磁器、褐釉陶器、鉄滓、獣骨、貝殻類が採取される。



▲兼次古島遺跡表採土器



▲同石斧



▲同青磁



▲同土器



▲同刃物痕のある獣骨



▲諸志御嶽遠景（北側より）

40 諸 志 御 嶽

諸志御嶽は1972年5月15日に国指定の天然記念物に指定されている。

県道124号線字諸志部落の共同売店西南側約200mの標高約38mの丘陵地である。

御嶽内には岩陰墓が数基あり、墓の周辺より青磁盤、碗などが得られた。また、北側斜面よりグスク系土器が僅かに表採される。

なお、頂部付近での遺物は得られないが、石罌状の石垣が確認される。



▲諸志御嶽近景



▲同内の墓



▲同表採の青磁碗



▲同表採の青磁盤



▲ハナグスク遠景（北西側より）

41 ハナグスク

北山高校の西側約200mの標高約30m程の小丘陵のグスクである。

グスクに関する伝承などはなく、地元ではこの地域をハナグスクと称している。畑地の開墾や農地拡大により原形が失われている。西側は谷間状になっていて、頂部付近の斜面縁辺に石塁状のが帯状に確認されるが遺物はこれまでのところ未発見である。

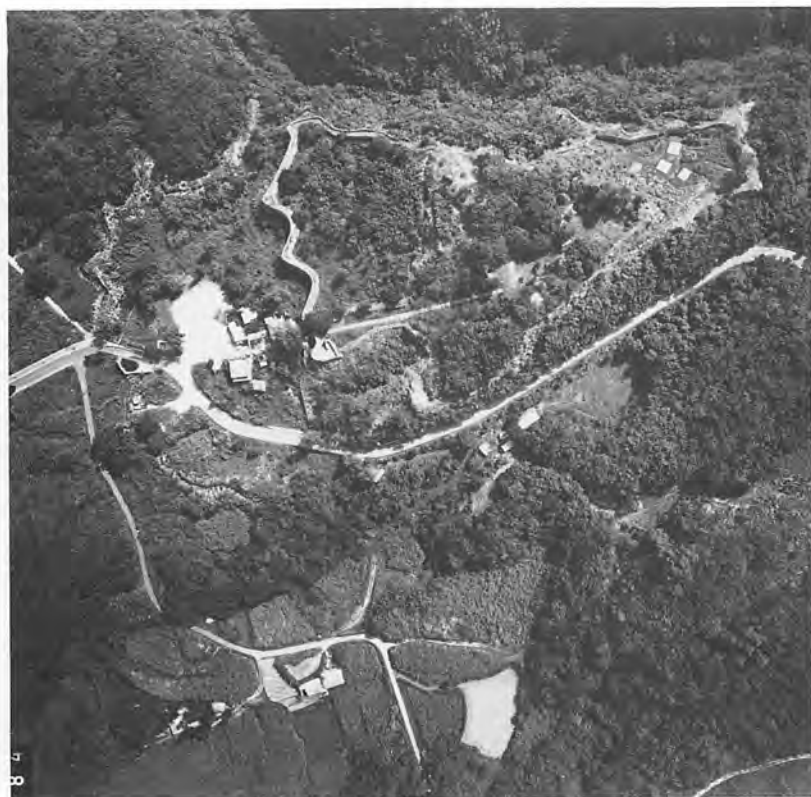


▲アカン墓遺物散布地（南側より）

42 アカン墓遺物散布地

字今泊部落の北側海岸近くにアカン墓と呼ばれる古墓がある。墓は17世紀後半頃の今婦仁城の監守の子孫などが納められているといわれている。墓は標高約14m程の石灰岩小丘陵下にあリ、岩陰を利用して南向きに造られている。墓の正面右側に石碑が建立され、墓の由来を記している。

遺物は土器片や青磁器片の小破片が周囲の畑地に散布する。



▲今帰仁城跡全景

43 今 帰 仁 城 跡

今帰仁城跡は、字今泊部落の南側約1kmの標高約100mの古生期の石灰岩上に築かれたグスクである。グスクの東側は深い谷間となり志慶真川が流れている。

石垣は古生期の石灰岩で積まれ、最も高いところで約7m程、幅約4m程である。石垣は総延長約1.5km余で、北側から西側部分にかけては二重に石垣が巡らされる。城内は8つの郭から成りたっている。

昭和55年度より環境整備事業が村教育委員会によりすすめられている。

14世紀頃には中国との貿易を行ない、15世紀初め頃に中山に破れ、以後17世紀中頃までは監守が設置、それ以後は廃城となっている。事業は主に、遺構調査と石垣の修復、遺構の修景整備がすすめられている。

城内より14・5世紀の中国陶磁器、高麗青磁、安南、スワンカローク窯の陶磁器、備前焼などが出土する。



▲志慶真門郭出土の青磁碗



▲同染付碗



▲同染付小壺



▲同青磁皿



▲ミームングスク 遠景（南側より）

44 ミームングスク

ミームングスクは、今帰仁城跡の北側約400mの標高約40m程の丘陵地にあるグスクである。

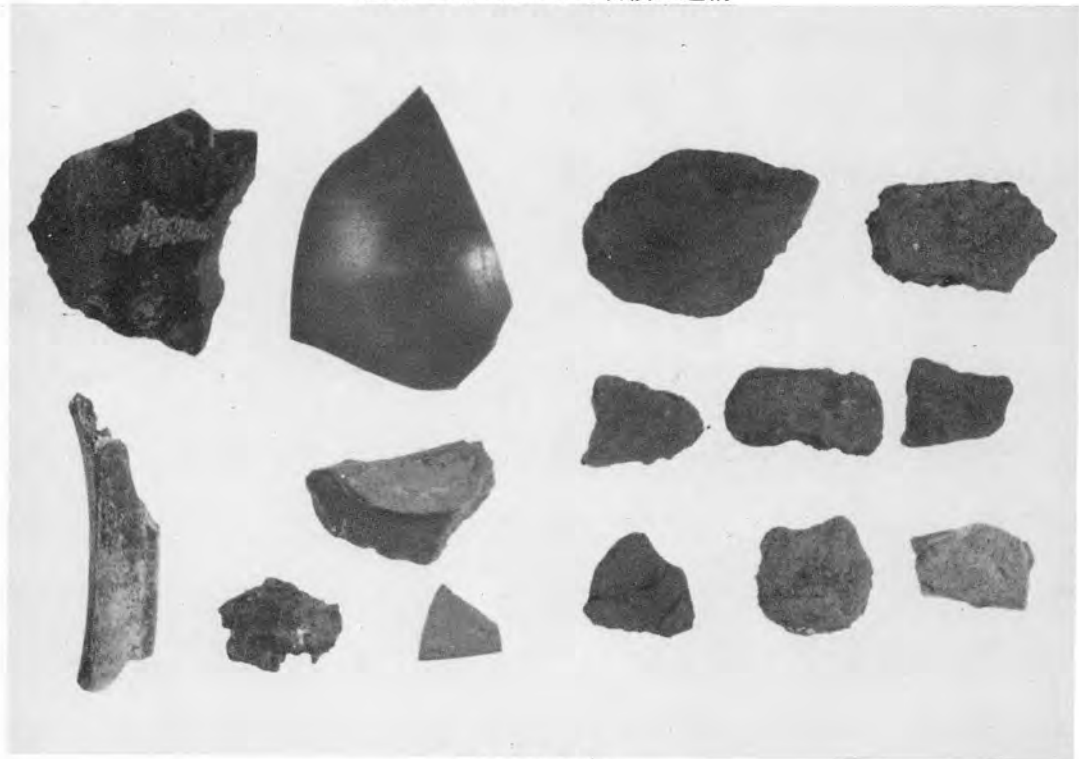
地元の人々はここをミームングスクと称している。グスクは高さ約1.5mの石積みが円形状に積まれている。

一説では、今帰仁城の出城ではなかったかといわれている。しかし、その機能や性格については不明である。北側には幅約2m程の石段付きの旧道が南北に走っている。

遺物は周囲の畑地より、グスク系土器、青磁器、褐釉陶器、獣骨などが表面採取される。

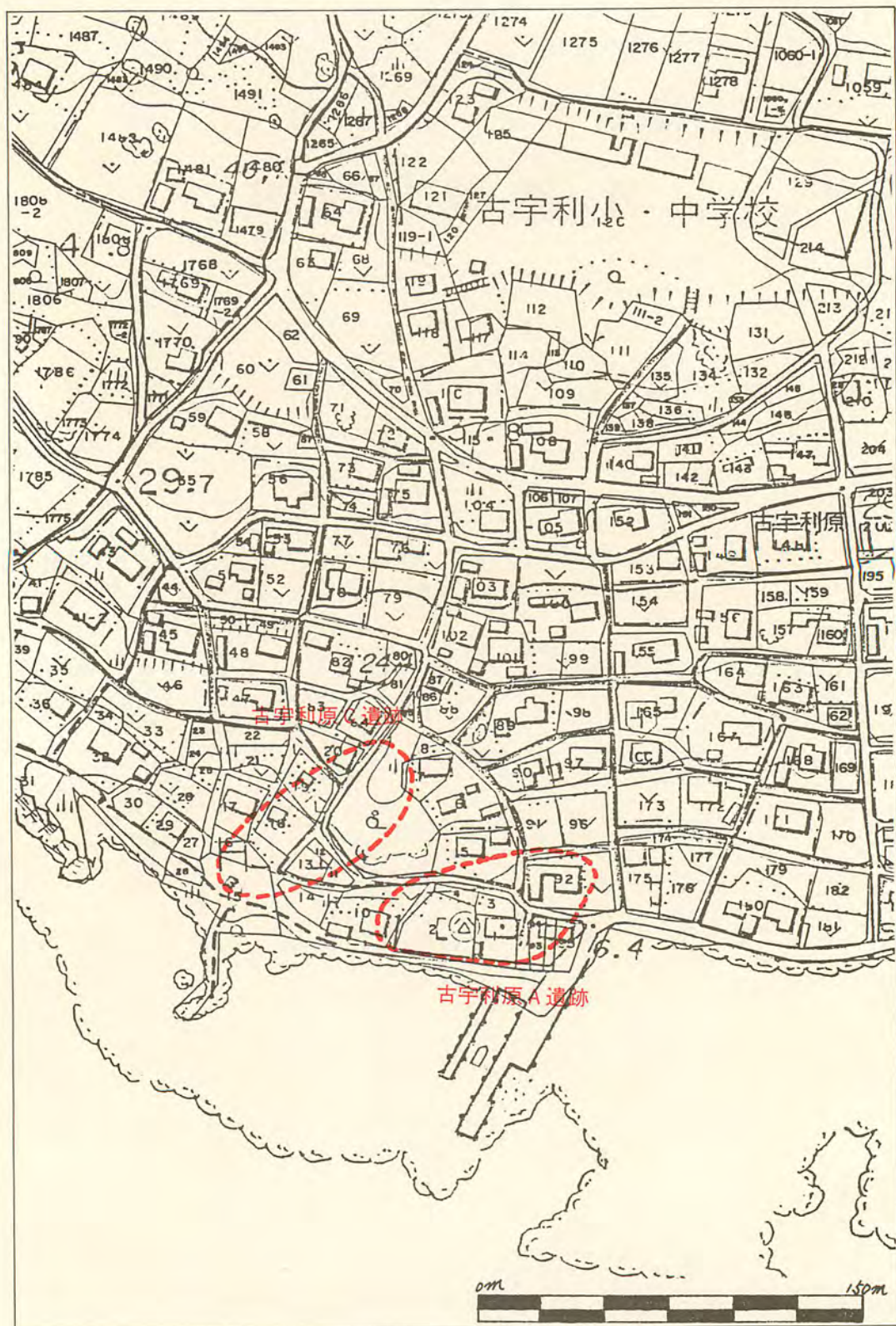


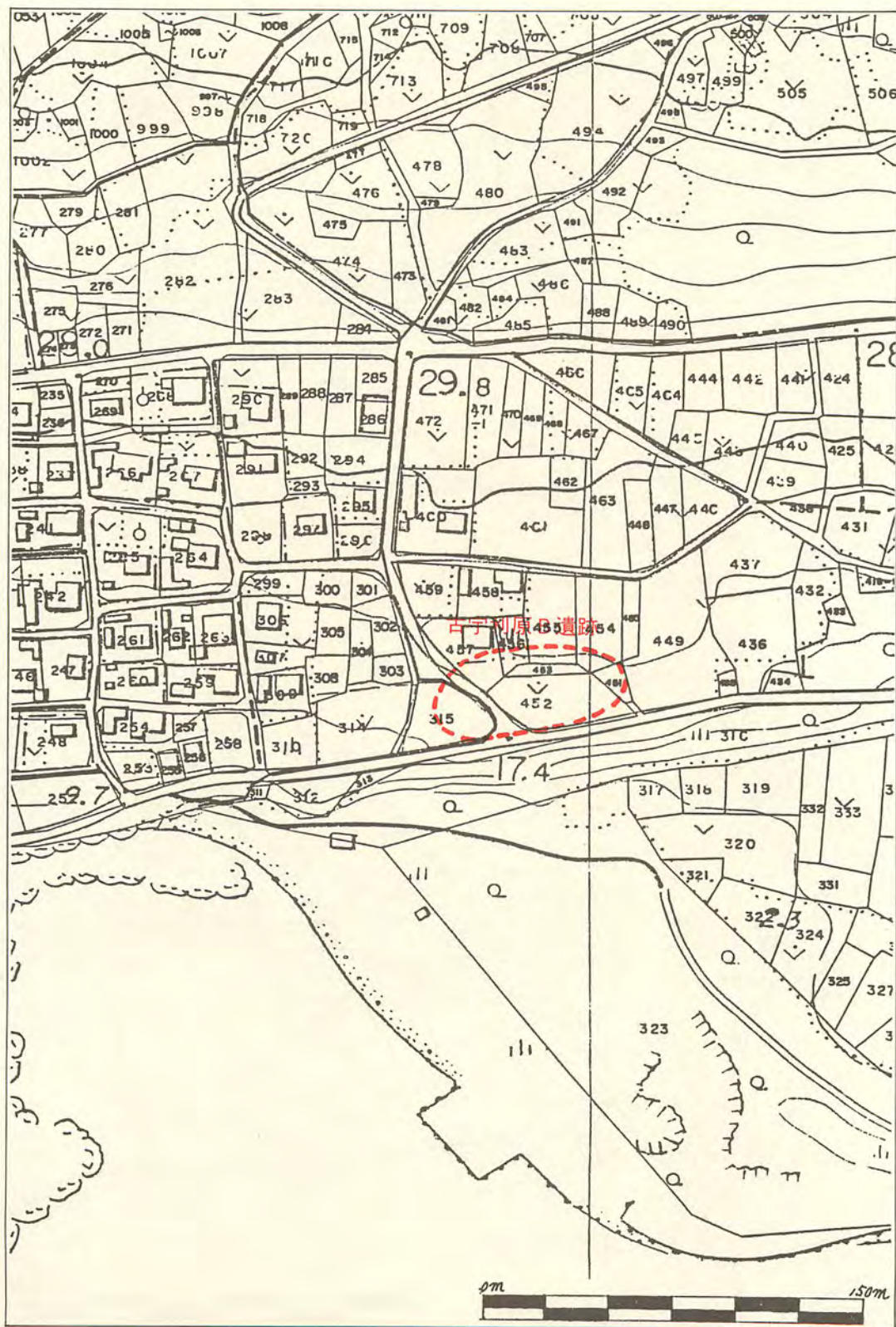
▲ミーミングスクの石積み遺構

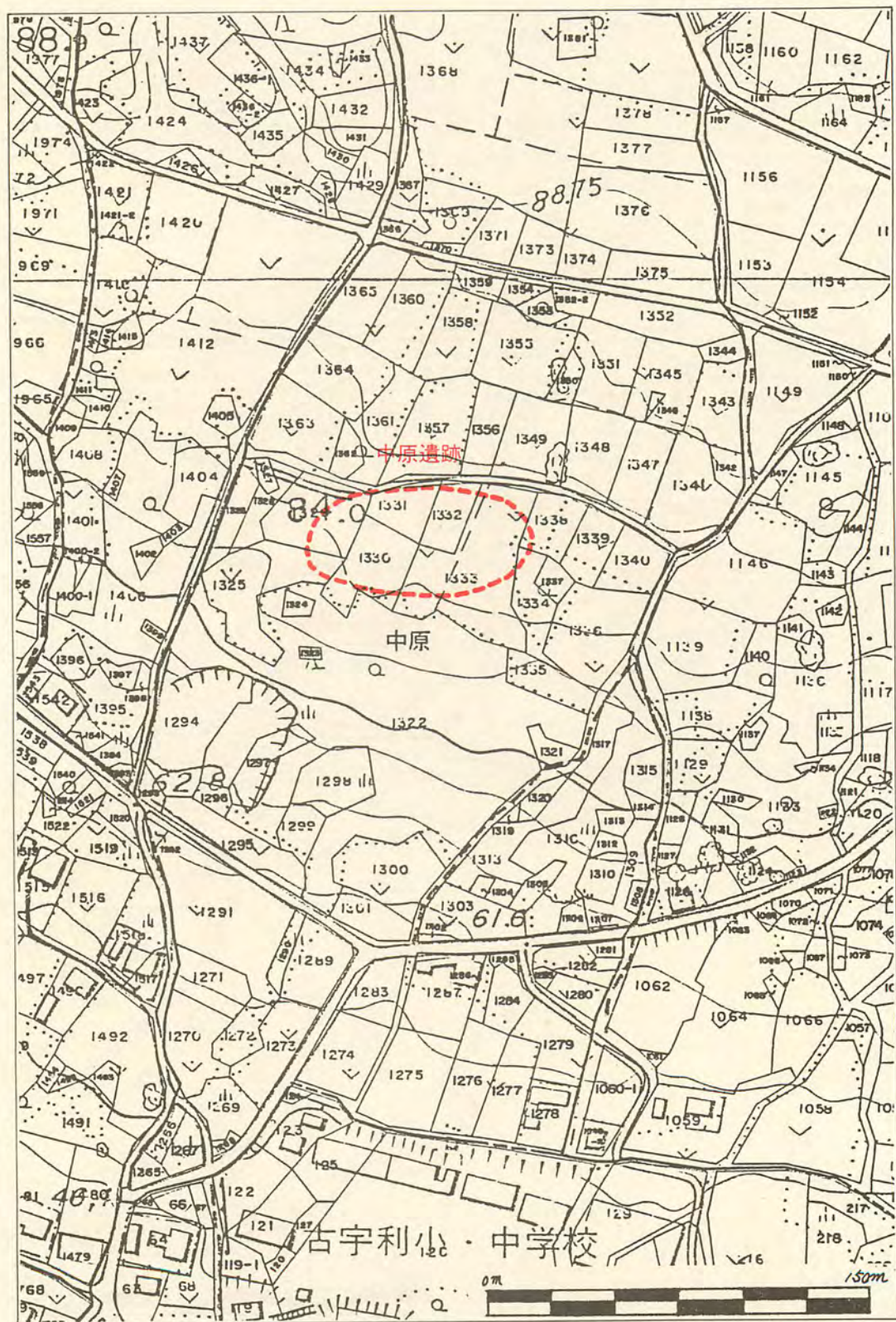


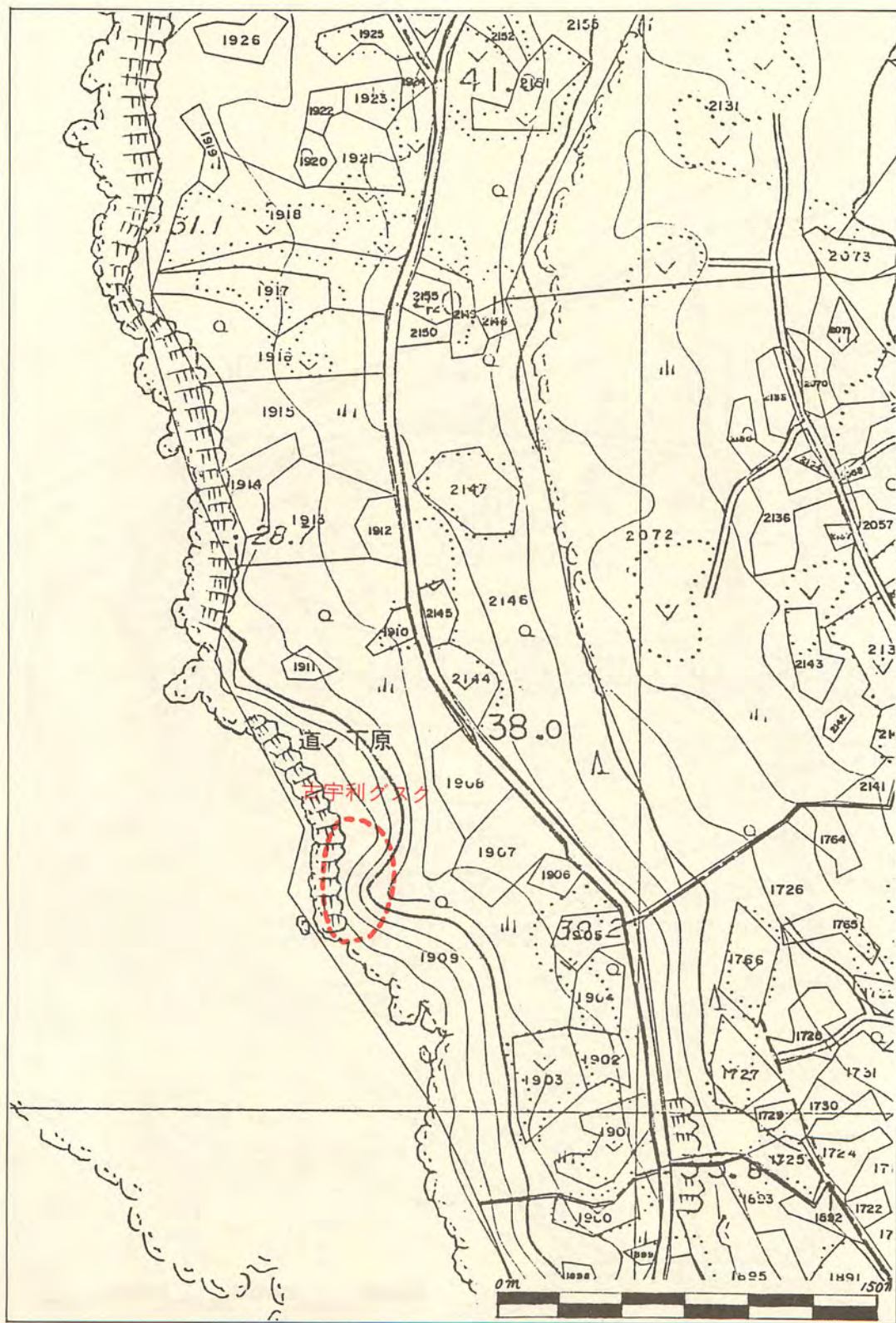
▲同表採の遺物

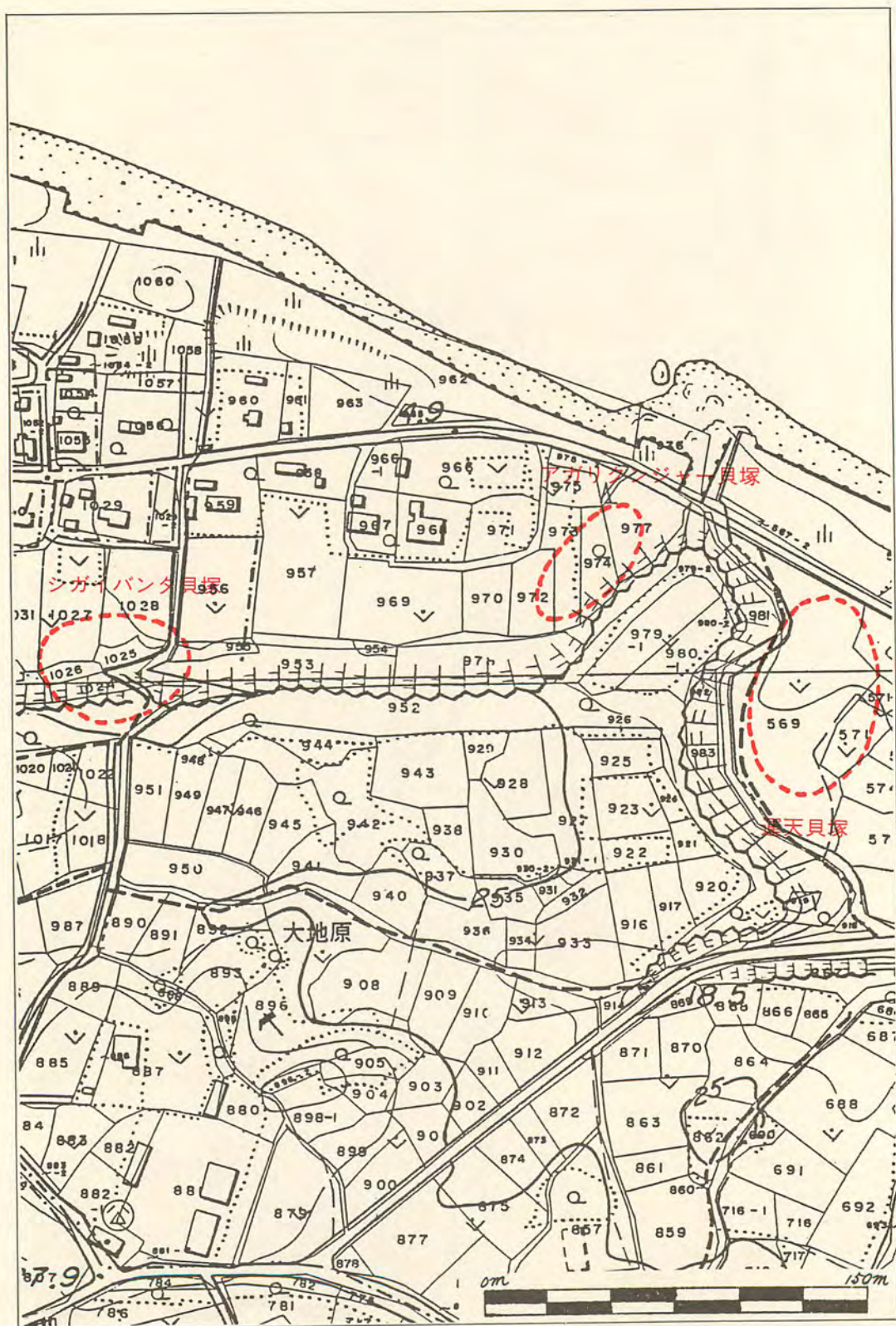
VI. 遺跡分布図



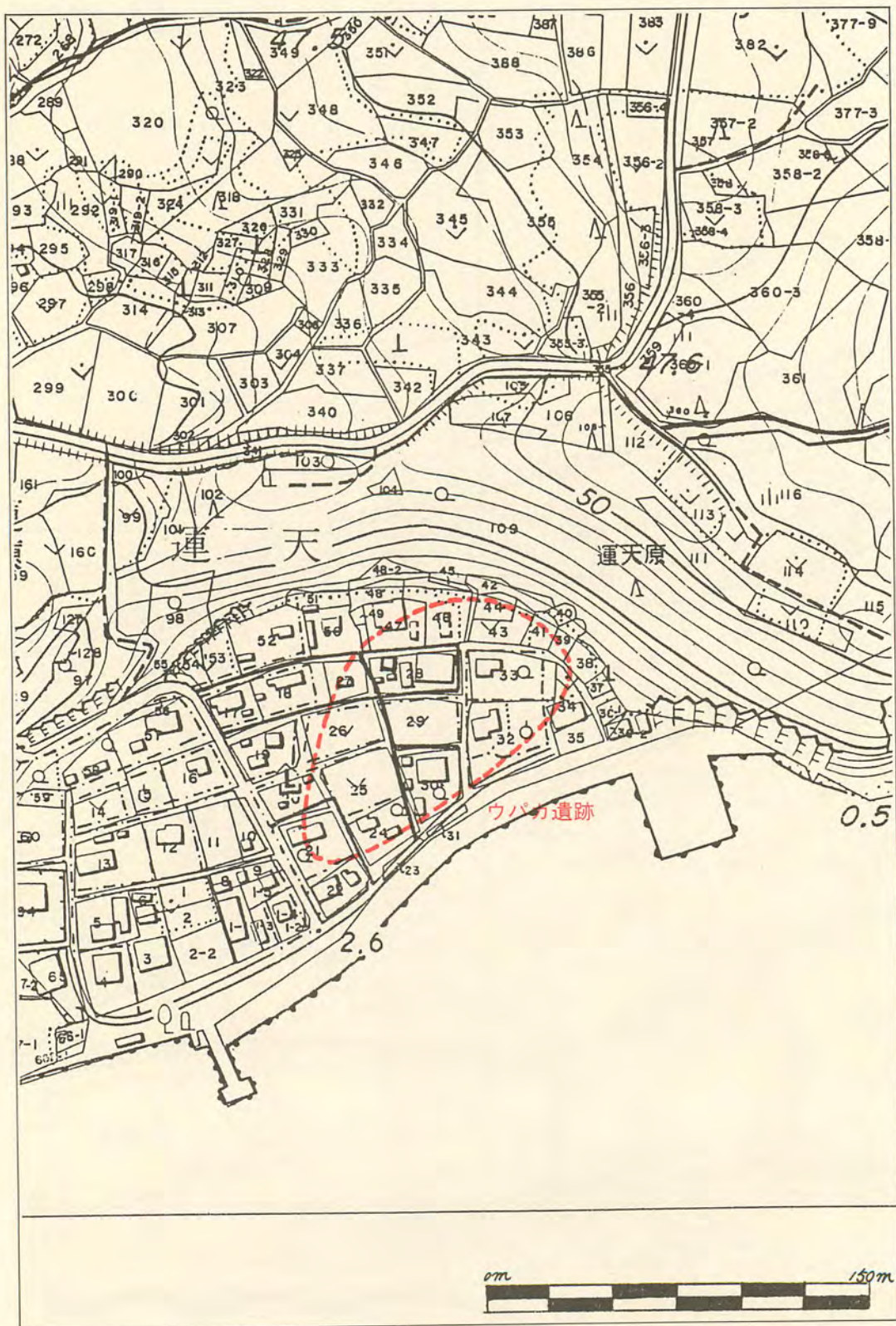






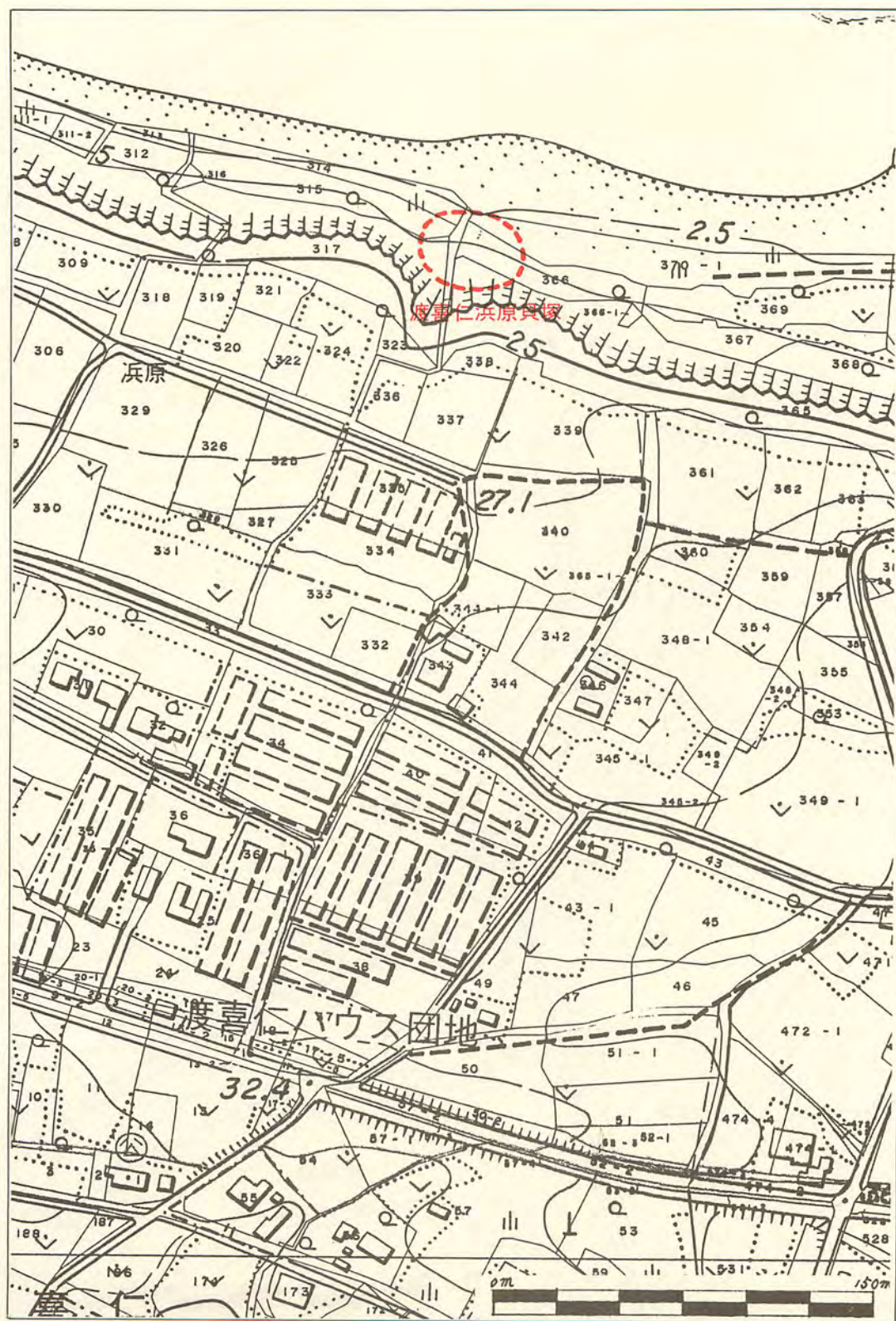


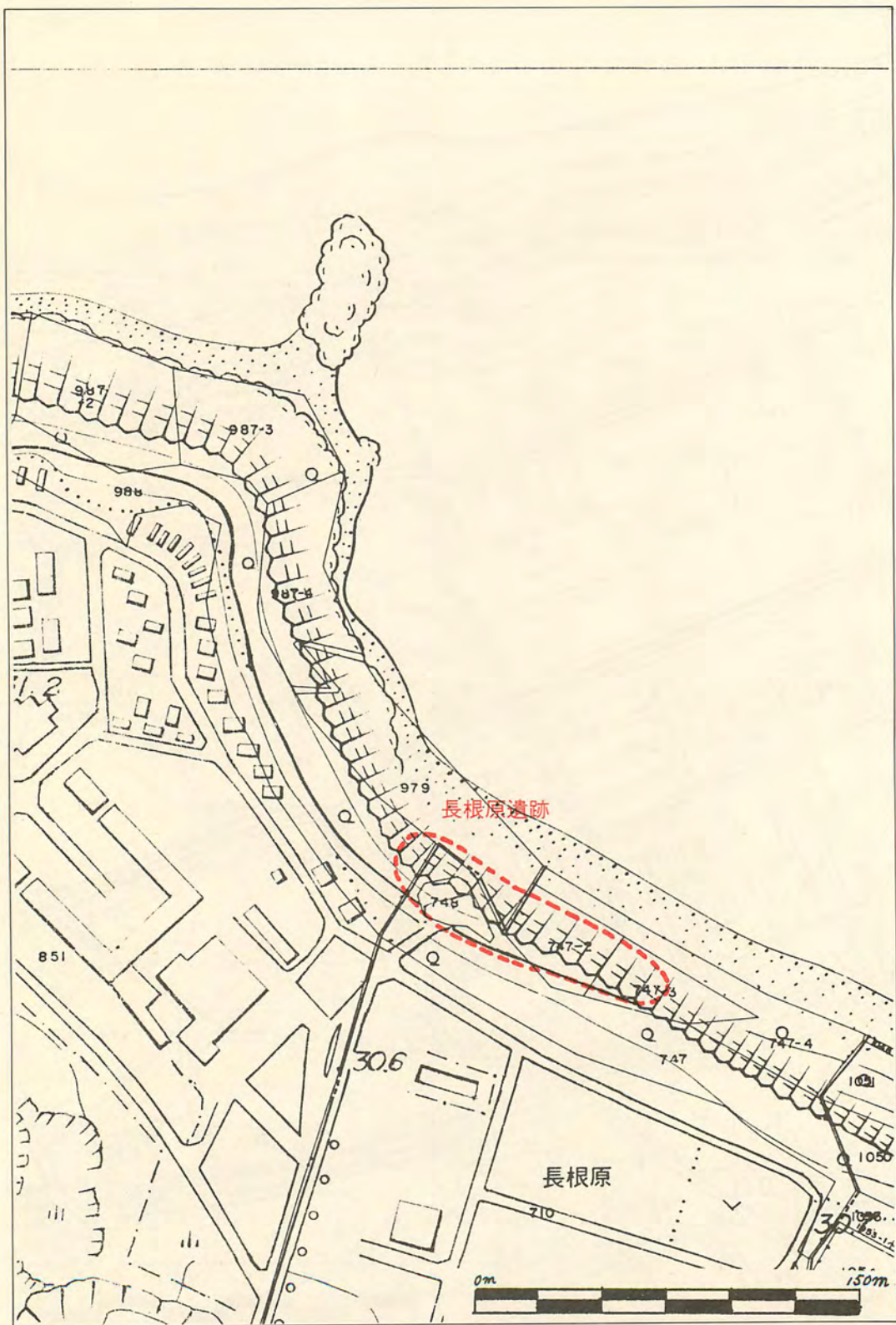


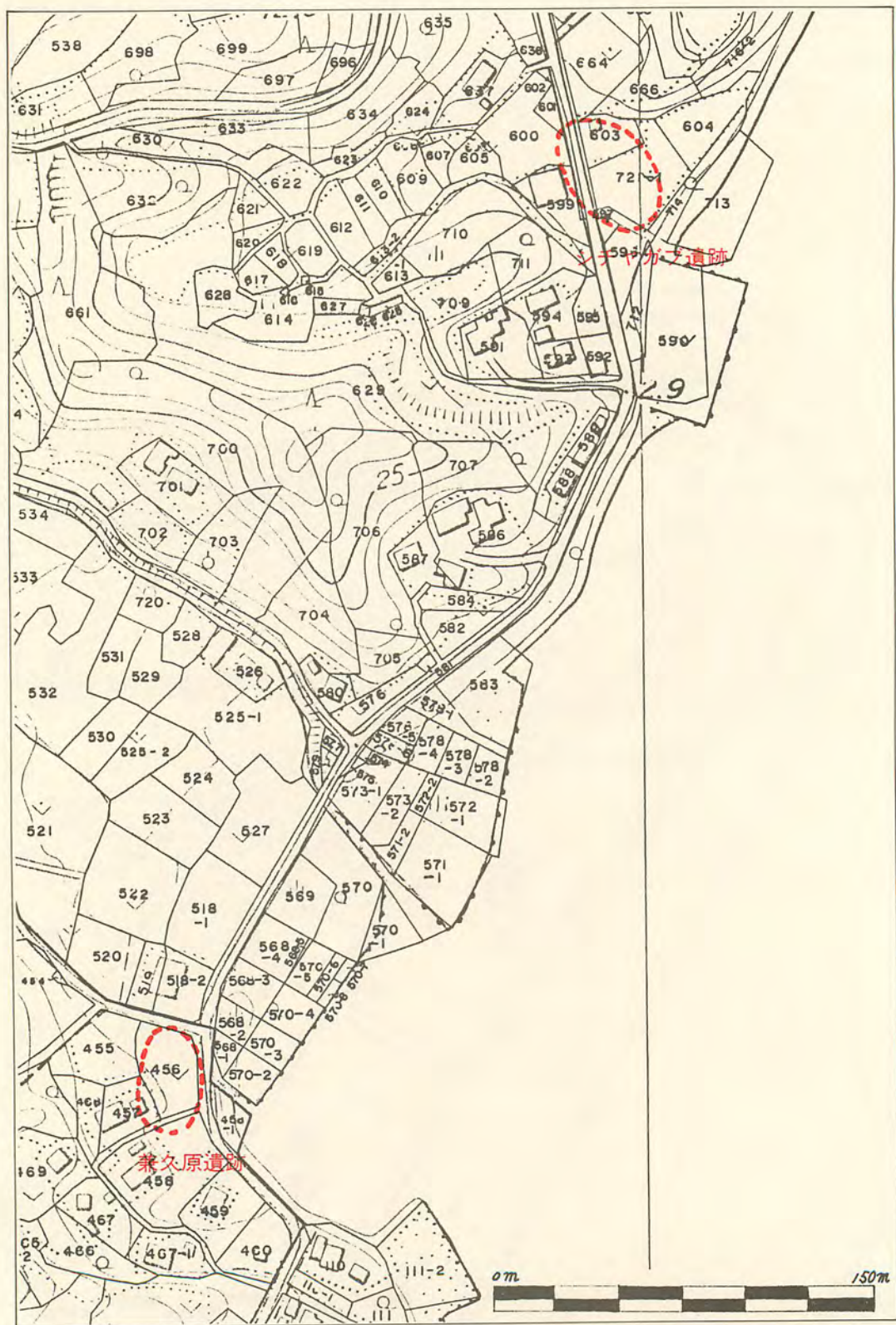


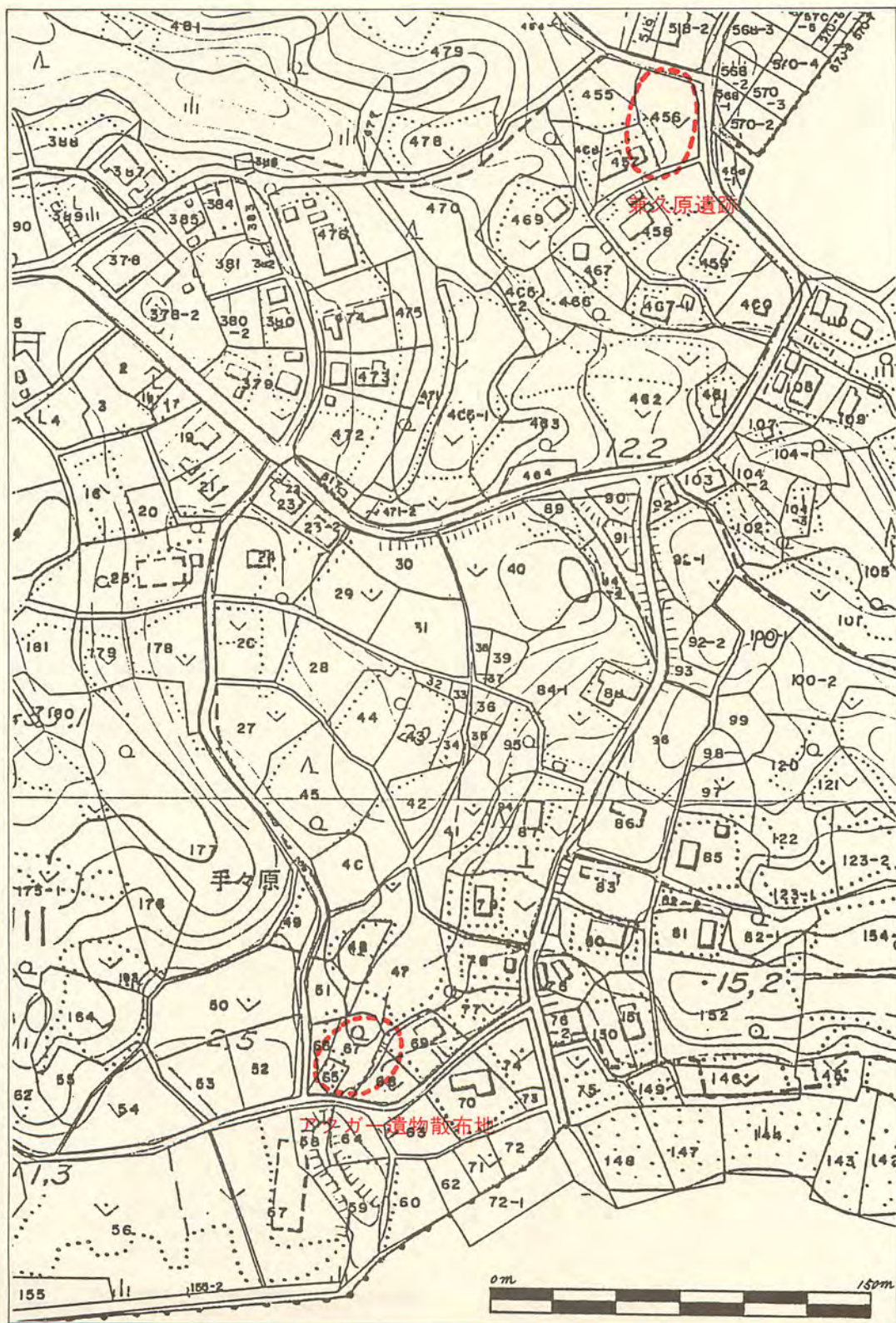


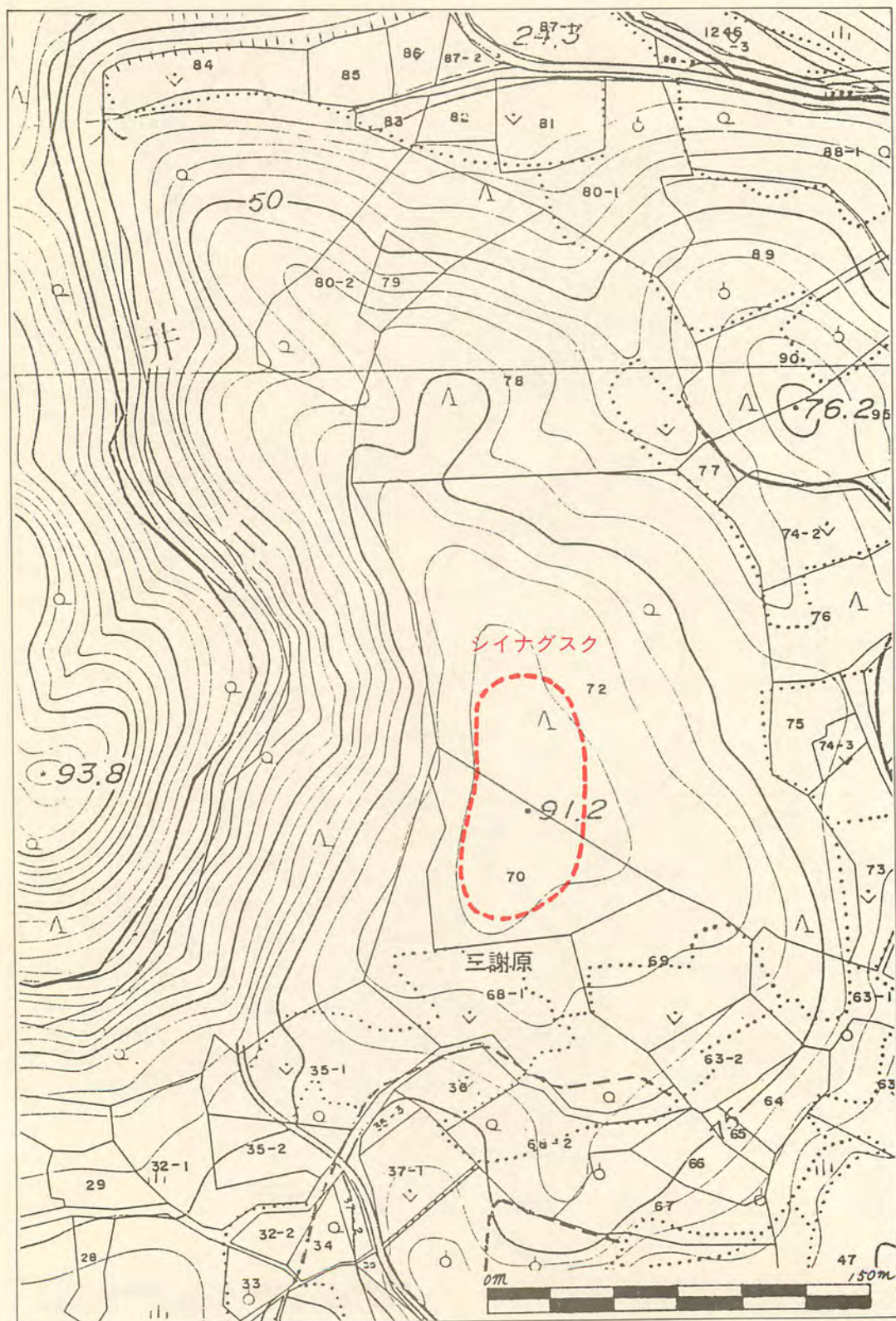


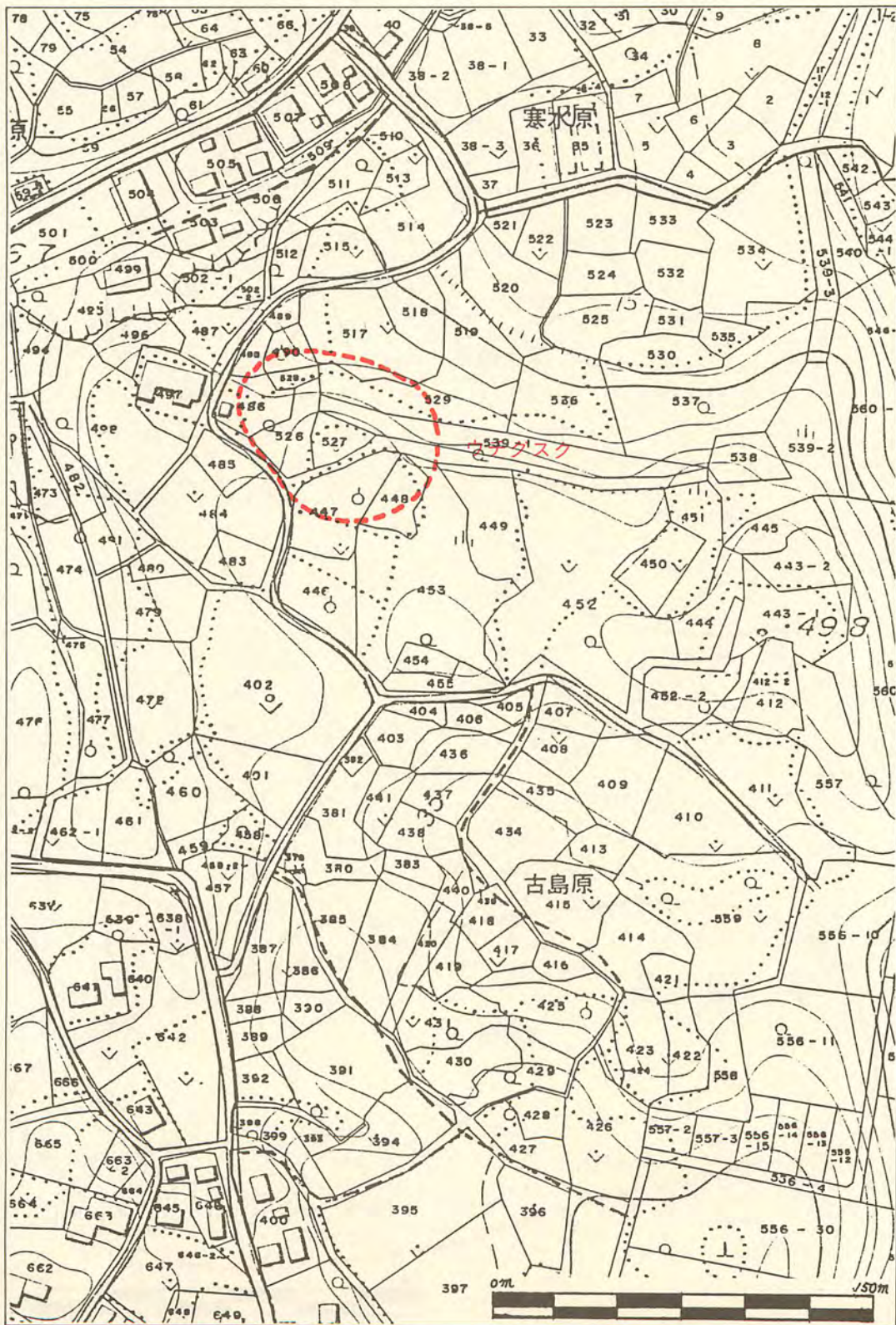


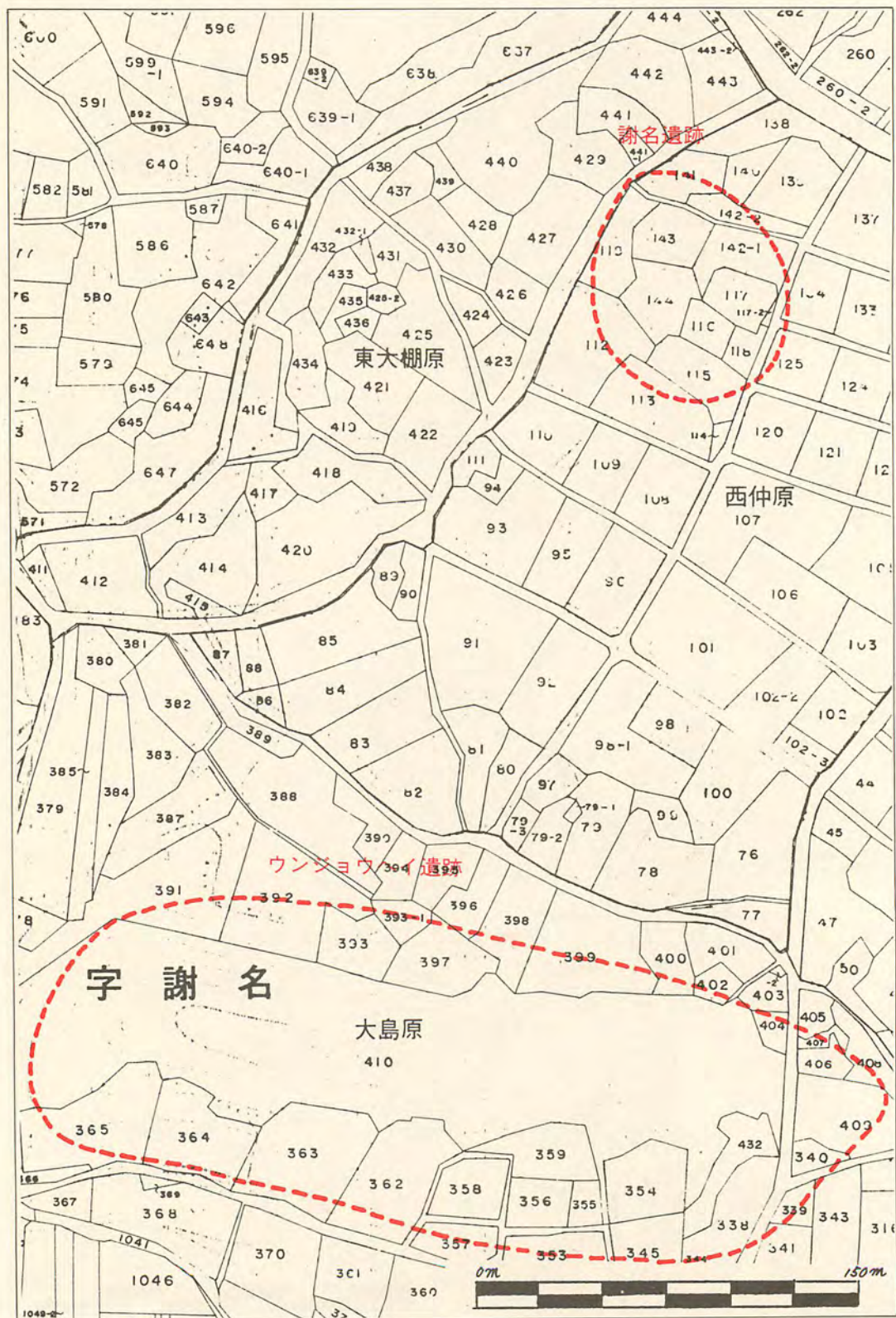


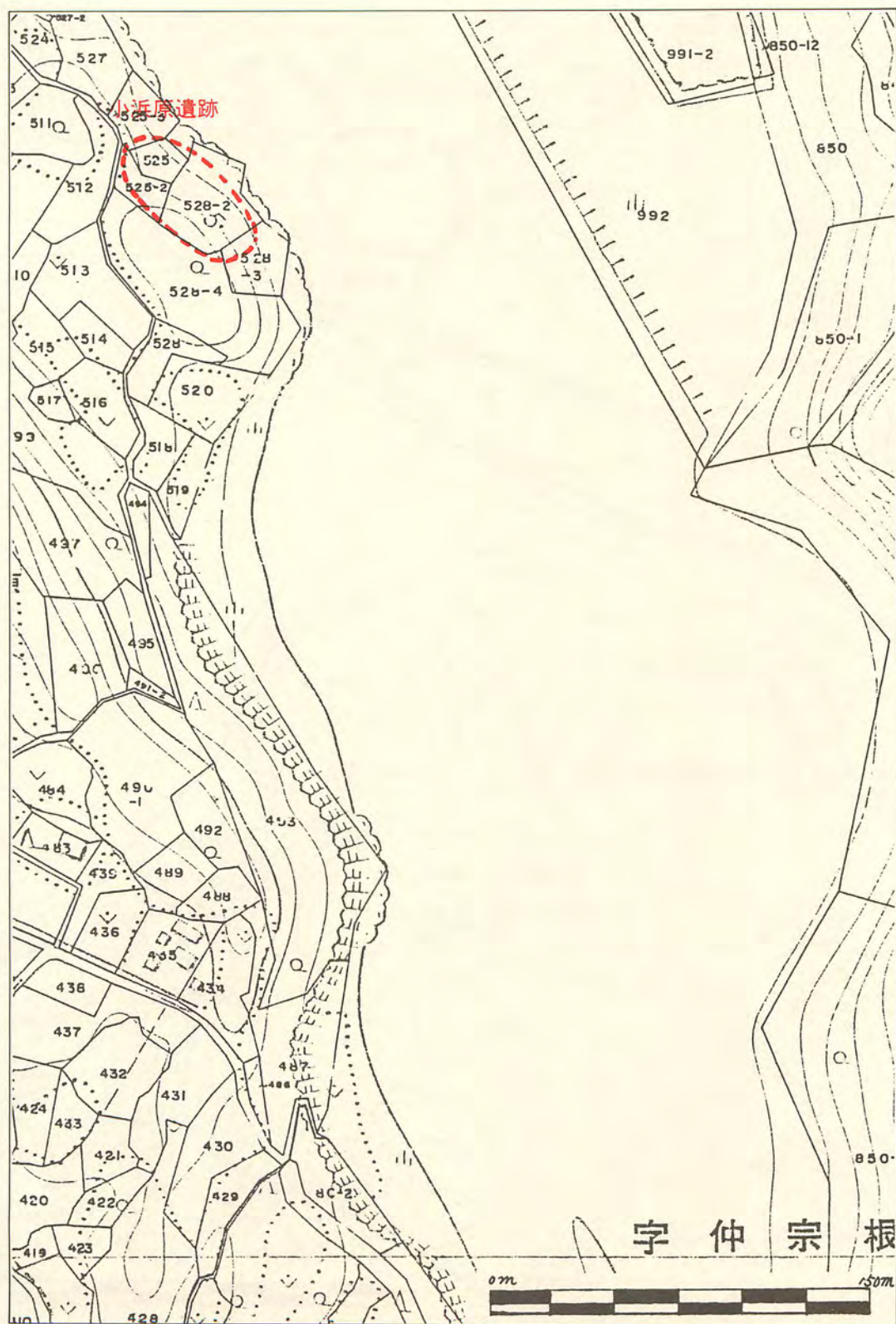




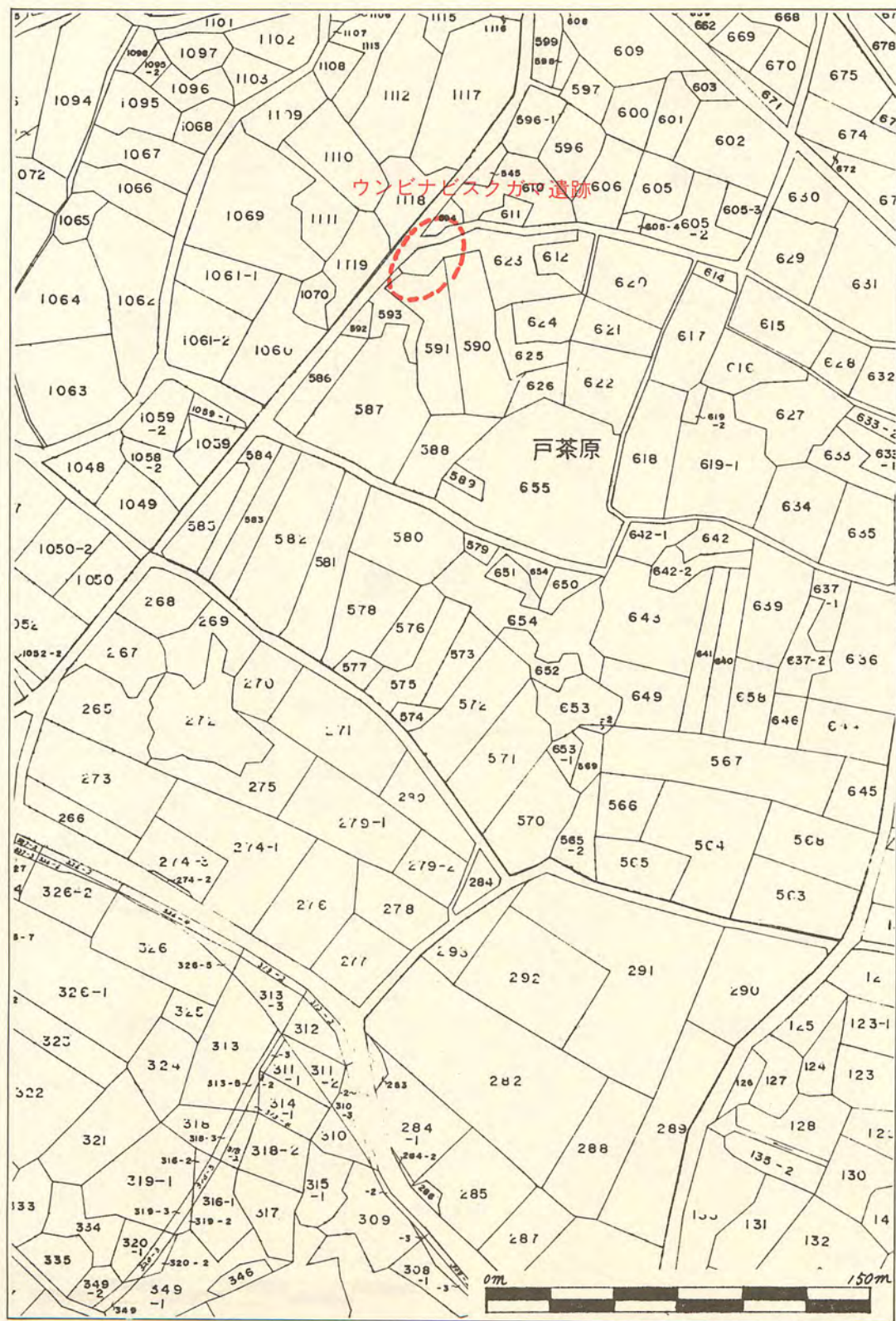


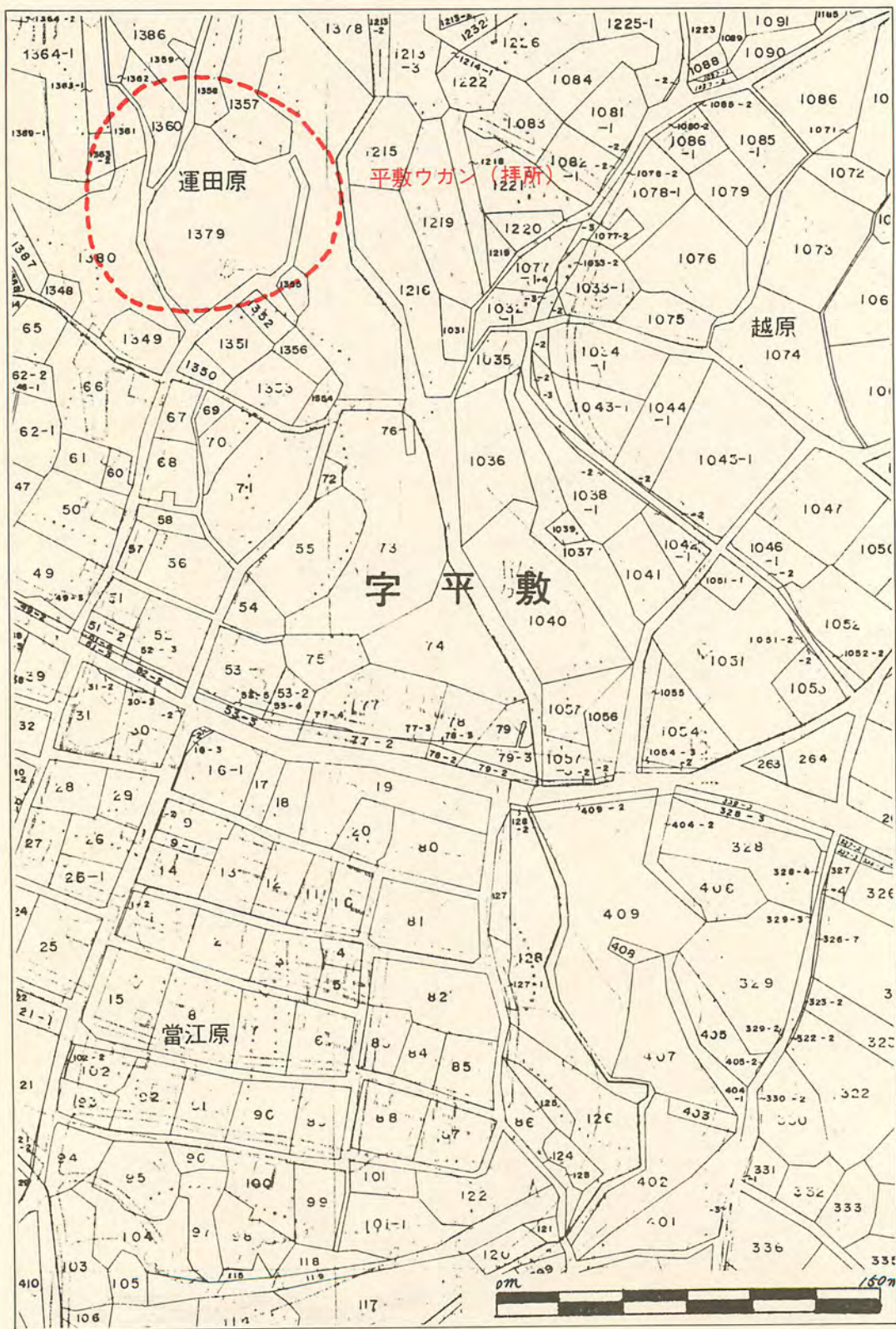


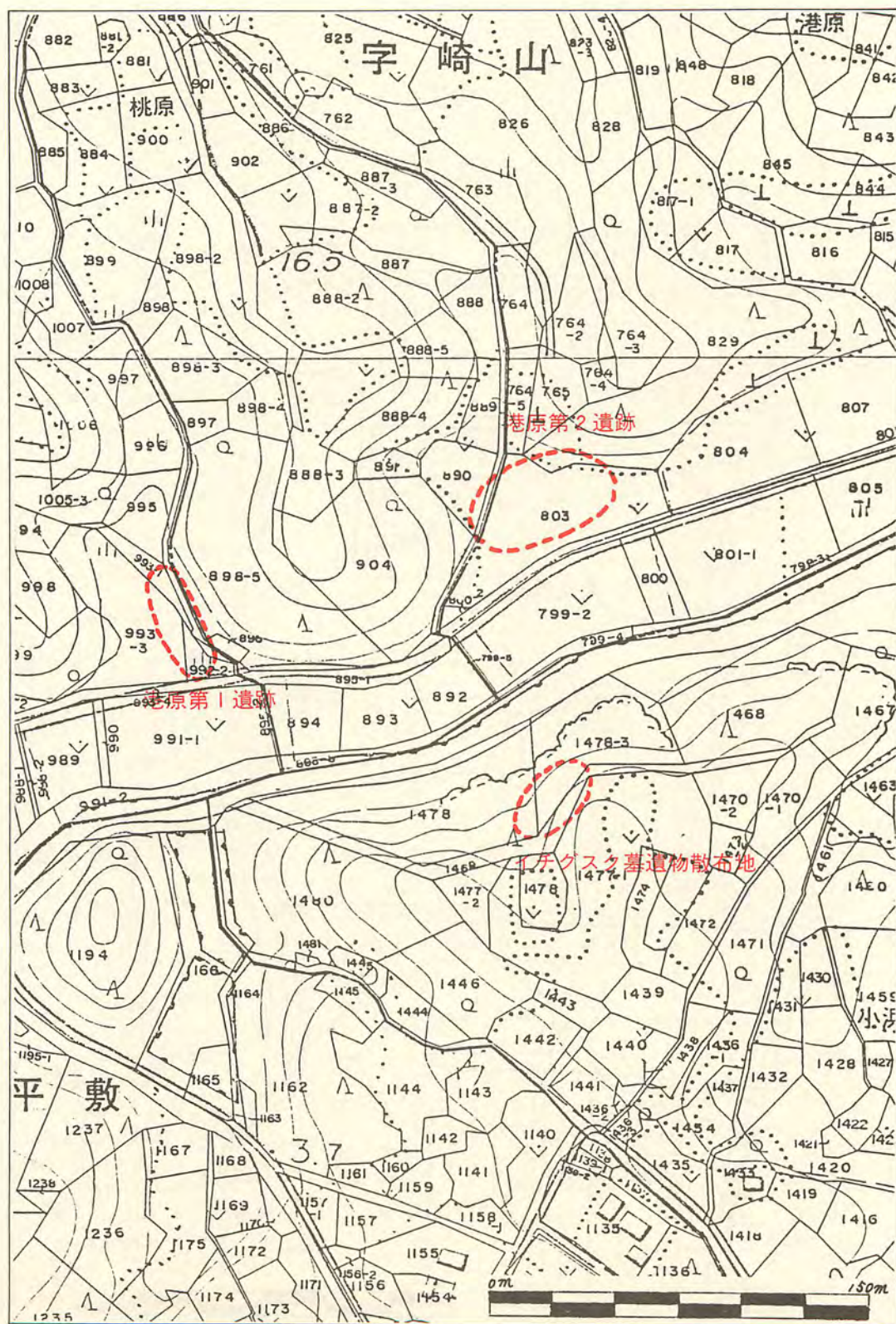


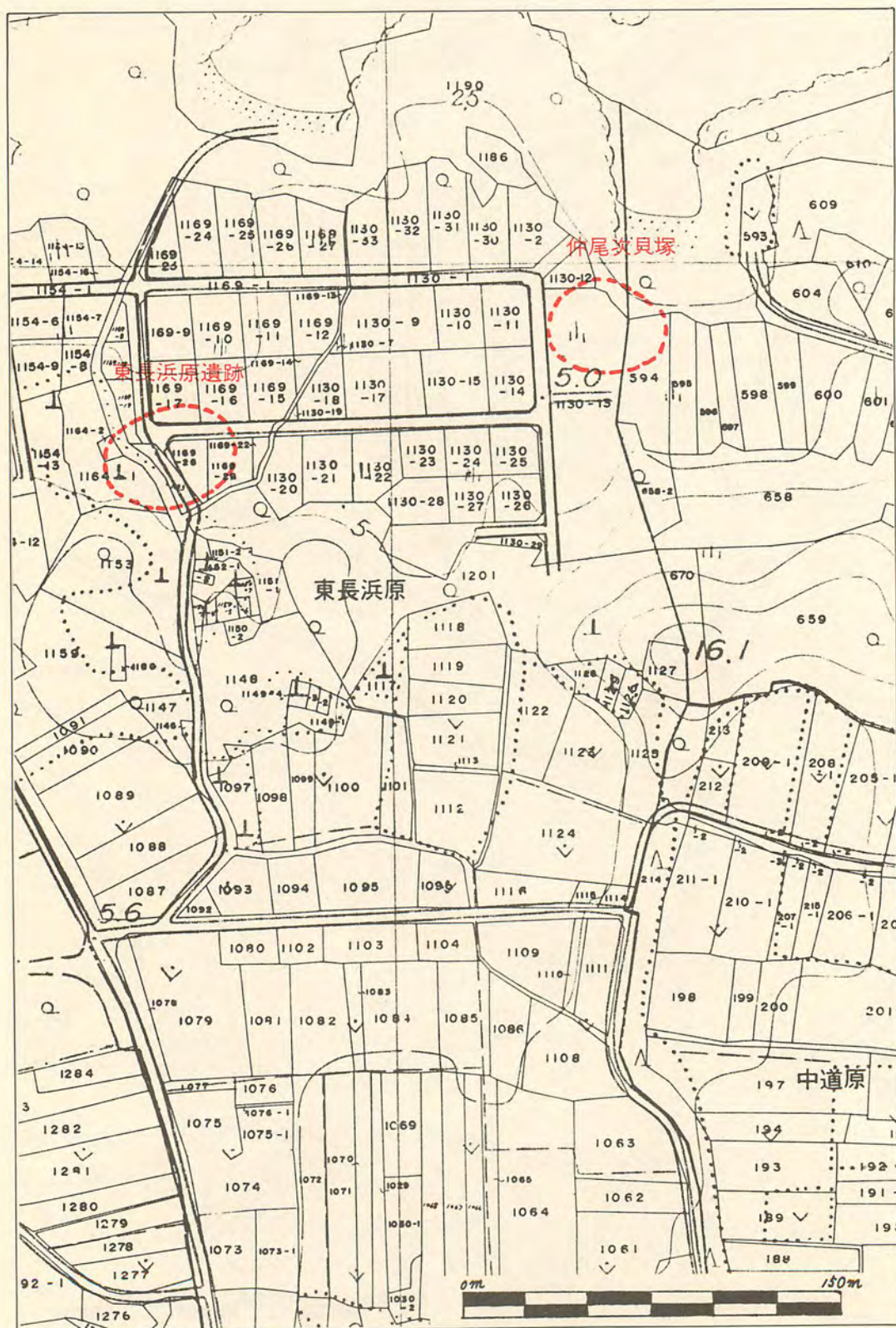


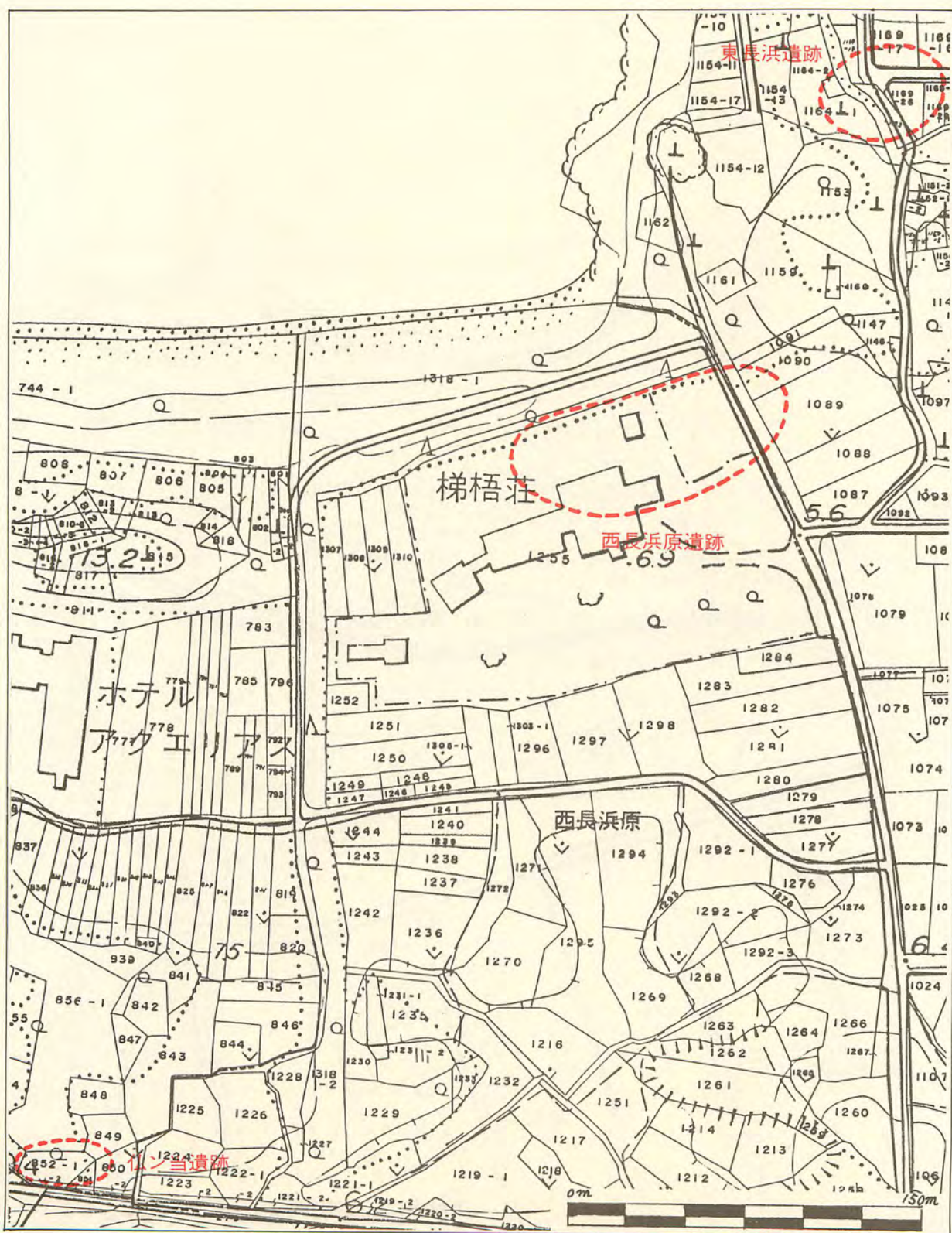


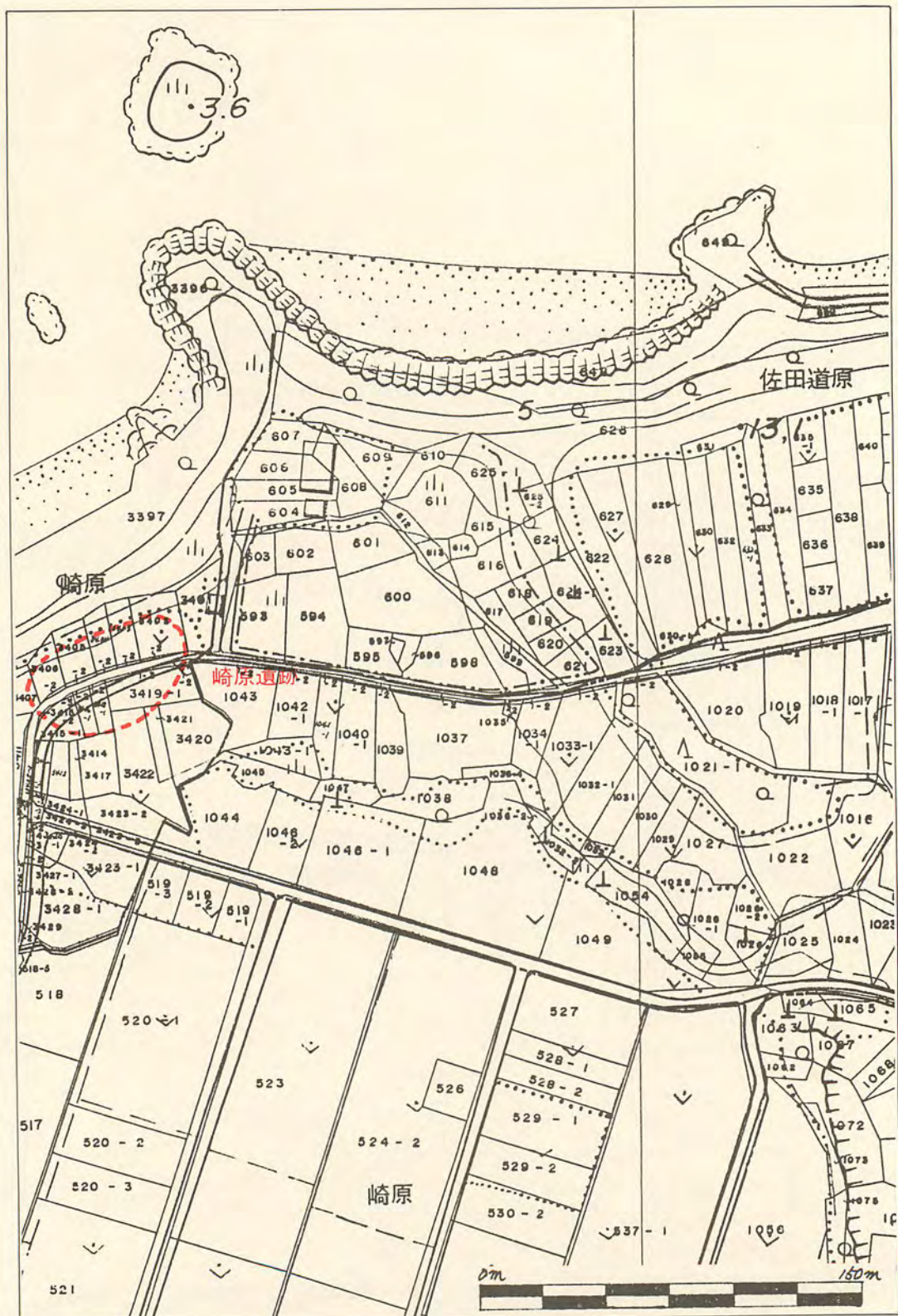


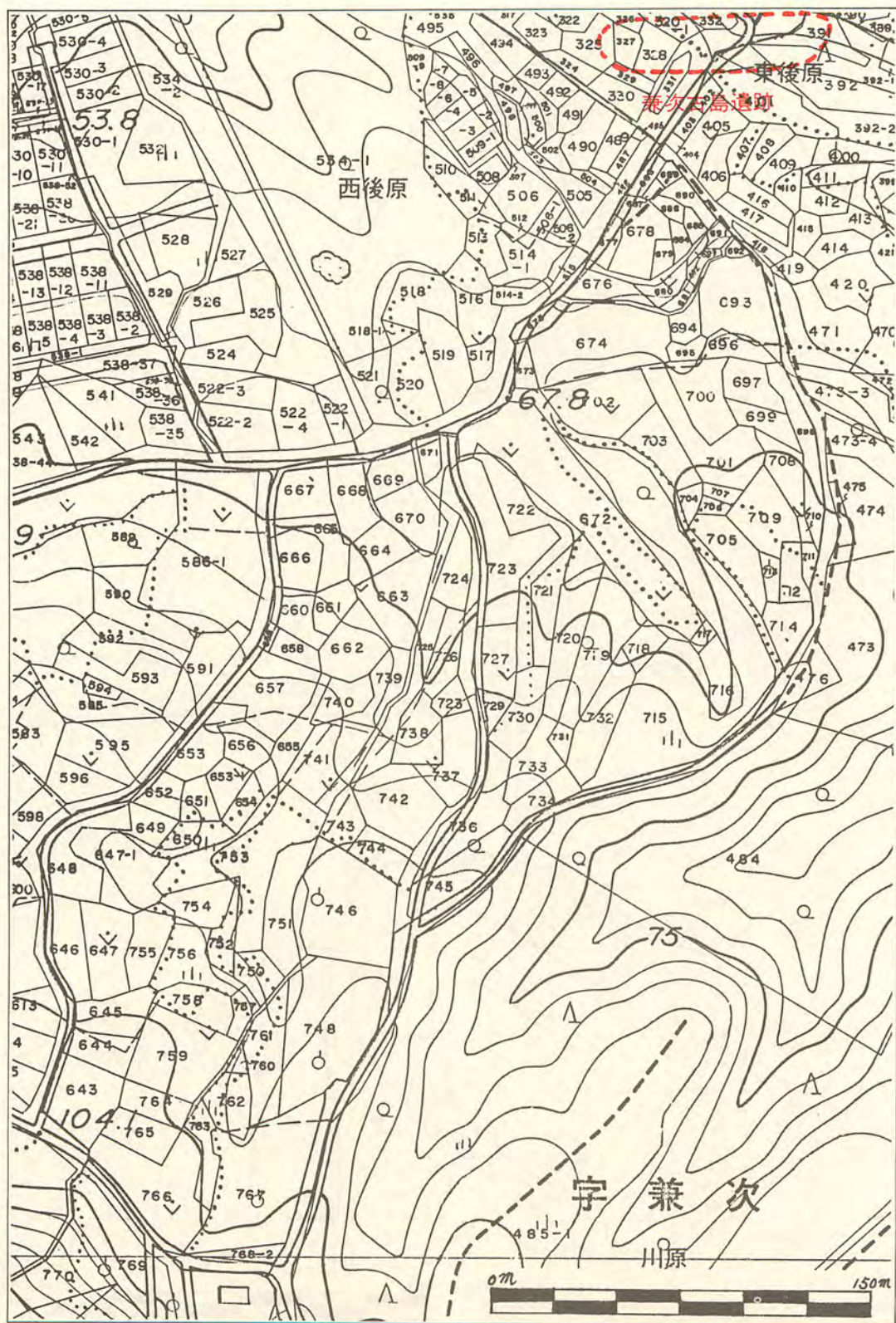


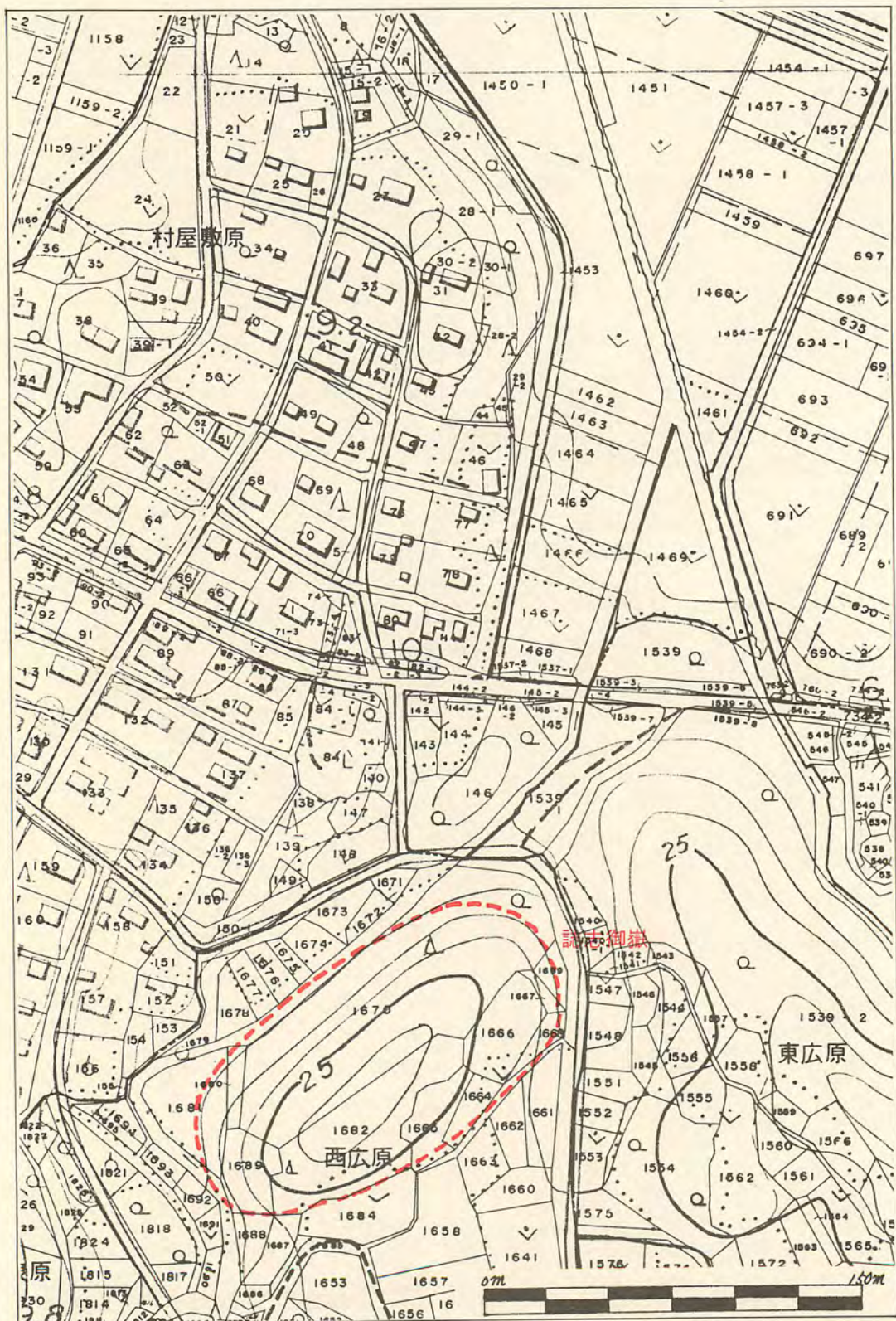


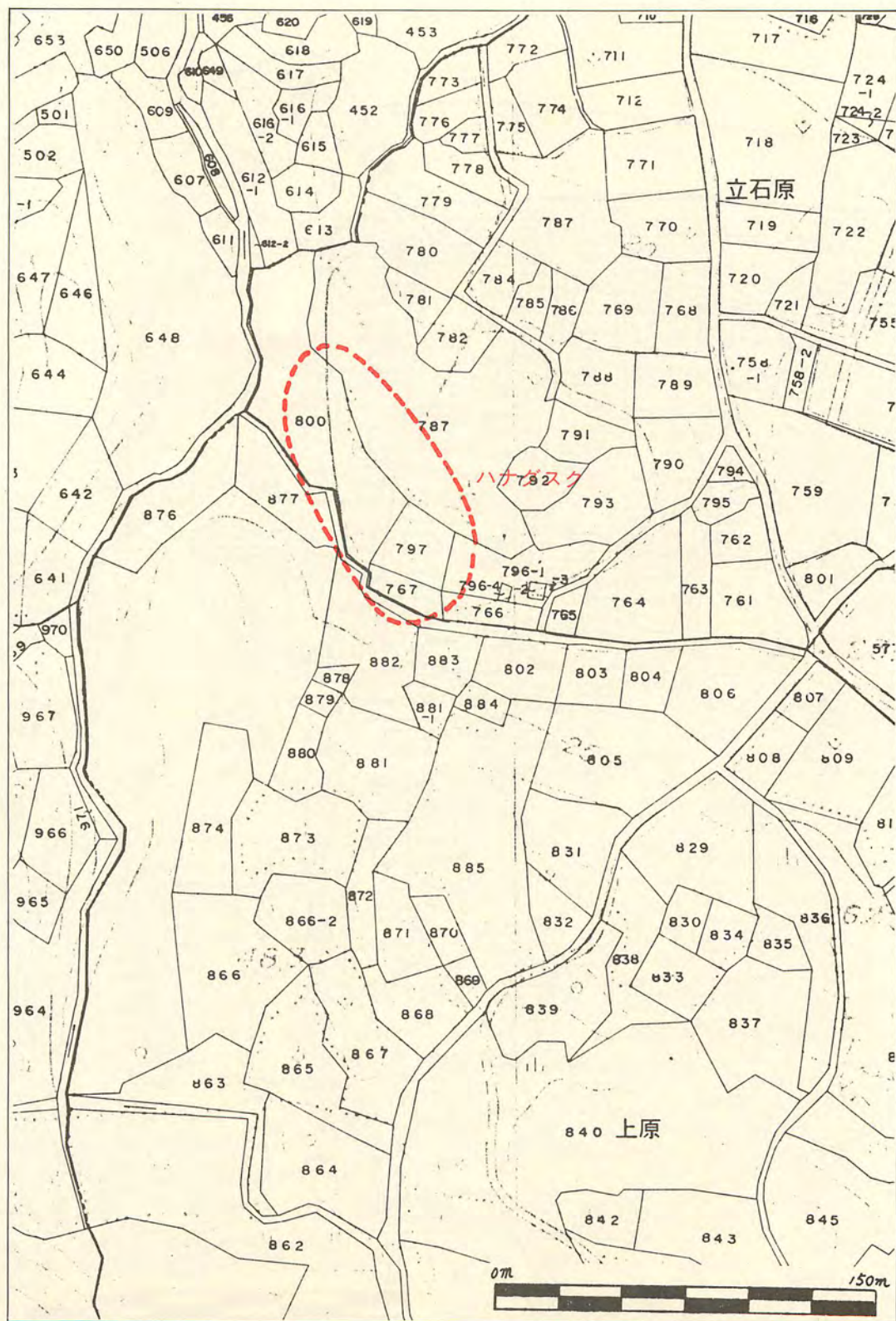


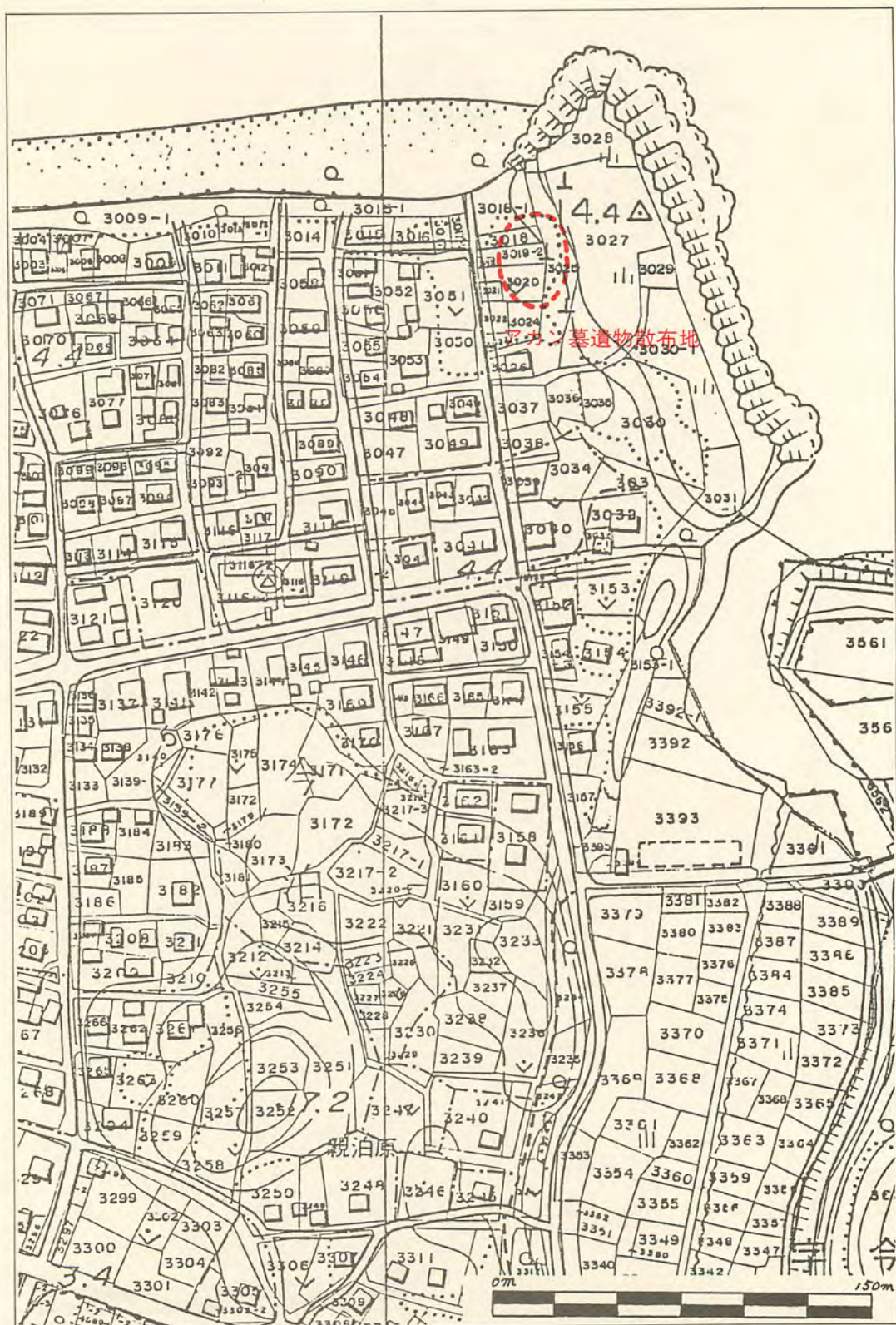


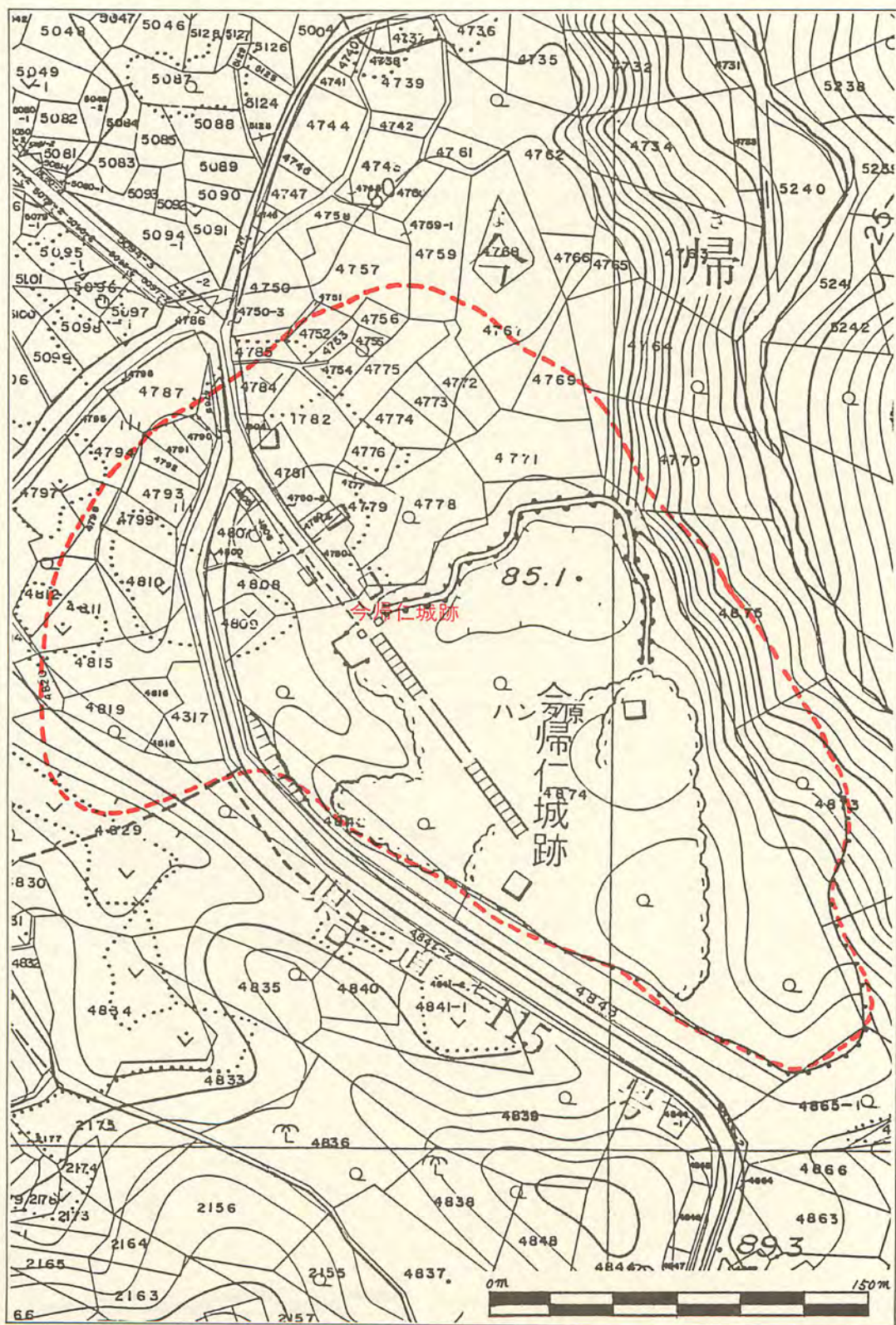


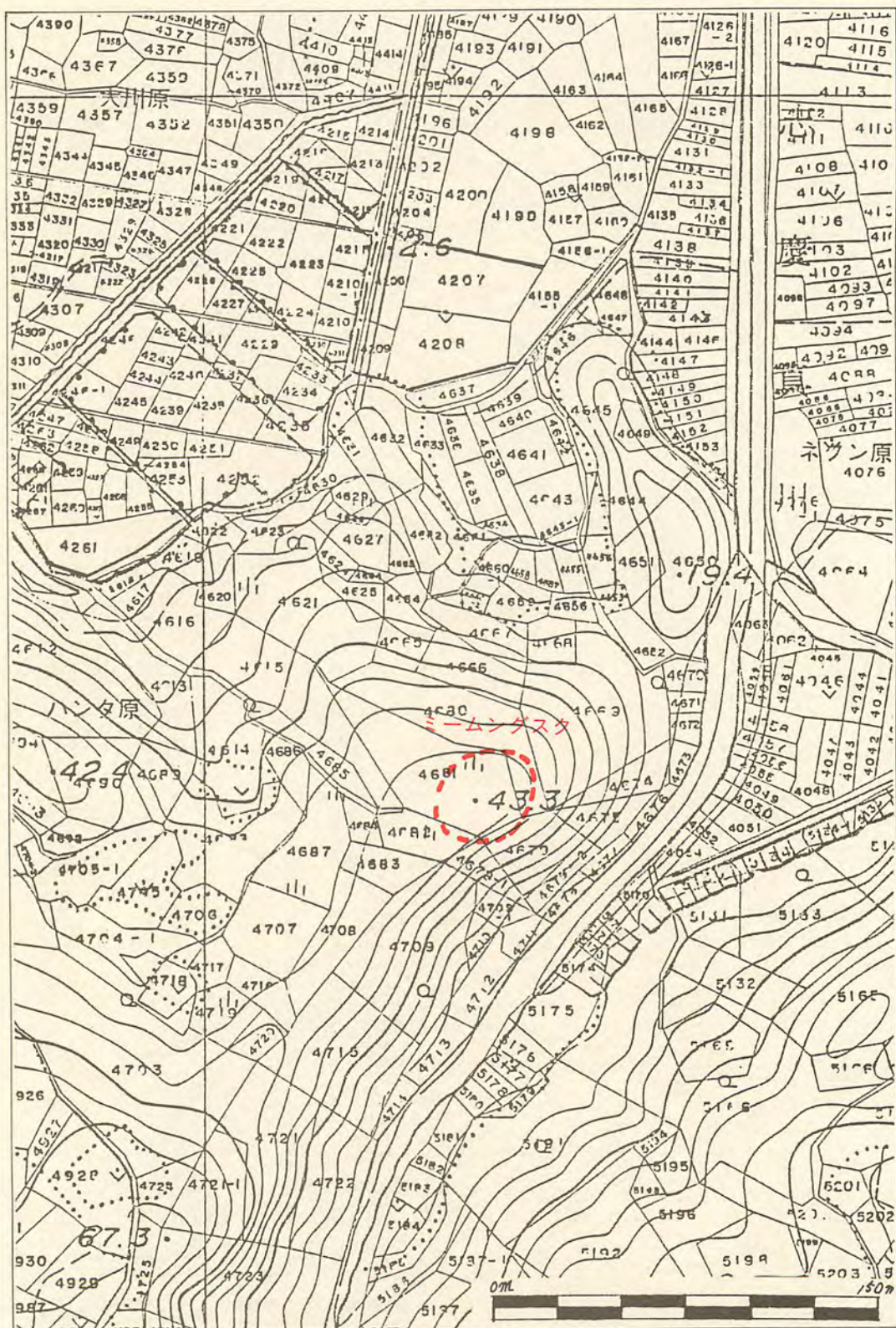












今 帰 仁 村 の 遺 跡

印 印刷 1984年 3 月20日

発行 1984年 3 月25日

編 集 今帰仁村教育委員会

TEL (0980)56-2645・2647

発 行 者 今帰仁村教育委員会

印 刷 沖縄高速印刷株式会社

TEL (0988)89-5513

今帰仁村遺跡分布図

